
コノハナの教典

高坂 堯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コノハナの教典

【Nコード】

N4510U

【作者名】

高坂 堯

【あらすじ】

ジンと花子が苦悩する、コノハナの教典。

ジンの花と大地の華

1ー＊＊＊

ふと、ある武将の名が頭をよぎった。

『武蔵坊弁慶』

ご存知かの源義経の舎弟で、平安末期でも屈指の剛の者ある。母親の胎内に3年も籠っていたそうで、生まれた直後には既に強靱な体つきをしていたらしい。並の大人では、暴れ出したら止められない程の怪力であったそうだ。なるほど、つまり弁慶は、生まれた時から強かった、という風に解釈できる。それこそ、大した努力なしに、屈強な相手を倒してしまう程に。

察するに、それは大層驕っていたに違いない。牛若丸に敗北するまで百戦錬磨であったことから、それは容易に推測できる。更に武術を好み、肉体を鍛えていた。となれば、鬼に金棒。銃や爆弾といった絶対的兵器も当時無いわけだから、まさに最強といって申し分ない。間違いなく平安の世で最強クラスのツワモノである。

……ただし。彼はあくまで『最強』止まりである。決して『無敵』な訳ではない。弁慶だって人間だ。弱点くらいある。いくら最強であっても、弱い箇所があるのである。弁慶は痛みから悶絶するだろうし、気絶してしまう事もあるかもしれない。そもそも、そこは万人の急所なのだ。

そう——弁慶の泣き所。要するに、脛。

「こらジン！ またお水あげるのサボったでしょ！」

「イッ……！！！」

右足の骨に突如発生した鈍い音と痛み。蹴られたのだという状況把握の前に、反射的に声をあげてしまいそうになるのを僕は必死に我慢した。

学校の図書室。それも自習室が併設されていて、多くの生徒がそれを利用して

大声で悶絶などするわけにはいかない。熱心に勉強に励む人たちに、明らかに不快そうな顔をされなくなかった。

鉛筆を滑らすその音が、リアルタイムに耳に留まる。実際それは不快や憤りではなく、嫉妬と羨望なのだと聞いたのは、ずっとずっと後の事だった。

「あの花壇の花はデリケートって前にも言ったでしょ！」

声押し殺して悶絶し、前後に屹立する本棚にもたれ掛かる。聞き慣れた女子の声を尻目に、僕はその後右の脛を押さえて疼くまった。視界が涙で歪む。

痛え……！

これは骨折れたかも知れない。少なくとも青タンになる。そんな危惧を持って患部を摩った。

「何度言えばわかるの?! もう！」

そんな僕に構わず、声の主は僕を罵しり続ける。

「しっ……」

僕は左手の指をたて、空気を読むようにと息を吹いた。

「えっ？」

すると、彼女はハツとした顔をして周囲を見渡すと「ご、ごめんなさい」と言っしてしゃがんだ。

周囲はやはり、不快そうな表情を浮かべて僕らを注視していた。

「もう、ジンのせいなんだから。後で銀歯で銀紙カミカミの刑なんだからー」

「それは嫌だなっ」

彼女はバツの悪そうな顔をした。いかにも不服そうに頬を膨らます。謝れよと言いたくなかったが、ぐっと堪えた。ひとまず、図書室から脱出するのが先決だ。

立ち読みしていた本が床に落ちているのを見て、心中だけで溜息をつく。

「ったく、ほら逃げるぞ花子。皆の視線が痛い」

「うん……」

僕は本棚に手を掛けて立ち上がり声の主——花子の小さな手をとる。そして、さっきまで見ていた本を借りるべく受付へ向かい、出口へと歩いた。必然的にその足並みは速い。

途中、「リア充氏ね」とかいう言葉を小耳に挟んだが、意味がわからなかったのでスルーした。

花子も同様なようで、気にしていないようだった。

まだ知らない知識が沢山あるものだ。そう考えて、図書室から脱出した。

1—*—*

僕の通うこの高校には、中庭に大きな花壇がある。

元々、生物などの実験や授業に用いる植物を育てていたそうだが、今はその面影はない。代わりに色とりどりの花を植えて、学校の景観を良くしようという活動の為に使用されている。各クラス毎に場所が割り当てられていて、自由に植花してよいそうだ。当然ながら、そこは華やかな箇所と閑散としている箇所に二極化していた。

クラスによって活動の盛ん度が全く違うのだ。花より団子の男子生徒が、率先して花など植えるはずがない。よって今の状態は尤もだった。因みに、我がクラスは花子のお陰で前者である。

図書室をでてから10分後。僕はそこにホースで水をやっていた。中庭は立地的に日光はあたるが、雨が入らない。となれば誰かが定期的に水遣りをしなくてはならない。環境委員の僕と花子とその誰かに該当するのは、必然であった。

たまたま楽だと思って入ったのに、面倒なことになってしまった。ホースの先を圧迫して、放流される水を弄びながら少しだけふて腐れる。そうして水をかけおわり、給水口を捻った。キュツキュツという特有の摩擦音が心地よく聴覚を刺激する。

その横には『水遣り当番』と書かれたシフト表が掛かっていた。花子が手作りのものだ。シフト欄にでかく『ジン』と書かれているのが何よりの証拠だ。筆跡も何だか幼稚に思われる。

「僕は中津仁彦だったの」

思わず呟く。

いつからか、物心ついた時には花子は僕をジンと呼んでいた。まあそれはそれで気に入ってるから良いんだけど。

「面倒だなあ」

ホースを片付け終わると、僕は若干の倦怠感を覚えた。

なぜならこの後、近くの大学までいかねばならない。とある大学教授に呼ばれているのだ。

『お父さんがジンを呼んでたよ』

先程の花子の言葉を反芻する。

手を顎に当てると、黒いロングの彼女の姿が脳裏に浮かび上がる。

『私も呼ばれてるから先行くね 水遣りちゃんとやってよ!』

行かねばならない。大学教授——花子の父のもとへ。

1—＊＊＊

「君に会わせたい人がいるんだ」

カラスが鳴くのに対応しい夕暮れ時に、花子の父である浅間教授はそう言った。南側に設えてある窓からは、残念だが夕日を目で捕えることは出来ない。だが橙色の光線が乱反射して、室内を黄金色に染めていた。趣深い。浅間教授の着ている白衣も、同じく白くはなかった。

40代半ば位だろうか。短い髪には白髪がまじっている。

「お父さーん、私も帰っていい?」

九州南部にある自然科学を中心とした学部が多いとある大学。その主要キャンパスにある決して広くない大学の研究室。そこに僕と花子、浅間教授は3人でいた。

研究室といっても、デスクが幾つかあり、光学顕微鏡が並んでいるだけで、大層な施設ではない。ただ植物学者らしくシャーレに入った葉が沢山あった。電子顕微鏡が隅にあったのだけが唯一感動である。初めて見たが、やはり目茶苦茶高そうだ。

その中で花子は脚が回転する椅子に座って退屈そうにしていた。

……ぐるんぐるんしている。

こいつガキだ。

長い黒髪をバサバサさせているのを見ると、思わず苦笑してしまう。体と精神は相関関係にあるというが、それはどうやら真実らしい。

「花子はもう少しまってなさい」

「うーっお腹すいたよー」

余計早く回転するが、父である浅間教授は何も注意しない。

明らかに娘に甘い。だから花子は自由奔放なのだ。父子家庭の娘ってこんなものなのか。

そう勝手に納得して、脱線しそうな話題を戻そうとした。

「で、誰なんですか？ 会わせたいって……」

わざわざ大学に呼んだということは大学関係者だろうか。前に考古学者を目指していると僕が言ったから、気をきかせてくれたのかもしれない。

「ああ、もうすぐ来るはずだから少し待っててくれ」

そんな勝手な期待をしていた所、そう言われたので、僕は借りた本を読もうと思った。

鞆から本を取り出す。かなり古い紙が使われている重厚な感じの本である。

タイトル『日本初紀』

明らかに日本書紀をもじった、日本神話について書かれた本である。先程図書室で借りたものだ。僕はこの中のニニギという神に興味を持ち、読み進めていたのだ。

次はどんな展開になるのか。楽しみにページをめくろうとした丁度その時、

「失礼するよ」部屋のドアがノックされた。

「お、やっときたか」

そういつて入ってきたのは、長身の男。一瞬その大きさに怯んで二度見してしまった。190はあるだろうか。花子と比べるとその大

きさが際立つ。

こんにちわ、と反射的に挨拶を交わす

「彼かね？ 例の子は」

「ああ」 浅間教授は相槌をうち

「仁くん、紹介しようこの大学の天文学部の教授、天野教授だ」そういった。

「あ、ども……？」

白い白衣をまとうその天野教授に、僕は何か不吉なものをかんじた。浅間教授と同じく40代に見えるが、本質的な違いを備えているような気がする。

失礼かもしれないが、第一印象としては『リアル結婚出来ない男』。独特のオーラを纏った教授は、男優ように美形であるが、絡みづらい雰囲気醸していた。

しかし、言わなかった。

……つかなぜに天文学の教授？

1ー＊＊＊

しばらくの後。

「え？ じゃあ卑弥呼は日食が原因で殺されたんですか」あれから既に1時間が経っていた。

「ああ、計算上卑弥呼の没年と一致する」

僕はあのあとずっと天野教授と話していた。花子は実につまらなそうに机にふせ、浅間教授は顕微鏡を何やらのぞいている。いつの間にか日が落ちていた。

「天文学と歴史にそんな関わりがあったなんて……」

「面白いだろう」

「はい！」

僕はすっかり天野教授をリスペクトしてしまっていた。

「……おっと今日は挨拶のつもりでできたつもりが……」

その後天野教授は高そうな腕時計を見て顔をしかめる。明後日の土

曜日に、僕と花子に頼みごとがあるらしい。

「すまんね、随分時間をとらせてしまつて」

「とんでもない！ 面白かつたです」

天野教授は氣を使つてくれたが、史実学者を志す者として、実に有意義だつた。

「いや、浅間教授の娘さんに……」

「あ、ああ……」

語尾に（汗）が付きそうな声を僕はあげる。花子は脚をブラブラとさせ、いかにも帰りたいそうにしている。デスクに顔を伏せ、うなだれていた。

「おなか……へつた……」 ぎゅうるるるう

とても女の子とは思えない音を出して、必死に帰りたいアピールをする。こうなつては仕様がなない。

「……じゃあ僕らもう帰りますね」

「ああ」

そう言つて花子に歩みよりながら、浅間教授を一瞥する。

「あ、俺は今日も帰れないから」

浅間教授は言う。

植物の研究者である彼は、大学に泊まりがけなことが多い。特に最近は大発見があつたそうで、滅多に家には帰らない。助手を持てば研究も少しは楽になると思うのだが、彼は人任せに出来ない性らしく、それをしない。

「行くぞ花子」

「あーやつと帰れる」

頭をワシャワシャして促す。花子が背伸びを上半身だけで行い、それに従つた。

浅間教授が睨んでいる氣がしたが、無視してみた。

「それじゃあ、失礼します」

僕らは部屋を出ようとした。が、

「おいおい何か忘れてるぞ」

浅間教授が一冊の本を差し出した。

例の『日本初紀』。読んだまま忘れていた。すいません、といって受け取る。

「それじゃあ」

「ああ、また土曜日頼んだよ」

部屋を丁度出た時、天野教授が微笑みながら言った。僕は何だかそれを奇妙に感じたが、やはり気にしないことにした。

1—**

九州の某県某市のマンション。その403号室が今の僕の住居である。

家に帰って夕飯を作り、花子を呼んで一緒に食べたあと。僕は食器を片付けようと立ち上がった。

「あ、そうだジン、このあとお花屋さん行こうよ」

「また花かよ、花の女子高生が花に夢中ってどうよ」

「だー、ジン意地悪だー。ジンだって本ばっか読んでるくせに」

「うるせー。勝手だろ」

「ぶー、花屋に連れてけー」

「はいはい、明日な」

いつもの会話。

番組を見てもいないのに、テレビがついている。ゴールデンタイムだというのに、見たい番組がないのだ。しかし、テレビから供給される音がないと落ち着かない気がして、どうしてもつけっぱなしにしてしまう。お蔭で電気代がかさんで、大家さんに注意されてしまったことがある

「そういえば今月もう家賃払ったか？」

花子は隣の402号室に住んでいる。

「いや、ウチ1年分一括で払ったから、そういうのないんだよね」
去年の中学卒業まで、隣の宮崎県に住んでいたのだが、父、浅間教授の異動の関係で引越をしたのだ。ちなみに僕も中学まで花子と

同じ町にすんでいた。

ただ、事情があつてここにきた。

僕の両親は農業を営んでいる。もし地元の高校に通えば、間違いなく農業をやらされることが目に見えていた。

だが僕は考古学をしたい。そこで近県で最も偏差値の高い今の高校で学びたいといい、無理を言つて1人暮らしをさせてもらっているのだ。

花子の隣の部屋に入居したのは、あくまで偶然。

決して花子を追っかけてきたわけではないハズだから。あくまで偶然、偶然。

「ふいー。食った食った」

花子が行儀悪く寝転ぶ。

「食つてすぐ寝たら牛になんぞ」

花子はチビの癖によく食べる。その小さな顔をしかめると

「んじゃあ私お風呂入ってくんね」

そういつて自分の部屋に向かつていった。どうせならこの部屋の風呂を使えばいいのと思うのだが、やはり女子高生、意識するところがあるのだろう。

僕は食器を片付けたあと、鞆から『日本初紀』を取り出す。
なかなか面白い。

しかし、日本神話の知識が浅いので、わからない箇所がいくつもある。明日、大和爺さんに話してみようかな。そう思いながら僕はそれを読み進めていった
夜が更けていく。

1ー＊＊＊

「えへへへへっ エへへっ」

……ぶ、不気味だ。

花子が気持ち悪い笑みを浮かべている。不気味だ。

さっきからずっとにやけ続けている。手に一杯の花を抱えて。

「何でそんなものが嬉しいかね」

金曜日の午後。

僕らは住宅街を歩いてとある場所へ向かっていた。昨日の約束通り、花屋によってから。

共に行きつけの花屋を尋ね、花を幾つか買った。花子曰く『金魚草』という超珍しい花を店主がくれたらしく、気分が高揚しているらしい。

つか行きつけの花屋のある高校生って…

「この金魚草はね、一生に2、3度しか花をつけないんだよ」
花子はいう。

「イタリアには一杯あるんだけどねー。日本には全然ないんだよねー♪」

「ふーん、それ持とうか」

「いいや。花がケガれる」

「はあ?!」

沢山あるので、小さい花子には辛そうに思ったのだが、拒否された。

「全く。そんなに好きならバラ風呂とか入りゃいいのに」

「……バラ風呂」

「いや真剣に考えるなよ、冗談だから」

「もう入ってるんだけど。毎日」

「えええっ!」

もしかして風呂だけ自分家に入ってるのはバラ風呂の為か。恥ずかしがってではなく、バラ風呂の。

……ダメだこいつ。ついていけねー。

そんなこんなしていると、道の奥に小さな鳥居が見えてきた。
大垣神社。

詳しく知らないが、かなり古い神社であるそうだ。今日はその神主に、歴史の事を聞こうとやってきたのだ。

正直ウキウキする。神主はかなり歴史詳しいから今日もきっと面白い話が聞けるに違いない。そう勝手に期待を膨らませていた。その

時、

「げっ……」

「……あっ……」

僕は見たくないものを、見てしまった。

古びた木造の鳥居の元。赤いチェックのスカートに、紺のブレザーの制服を着た女性。僕らが通う高校のものではない。近くの私立高校のものだ。まるで人生そのものが退屈と言いたげに、大あくびをあげノソノソしている。

「げっ……」

彼女は一度はそのまま鳥居をくぐろうとしたものの、僕が漏らした声に反応すると、ニヤリと笑った。

住宅街の車1台分しか道幅のない道を、スタスタ歩みよってくる。一瞬全力で逃げようと考えてはみたが、断念した。花子が花をもっている。

「やーやー、誰かと思えばお馴染みのカップルではないですか」

……最悪だ。

「紅さんだ」

「カップルじゃねえ！」

花子は笑顔をみせる。しかし僕は顔が引き攣った。

僕はこいつが嫌いなんだ。

身長は165位だろう。僕と同じ位で、スポーツ刈りなのでボーイッシュな印象がある。一見スカートをはいているのに違和感を覚えるほどだ。北欧系の鼻筋の通った顔に、二重の目が愛敬の念を持たせる。

「今日も花ちゃんは可愛いね」

「わわっ」

「触んな！」

ふいに彼女は花子を抱きしめた。花子は花を潰されそうになって、慌てている。不意なその行為に、迷惑極まりない。でも少し嬉しそうに見えるのはお門違いか。

「なんで？ ナカツ君もしかして妬いちゃた？」

「ちゃうわ！ 花だよ花。この同性愛者が」

「おっとナカツ君。先輩にそれはないなあ…。それにこれはそんな性的なものではない」

「じゃあ何なんだよ」

「愛。」

「尚更嫌だわ！」

「……ジン。ツツコミ多くない？」

「お前らのせいだよ！」

全く何なんだ、コイツらは。構ってられん。

僕はコイツ——海部紅と花子を置き去りにして、先に神社の内裏へ向かった。靴の先を定めて徒する。

さっさと話を聞いて帰ろうと思う。

ついでに神主に文句言ってやる。あんたの孫が困り者だと。

「あゝ。ナカツ君彼女を見捨てたー。」

「え？」

「じゃあオジサンが花ちゃん食べちゃおっかな」

「わわ、ひゃあつ、あんつ。ジン助けて」

何か五月蠅く騒いでいたが、聞き流した。

しかしながら、やっぱり花子は嬉しそうだった。

1—***

神社の中はしみじみというよりは錆び付いていた。銀杏の木に枝は殆どなく、当然葉っぱもない。蒔かれた砂利に苔が侵食している。もはや風流より汚さを感じてしまう。

そんな中で僕は建物の中にいるであろう神主を探す。

本造の神社家屋はもはやウグイスというよりカラス並に軋む音がするが、構わず歩く。障子の入口も、九分九厘破けてしまっていた。

「大和爺さーん。生きてるかー」

その障子穴を覗きながら、内部を伺う。

……。

どうやらないようだ。神社の隣にある自宅だろうか。
ならば行ってみよう、と考えていると

「何覗いてんのナカツ君」

紅が側によつてきていた。丁度いい。

「大和爺さんは？家？」

「おじいちゃんなら家にはいないけど……何か用？」

だが僕の予想は違っていた。

「え、いないのか……」

今日は昨日読んだ日本初紀について聞こうとしていたんだが……。いないのならば仕方ない。

「つかどこに行ったんだ？ 葬式か何かあったのか」

滅多に外出をしないあの神主のことだ。冠婚葬祭の用事でもできたのだろう。そう僕は考えた。

ところが、僕の予想は再び外れる。

「違うよ。ほら、そこに大学あるだろ。そのセンサーに呼ばれてるんだって」

「大学……また一体何で」

「さあ。でも何だか慌ててたよ。『まずいことになった』とか。『来週まで帰れない』とか。」

大和爺さんが自ら大学関係者と関わるとは考えにくい。それどころか、人との関わりを進んで持とうとしないのだ。

1年程前に、息子夫婦すなわち紅の両親を亡くしてからだと聞か……。

「ジン……。いた……？」

いろいろと思索していると、花子が訴えるようになってきた。鳥居の前で、赤い花の金魚草を抱えている。

「とりあえずこれ、どこかにおきたいんだけどー」

「あ！すまんスマン忘れてた。爺さんいないからもう帰ろうか」

とりあえず今日は帰ることにしよう。明日丁度大学に用があるし。

そんなに急いでも仕方ない。

「んじゃ、またな」

紅に別れを告げる。そういえばコイツに会うのも久々だった。

「ばいばいナカツ君。たまには花ちゃんを抱きしめてあげなよ」

「……一言余計だな、いつも」

相変わらずいつものふざけた言動は健在のようである。不意に苦笑する。

「余計じゃないさ」しかし、

「分かってないなあ。ナカツ君は」紅は言った。

あの子にはまだ必要なんだよ。母親の代わりが。

1—***

土曜日の朝。

私は太陽光に目を刺激されて半ば強制的に目を覚ましました。容赦ないですね、太陽光。彼のせいで私の寝起きは最悪です。

「でも今日は学校ないぞ」

週休二日制が敷かれている今、多くの学校機関は土曜日を休日になっていますが、私達の学校は進学校なので、普段は土曜日にも授業があります。でも今日は特別に休みになりました。

なぜなのかは分かりません。でも私は穿鑿しないことにします。

ぶっちゃけ休みなら何でもいいですし。今日はどうせ予定がありませんし。

服を着替えてから、ベランダへ行って、お花たちにお水をやります。私は名前の通り、お花を見たり育てたりするのが大好きなのです。いつの間にか、自分のベランダはまるで植物園状態。置ききれない花の鉢は、隣のジンのベランダに侵入して占領しています。

そして何といっても、

「えへへ」

昨日花屋さんがくれた金魚草。他のどんな花よりも輝いています。

当然です。

金魚草は、お母さんが、一番好きな花だったんだもの。

私は雲ひとつない空を見上げます。

天国だとか別の世界で再会できるだとか、私は信じていませんが、どうしても見上げてしまいます。

花子はもう今年16歳。お母さんがいなくなって5年。

身長はあれから全く伸びなかったけど、心は成長しています。

もうお母さんがいなくても、生きていける立派な大人です。

だってもう、好きな人だっているんだから。

1＊＊＊

……朝。

僕は2度寝を敢行しようと試みて、布団を深く被る。

今ならまだ寝れる。覚醒しきってない。そう感じたからだ。

しかしそこにはあまりに巨大な敵がいた。

僕の安眠を妨げる光源体。太陽である。

梅雨に突入しようかというこの時期の太陽は、南中高度も上昇している。布団の中を蒸らすのには、十分な力を蓄えていた。サンサンと日光が降り注ぐ。

「あっっちい！」

思わず布団を跳ね退ける。外気と触れてクールダウンを試みた。すぐに落ち着いたが、おかげで頭が冴えてしまった。

「あ…そうだった」

そして南中高度とか天野教授の影響を早速受けていることを自覚して、今日その当人と会う約束をしていたのを思い出す。

ベッドの中から携帯を探しだし、時間を確認する。

6時40分。平日いつも起きている時間だ。休日だが、なかなか生活リズムに逆らうことができないのである。

「ふわぁゝあ」

大あくびをして立ち上がる。

薄手のカーテンを開けると、花子がジョウロを片手にベランダにいるのが見えた。花に水をあげているのだろう。ジョウロから絶えず水が流れていている。

……つか、あんなに水あげ続けて大丈夫なのだろうか。

心配になるが当人は、空を見上げてぼーっとしている。

『きゃっ』

暫くして慌てたような花子の悲鳴がガラス越しに伝わってきた。今日も相変わらずのようだ。

苦笑しながら、寝巻から着替える。

小さな冷蔵庫の中身を確認してから、今日の予定を考える。

天野教授との約束は正午。大学まで15分もかからないから、食事する時間を考えても十分時間はある。

洗濯をして、また本でも読んでようか。それとも食料が少なくなってきたから、午前中にスーパーにでも行こうか。

そういえば今日は卵が安かったはずだ。1人1個だから花子も連れて行かなくてはならない。

それに先着の惣菜の詰め放題があるから、開店したらすぐに行く必要がある。

何時開店だったっけ？

「……」

と、そこまで考えて、自分がおばさん主婦化していることに気づく。もはや一般的な高校生の思考ではない。

ちよっぴり失望するが、仕方ないのだ。仕送りだけで生計をたてるのは実際厳しい。それは先月身を以って感じた。実家で作った米にあれほど感謝したことはない。親に対しても同様だった。感謝しなきゃなあ……

そんなことを考えていたとき。

「ピンポーン」

チャイムの音が聞こえた。

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン。

執拗なチャイムの音に反応して玄関へ向かった。鍵とチェーンを外してドアをあける。

「おーい。ってやつときたか。遅いわよ」

「はいはい何ですかこんな朝早くから。大家の大屋さん」

「その呼び方やめなさい。殺すわよ」

僕はそこにいる女の子の姿を見る。まだ子供らしさのある顔立ちに、お団子頭がにあって、可愛らしい娘である。口のききかたが最悪なことを除けば、かなりモテるに違いない。中学生の彼女はここのマンションの大家さんの娘だ。名前を大屋詩織オオヤシオリという。

「集金よ集金。今月の家賃。分かったらさっさと払いなさいよ」

「子供に金払う筋合いはないね。集金ならおばさん連れて来いよ話になんねー」

「なっ何よ偉そうに。アタシはもう15になったのよ。あと1年で結婚だってでき…」

「相手もいないくせに」

「っっ……………」

少しからかってやると、明らかに悔しそうな顔をする。凶星のようだ。

「い、いるわよ！ 結婚相手くらい！ 彼氏だっているんだから」
詩織は口調を強めて言う。

随分大きな声だが、ここの4階には僕と花子しか入居していない。近所迷惑などは気にしないでも済む。

「はいはい。嘘はいいから、ほら金。受け取れ」

「っっ……………いつか絶対殺す！」

見え透いた嘘を受け流しながら、予め封筒にいれておいた家賃を差し出す。詩織は乱暴にそれを奪うようにとると、中身を確認し始めた。そのお札を数える仕草は手慣れている。入居者の集金は彼女の仕事なのだ。大家さんは以前詩織のことをよく出来た孝行娘といていたが、納得である。

最近急に色気づいているとも言っていたが、まあ年頃なのだから、

仕方ないだろう。

「あれ？ 詩織ちゃん何してるの？」

詩織が金額を確認しおわると、花子の声がした。

「集金しにきたんだよ」

僕は応える。

あまりに詩織が騒ぐので、気づいてやってきたのだろう。もはや騒音おばさん並にうるさいから当然だ。

「彼氏ができなくて苛ついてんだってさ」

「黙れ！」

「そうだよジンー。詩織ちゃんはまだコドモなんだよー」

「っっ」

寄ってきた花子に僕が続けると、花子がそう言う。

本人は詩織を庇うつもりで言っているのだろうが、詩織はそうは受け取らない。

その証拠に絶句している。

「アンタに言われたかないわよ！」

確かにそうかもしれない。

花子と詩織が並ぶのを見ると、だいぶ詩織の方が背が高いのだ。知らない人が見たら、詩織の方が年上だと思うに違いない。

「ふん。あんたら付き合ってるからって調子のってんじゃないわよ」

詩織はそう言い捨てて、帰ってしまった。

「なんだあいつは」

付き合ってたねえよと慌てて否定しようとしたが、花子がキョトンとしていたので、必要がないと判断する。

それにしても朝からよくあんなに元気があるもんだ。僕は朝に弱いからダメだ。どうもテンションがあがらない。

おまけに腹まで減って力がでない。

「花子もうメシ食ったか？」

「ううん、まだ」

「んじゃ、僕作るから部屋入れよ」

そうして朝食を食べていないことを思い出して、花子に促す。

今日もいつもどおりの日常。

いつもどおり、いい日になりそうだ。

明日以降もいつもどおりなのだろうけど。いつもどおりが最近すごく幸せに感じる。

僕は冷蔵庫に何があったか思い出しながら、ボタン、とドアを閉める。

〔*110〕

あれから5時間の後。

スーパーで花子が小学生と間違われ、結局『15歳以上1人1個限り』の卵をかえなかったことを除けば、午前中は平穏な時がすぎた。そして今、丁度太陽が真南に位置する時刻に、僕らは浅間教授の研究室にいた。

研究室の中は、シャーレの数が増えたこと以外、何も変わっていないように見受けられる。

ただ前回と違うのは、天野教授が既にきていて、待っていたことくらいである。

「よく来てくれたね。まあ適当に座ってくれ」

「あ、花子はこっちへ来なさい。別にやることがある」

僕はデスクの椅子を1つ拝借して座った。

花子も同じように腰を下ろそうとするが、浅間教授に咎められた。

「じゃあ天野、そっちは頼む」

「ああ、任せたまえ」

「え？ お父さんどこいくの？」

僕はてっきり前回みたく、花子が回らないように、別の椅子に座らせようとするのだと考えたが、違っていた。

浅間教授は花子を連れて、部屋を出てってしまった。となると、僕は必然的に天野教授と2人きりになる。

「それで、何なんですか？ その用事っていうのは」

僕は何の考えもなしに、それを尋ねたが、天野教授は答えてはくれなかった。

代わりにこんなことをいいはじめる。

「まず宣言しておこうか。俺は嘘をつかない。ここに誓う」

「……………はあ？」

僕がそのいきなりの宣言に怪訝な表情を見ると、教授が少し笑った。「すまんすまん。これから俺は、君にあることを説明しなければならんんだ」

だいぶ強張った表情をしていたので、先日とは違う雰囲気を感じていたが、その一言で少し緊張が解ける。

「しかも、一見馬鹿げた、嘘みたいなことをね」

教授は続ける。

「普通こんなことを信じる輩いないだろうと思うが、今からいうことは大事なことだ。よくきいてくれ」

「……………」

僕はそっと唾を飲み込む。

何だろうか。その『こと』というのは。

隕石でも落ちてくるのか？

それとも太陽が小爆発でもおこすのか？

いずれにせよ天文学に関わることなのだろう。天野教授の専攻であるわけだし。

「君は歴史に詳しいよね」

しかし教授からでたワードは意外にも『歴史』だった。

「まあ：詳しいって言ったら詳しいですけど」

「じゃあ日本神話は知っているかい」

僕が曖昧に答えると、今度は『神話』という言葉が教授の口から出る。

「多少ならわかります」

「流石だ」

現在の高等学校の指導要領に、日本神話のカテゴリーはない。

無論『史実』ではないからだ。

僕は歴史が好きなので、個人的に日本書紀や古事記を何度か読んだことがあるが、普通の高校生なら日本神話に触れる機会は殆どないだろう。

それゆえに、他の高校生よりかは、その手の知識には自信があった。今読んでいる『日本初紀』もその系統の話である。

「では、イザナギとイザナミという神はわかるね」

「はい。もちろん」

イザナギとイザナミ。

何を隠そうこの日本を生み出したとされる夫婦神である。

日本の中心の島、本州を筆頭に、四国や壱岐、更には姫島やここ九州までも創造した。

日本神話で最も重要な、まさしく創造神といっていい。

それを知らないはずがない。

「日本を造った神様ですよ」

「ああ。そして多くの神々を産んだ」

イザナギとイザナミはよく『国産み』『神産み』の神としても称される。

偉大な神なのだ。

「それから彼らの子孫が人間を産みだし、神自らも日本の地上に降り立った」

「……天皇家の祖、ですね」

基本的に、神と人間の住む世界は違っている。

神々は普通、『高天原』という世界に住んでいる。

対して僕達人類は『葦原中国』という世界に住んでいるのだ。

そもそも神話の世界観は

いわゆる

天界の『高天原』。
タカノアマハラ

地上の『葦原中国』。
アシハラノナカツコク

死後の世界『黄泉国』。
ヨミノクニ

の3界によって形成されている。

つまり創造神の子孫は、高天原から葦原中国へ君臨した訳である。
その君臨した子孫。

実はそれが天皇家の初代天皇、神武大王の祖父にあたるのだ。

「その通り」

教授が言う。

しかしそんなことを言って、一体何の目的があるのだろうか。
さつきから話の意図が全く見えない。

というか、南の窓から日光が顔にあって眩しい。カーテンをしめて
いいだろうか。

と、疑問を感じていたその時、

「つまり——」

と、正直鬱陶しさを覚えていたその時、

教授は核心に迫る言葉を発した。

「俺たち人類の中には、神の血を継ぐ人間がいる訳だ。天皇家以外
にもね」

「……まあそうですね。普通に考えれば」

僕は言った。

地上に君臨した神は人間との間にも子を設けている。

そうなれば、ピラミッド式に神の血を継ぐ者は多く現れるだろう。

当然、天皇家に限定されるとは到底思えない。

「まあ血はかなり薄そうですね。……」

ただ人間の方が人間神より遥かに個体数が多いので、その神の血は
かなり薄いはずだ。

神の君臨は、既に3千年も前のことなのだ。
間違いない。

「君は勘がいいね」

僕が指摘すると、教授は何故か僕の勘を褒めた。

「君に回りくどい説明はいらないね。単刀直入に言おうか」

僕は身を構える。

その声に緊張感が加わったのを感じとった為だ。

「神話が本当だと仮定して聞いてくれよ……？ 実はね、何千年も

たった今になって、神の血をとて濃く受け継ぐ者が現れたんだ。

俺はそれを『巡り者』と呼んでるが……」

「……」

「しかも俺の試算では、その割合は7割以上だ」

思わず眉間に皺をよせてしまう。

どういうことだろうか。

長年、圧倒的多数の人間の中で血を薄めているのに、7割が神の血？
ありえないことではない。

血の濃い者同士が、常に契りを結んでいけば、可能なことである。

いや、でもやっぱ無理だ。

確率的に考えてありえない。

血の濃い者どうしがくつついて、その子供がまた血の濃い者と……
等とそう上手くいくはずがない。

「君は頭がいいだろうからかな？ 数学的にほぼ無理だとわかるんだろ」

「ほぼ……というか、それこそ神レベルでないでしょう。そんなこと
少し考えて僕はそう結論づける。」

ところが、それはいとも簡単に、「神の血を継ぐ者は、お互いに惹
かれあうんだ。それも、血が濃いほどにね」覆された。

「戦前までは、それもあまり影響は無かった。恋愛結婚なんて殆ど
無かったからな。しかし、戦後は違う」

「なるほど。だから今になって、血が濃くなった、と。」

教授は頷く。

「交通網発達や、社会組織が形成されるなかで、今まで出会わなか

った者達が、出会ってしまったんだ。しかも神の遺伝子は優性形質だからね。どんどん濃くなってしまおう」
その疑問は意外と簡単に、解消された。

コノハナの教典>

しかしまだ解決していない疑問がある。

さつきからずっと不思議に感じていたことだ。

それは『なぜ僕に神話の話をするのか』ということ。

僕は教授にそれを尋ねようとしたが、その前にその答えとなる事実を、僕は聞いてしまった。

「出会ってしまった。浅間さんと、その奥さんの様にね」
教授の目つきが変わった。

浅間花子。

彼女の血の大半は、神の血だ。

「*111」

研究室を後にしてから既に20分が経っています。

私はお父さんに連れられて、車に乗せられました。

行き先はわかりません。

県道を走っていること以外、お父さんが教えてくれませんでした。

でもそのかわりに、

運転しながらお父さんは、よく意味のわからないことを説明しています。

私の血がどうだとか。

『巡り者』がどうだとか。

私にはさっぱりわかりません。

「やまたのおろち?」

「そう八岐大蛇。知ってるよな」

そしてまた、わからないことをひとつ。

八岐大蛇。

あのゲームのモンスターなんかに出てくるやつでしょうか
8つの大蛇が合体したような、伝説の動物神。

「八岐大蛇は伝説上、人間神の娘が好物だといわれている。」

ただヤマタノオロチは、確か誰かに倒されています。

「これが意味することが分かるかい？　花子」

「んー、全くわかんない…」

伝説の大蛇神の好物が人間神の娘。

そんなことを言われたって、私は首を傾げるしかありません。

お父さんは何がいたいのでしょう？

するとお父さんは

俺の説明が悪かったかな。

そういつて一言

「つまり、八岐大蛇が花子を狙ってるわけだ」言いました。

「え………」

「八岐大蛇が甦った。花子、お前のせいだな…」

その声が重くなったのは明らかでした。

私はいよいよ混乱します。

何を言ってるの、お父さん？

「よし。着いたぞ花子。降りなさい」

そんな私の混乱をよそに、お父さんは冷静沈着でいます。

促しに従って車を降ります。

そこは細長い木々が叢生する林でした。

「あ！　綺麗〜！」

その足元には色とりどりの花も生えています。

中には、見たこともない花も。

私は近寄って香りを嗅ぐと、とてもいい香りがしました。

「お父さーん、ここってどこなの？」

図鑑に載っている大抵の花を知っている私が、知らない花のある場所。

きつとあまり知られていない森林でしょう。

回りを見渡しても、木、木、木。同じ風景。

私たちが車で通った場所だけが、地面に跡がつき、しるべになっています。

「高千穂山……っていうところさ……」

「たかちほ……」

やはり知らない場所でした。

私が無知なだけかも知れませんが……

私は季節外れのツクシを摘みながら、考えます。

ところで何故お父さんは私をこんな所に連れてきたのでしょうか。

車内での説明も何だか意味深長でしたし、何かあると考えるのが普通です。

「ねー、お父さ……」

そうしてお父さんに尋ねようと振り向きます。……………。

いえ、今のは間違いです。

正確には、振り向こうと試みました。

試みましたが、かないませんでした。

その前にお父さんはこう言ったのです。

「すまない……花子……」

その瞬間。

もしくは、

その刹那。

……………

林の全ての植物が、私の全身に突き刺った

……………

のです。

「ふぁ？」

一瞬の判断では何が起こったか処理しきれません。

ただ分かったのは

林の木々の枝が急に伸び、私の顔に突き刺さった。

草が尖って私の腹に突き刺さった。

持っていたツクシまでも手を貫通して体内に侵入した。

以上のこと。

そして1秒の後。

恐らく瞳孔の稼働率を最大にして、

「あああ……あああああああああああああああ！ ああああ
あああああああああああああああ……！！！」

私は絶叫しました。

猛烈な痛み。

枝や草に体をえぐられる感覚。

痛い。痛い。痛い。

[illegible]

「あああああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ

い や ああ ああ！ ジ… ああ ああ ああ ああ

痛い。痛い。痛い。

ジン助けて。

私を助けて。

早く助けて。

そう願うもはかないだけでした。

「あああああ ああああ……あ……あ……あ……あ……」

そうして意識は

闇に堕ちます。

$$\begin{bmatrix} * \\ 1 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}$$

「ちよ、ちよつと待って下さい。時間下さい」

僕は天野教授の話にすっかり混乱してしまっていた。

少し頭の中を整理しなくてはならない。与えられた情報量が多過ぎる。

僕は頬に手を当てて、近くにあるペンを取る。

論点は3つだ。

●日本人の中には、神の血を継ぐ者がいる。

●その中でも、神の血の占める割合が3割を超えるものを『巡り者』という。

●『巡り者』である花子を狙って八岐大蛇が甦ったので、僕に倒してほしい。

あ、整理したら随分スッキリしたかも。

そして改めて無茶苦茶な話をしているのだと自覚する。

そう思った僕は話を戻すことにした。

「でもなんで僕にそのヤマタノオロチを倒せなんていうんです？

僕魔術も使えなければ、武道だって出来ませんよ」

そうなのだ。

八岐大蛇が顕れたからといって、僕に協力を求められても何も出来ない。

警察か自衛隊を呼んでくれれば早い話である。

「大原則として、人は神を殺すことはできない。ヤマタノオロチも神だ。神は神にしか殺せん。要は君しかないんだよ」

「いや僕も神じゃないんですけど…」

「それなら問題ない：言い忘れていたが君も『巡り者』だ。」

「なんですとっ！」

僕は再び混乱した。

もう訳わかんねー。

君の血はそれ程極端に濃いわけではないがね、普通の人より君は神に近い

と教授はいう。

「つか嫌ですよ。そんなリスク僕には犯せません」

「あの娘が死んでもいいのかね？」

「……それは……」

もはや何を言ってもかえされる。

僕にはもうやるしか選択肢にないと悟った。

ではどうすればよいのか。

それを考えていたその時、

「なに絶望することではない。『巡り者』は君たち以外にまだいる。特に……力強い大先輩が1人ね」

まるで教授が言い終わるのを待っていたかの様に、研究室の扉が音をたてて開く。

「ちようどきたね。先輩の『巡り者』が」

僕はそれを見て驚愕した。

そこに。

扉の外に立っているのは、

「——大和……爺さん？」

「爺さん言うな仁彦。ワシはまだ74じゃ」

〔*113〕

そして。

全ての話が終わった後の研究室。

「つか天野教授。今までの話って、全部日本神話が実話だったらの話ですよ」

「だから言ったろう？　嘘みたいだって」

「嘘だったら僕……幸せなんですけどね……」

2人して苦笑した。

〔*114〕

僕と大和爺さんはあれから、県内で最も大きい酒蔵へときていた。酒蔵を熟成している室内は、湿気にみちっていて、暑さを無駄に感じる。

大きな樽がいくつも密集して置いてあるのは、威圧感も覚えさせた。鼻からアルコールの刺激を感じると、いよいよ気持ち悪さを感じてしまう。

僕は法律的にも、生理的にもお酒が飲めないのだ。

「すまんなあ、霧山。無理なお願いしてもうて」

「いいえ、大和さんが1年ぶりに来て下さったんですから。お安い御用ですよ」

『霧山酒造』の店主、霧山高史さんと大和爺さんがそう話す。

霧山酒造の日本酒は全国的にも有名である。

意外だったが、爺さんはかなり人脈があるようだ。

今回ヤマタノオロチ退治必要なものも、簡単に入手できそうである。

「これ仁彦。これを荷台へ運びなさい」

霧山さんが用意してくれた酒甕を、車へ運ぶよう指示される。

「ひ、一人で運べと？」

「当たり前じゃ。お前はまだ若いじゃろ」

「……………タヒむ」

「あ、手伝いますよ」

およそ20kgの酒甕が8つ。

僕は霧山さんの手助けを借りて、何とか荷台に詰め込んだ。「ほれ。つんだらさっさとのれ」

爺さんは既に運転席に乗り込んでいた。

慌てて、霧山さんにお礼をいい、乗り込む。

「全くなんて人使いの荒い爺さんなんだ」

愚痴を漏らすと、爺さんはエンジンをかけながら、言った。

「何を怠けたことをいっとる。人が1人死んどるんじゃぞ」

……………そうなのだ。

ヤマタノオロチは既に一度顕れ、少女を一人喰らっている。

誰かはわからない。

僕だけでなく、誰にも誰が食べられたのは、わからない。その少女の友達も身内さへも。

なぜなら、その少女に関する全ての記憶が、人々の間から消されたのである。

もしかしたら僕の知っているやつだったかもしれない。だが、それ

も今となつては誰にもわからない。

ただ大和爺さんは除かれる。

人々の記憶を消した張本人——大和爺さんは、その少女のことを覚えているのである。

大和爺さんの『巡り者』としての能力だという神の力。

そう、記憶操作の能力である。

実は八岐大蛇の転生を感知したのも、大和爺さんなのである。

僕は走りだした車の窓から、ある山を眺める。

高千穂山。

日本神話にも登場する、比較的有名な褶曲山である。

「んで、どこへ向かってんの？」

僕は尋ねる。

「仁彦の高校じゃ。あそこで作戦を実行する」

「え？　なんで学校？」

「あそこ近くは住宅地ばっかしじゃ。単純に他に被害がでにくそうな場所がなかった。夜にしかオロチは顕れないから、学校は最適なのじゃ。今日折角休みにしてもらったしの。リハーサルじゃ」

「ま、まさかそんな理由が……」

進学校である僕の高校が、土曜を休みにするとは何か意味があると思っていたが、まさかだった。

「でも大和爺さん。そんな都合良くヤマタノオロチは校庭に顕れるのか？」

八岐大蛇は人を喰うために顕れたのだから、わざわざ人のいない学校にくる必要がない。

逆に住宅街に顕れそうなのだが……。

「それなら簡単な話じゃ」

その疑問に爺さんは答える。

「花子を囃にする」

「……でもそれは」

ある程度予測していた解答だったが、

僕は複雑だった。

それなら確かに、八岐大蛇を誘導することができる。
肉を餌に猛獣をおびき出すようなものだ。

しかし、花子はどうか。

花子を肉の代わりにするのか？

それはあまりにも危険すぎる。

「なんだ仁彦。危険だとかいいたそうじゃな」

「……当たり前だろ」

花子を守る為に、今こうして動いているのに、花子を危険に晒しては、本末転倒じゃないか。

そう思った。

「僕はともかく、花子にはあまりに危険すぎる」

「ならお前が、花子が危険な状況になるまえにオロチを殺せばいい話じゃ」

「……でも、一体どうやって」

殺せばいいんだ。

伝説では、オロチに酒を飲ませ酔わせ、その後八つ裂きにしたという。

だが僕にはそんな力はない。

「……………儂の鞆の中をみておくれ」

すると大和爺さんは、

あるものを僕に見せた。

黒い革の鞆を開けると、そこには束になったお札オフダがあった。

逆にいえばそれ以外には何も無い。

「何だ……これ？」

札には『神珠開灰解脱』と唐様でかかれている。

古い和紙が使われていて、茶色に色褪せていた。

「オロチに限った話じゃないがの、神には人間の心臓にあたる『神珠ジュ』とよばれる球体が、体のどこかに必ずある」

爺さんは、にわかになにそう説明する。

「仁彦は、『神珠』をさがして、それにその札を貼るのじゃ。さすれば、神は消滅する」

もう黄泉の国にさえ行けない。

神は存在もろとも無くなる。

「……」

僕が黙ると、

更に一言。

「大丈夫。儂が言うようにやれば、必ず上手くいく」

「*115」

日はとつくに落ちていた。

結局あのあと学校に赴き、リハーサルを行い、家に帰った。

だがいつも2人で乗っているマンションのエレベーターに、今日は一人。

花子はいない。

来週月曜の夜の八岐大蛇出現に備えて、匿っているという。

仕方がないので、夕飯を1人分だけ作って食べる。

1人分だけ作るのは何だか難しかった。いつもと感覚が違う。

味も何だか薄く感じた。

花子がいなかったことが、こんなにも非日常に感じるなんて。

僕はため息をついた。

「*116」

月曜日の放課後。

授業になんてどうせ集中できないのだから、朝は遅刻しようとも考えたが、結局やめた。

朝の内に、花子が欠席するというのを伝えなくてはならないし、

欠課すると担任が煩い。

従って、通常の45分×8限を終えた僕は校庭へ出ていた。

昨日配置した、あの酒甕の確認の為である。

なんせチャンスは1度きり。

八岐大蛇退治が失敗すれば、僕や花子は当然、大勢の市民が犠牲に

なる。

しかも人に神は殺せない。

ということは、僕ら『巡り者』が死んでしまえば、八岐大蛇は2度と殺せない。

その恐怖は、未来永劫続くことになってしまう。

僕には日本の未来がかかっているのだ。

なんて重い責任だ。

失敗は絶対に許されない。

何があろうと、あの作戦を成功させなくてはならない。

しかも。

しかも。

大和爺さんは、八岐大蛇退治に立ち会ってくれない。

大和爺さん曰く、『お前が死んだら記憶操作しなくちゃならん』だそうだ。

共倒れを懸念しているらしい。

なるほど。

それなら死んでも安心な訳だ。

……。

つか死ぬことも想定しているのか。

さすがにゾツとする。

もの凄いプレッシャーだ。

だから尚更念入りに確認しなくては不安で仕方ない。

校庭には野球部、サッカー部、陸上部がそれぞれいて思い思いに部活動に精進している。

酒甕は隅に寄せてあるので、支障はない。

しかし、隅で酒甕をいじくる僕は、目立ってしまった。

「あれ？ 仁彦じゃん。どうしたこんなところで」

そう考えていると、野球部のひとりに不意に話しかけられる。

やはり帰宅部の僕が校庭にいるのを怪訝に思ったのだろう。

ボールを拾いにきたところのようだ。

「ああ、ちよつとな」

「ふうん。なんだお前もモテたくて野球部入りにきたんだと思ったのに」

彼は僕のクラスメイトで、ハットリヒュウガ服部日向という。

最近の子らしく、変わった名前の日向は、

野球を『球児はモテる』という不純な動機で始め、球児であるのに茶髪でロン毛というふざけた奴だ。

僕にはイマイチそのモテに関する執着は理解できない。

どうして日向はそんなにモテたがるのか。

少なくとも僕には必要ない。

「僕には必要ないね」

そのことを率直に伝える。

「ヒュ〜♪ 『僕には花子がいるから必要ない』 つか？ うらやましい」

すると日向はそうからかってきた。

正直対応に困る。

が、他の野球部員が日向を呼んでいるのを聞いて、さっさと練習に戻るよう促した。

日向は軽く舌打ちをして、

「じゃあな仁彦。またカワイコちゃんいたら紹介しろよー」

そう吐き捨てて、戻っていった。

ニギの教典

「あいつは…僕が死んだら、どう思うかな……」

その後ろ姿を見て、呟く。

本当は分かっている。

僕が死んだら大和爺さんが記憶操作をするはずだから、日向は何も思わない。

日向どころか、大和爺さん以外は誰もが、僕のことを忘れる。

でも、僕は思わずにいられなかった。

午後5時半。

まだ太陽は地平線から顔をだしている。

勝負は2時間後か、3時間後か。

不思議と時間の流れは、遅くも早くもなかった。

〔*117〕

誰もいない校庭は静けさと同時に、一定の寂しさを感じさせた。

校庭はナイト設備によって照らされている。

学校関係者に大和爺さんが頼んでくれたのだ。

ただ、その光によって地面に濃淡を与えているのは、いまだ僕の影のみ。

中央に独りぼっち、佇んでいる。

午後9時。

生徒や職員は先程全員帰ったのを確認している。

警備会社の人が、僕を不審者と間違えるというハプニングがあったが、他に問題はない。

酒甕も万全である。

僕は空を見上げる。

月が無性に綺麗だ。

何せ普段こうして夜間外にでることがない。

雨期だというのに雲ひとつない空からは、月光りが神々しく降って

いた。

それは内心緊張している僕の心に、つかの間の安息をくれているようだった。

夜は深まっていく。

ただ肝心の八岐大蛇は顕れない。

「このままなにもなければいいのに。」

本音が零れる。

当然だ。

土曜に全てを知った後、

日曜はひたすら困惑し、

月曜になっただけもう本番。

無茶苦茶すぎる。

ホントはドツキリなんじゃねえかな、これ。

そう期待してみても、視界を下ろす。

だが、しかし。

ところが、しかし。

「……え？」

期待は様々な形で裏切られた。

まず見えたのは、突如顕れた花子。

気絶しているのか、地面に横たわり動かない。

服装は土曜日と全く同じだった。

その姿に愛おしさを感じた僕は、近寄ろうとする。

瞬きを一回。

「!!」

すると、僕は花子の前に立つ少女を見つけることが出来た。

瞬きの前にはいなかったはずだ。

僕は歩もうとした足をとめる。

背の高い、目つきの鋭い少女。

図らずとも目があう。

そして少女はニヤリと笑った。

「君かいな。ワイの邪魔するゆーのは」
少女は言った。

違和感ありまくりのニセ関西弁だ。
見た目こそ想定外であったものの、僕はすぐに分かった。
異様な感じ。
この状況。

「……お前が……ヤマトノオロチか……」

「……そや。」

僕はてっきり八岐大蛇は8つの頭に尾をもつ、それこそ校庭が一杯になるほどの『大蛇』だと思っていた。
しかしそこには1人の少女。

「あのごつつうっさいジジイが言っとったで。今日くんのは、もつと手強い『巡り者』やってな。楽しみにしてたんやで、ワレ」
ジジイとは、大和爺さんのことだろう。

『巡り者』というワードと、
大蛇ではなく少女の君臨。

僕は恐らく、少女も『巡り者』なのだと推測できた。

『巡り者』 メグリモノ

遺伝の中で神の血が一旦は薄まっていったものの、戦後再び神の血が集結してしまった者。

神の血が巡り巡って受け継がれ、現在に顕れたその神の力をもつ者。
受け継ぐ神の血は選べない。

少女はその偶然受け継いだ血こそ

『八岐大蛇の血』だったのだろう。

「あんな老いぼれの『巡り者』やなくて、若い『巡り者』どうし、
いっぺん殺り合ってみたかったんや」

勿論、推測の段階ではあるが、今日は頭が冴えている。

たった今のその言動からも『巡り者』であることが実証できる。

「ああ、そうか」

僕は生返事をして、転がったままの花子を一瞥する。

そして懷から千円札程度の大きさの、小さなお札オフダを取り出す。

大和爺さんから貰ったものだ。

僕はそれを花子に向かって投げる。

そして念じる。

神珠開灰守護。

シュッ、と。

トランプが空をきったような音をたて、花子の胴にそれが触れる。否。

触れる寸前である。

花子が、消えた。

厳密に言えば、校舎に瞬間移動した。

僕が避難させたのだ。

大和爺さんに貰ったお札

『神珠開灰札』。

この札は単に神殺しの札のではなく、様々なことができる。

●雷や爆発をおこす『天誅』。

●圧力を使い盾を作ることや、瞬間移動を行う『守護』。

●そして神を殺す『解脱』。
などだ。

大和爺さんがくれた、神と対峙する唯一の秘策である。

残りは6枚。

『解脱』用に1枚除いて5枚。

これを使いきるまでに、作戦を成功させる必要がある。

「人が消えたあ！ 何やねんソレ、君の力凄いやん！」

少女は騒いでいる。

だが僕の血は薄いので、神の力など使えない。

つまり残念ながらそれは僕の『巡り者』としての力ではないが、言わない。

それが残り5回しか使えないと知られては都合が悪い。

僕は心臓に手を当てた。

そして、直後。

「ほな。最初から手加減はいらんよな」

キシヤアアアアアアアアアア！！！！！！

急に少女の腕が蛇の形に変形する。

赤い胴に、立派な牙をもつ、マンホール並の幅がある蛇だ。それが

少女の肩から生えているようである。

華奢な体に不釣り合いな腕蛇。

目は酸漿の如く朱く、ギラギラと光っている。

実に兇猛という表現が似合う。

コンマ何秒後。

渴いた遠吠えと共に、

それが勢いよく伸びた。

眼前に迫る。

「ぐっ……」

噛まれるっっ……！！！！

迫力と恐怖に1歩のけ反る。

咄嗟に札を一枚取り出した。

一瞬の判断。

神珠開灰守護——念じる。

ぎち。ぎちちちち……と。

空間が圧搾される音。

圧力が集中した空間は、重金属よりも高い防御力を誇る。

蛇は密集空間という壁に遮られ、跳ね返された。

ギジャアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

するとバネが自然張に戻るかの如く。

蛇は少女の腕の長さに収まり、腕の形に戻った。

間一髪助かつた。

札は残り4枚。

$$\vdots$$

これはなかなか厳しい気がしてきた。

が、少女にとって僕の感情は関係ない。

「『蛇神・八岐大蛇の巡り者』八戸ミロクや。さあ、殺ろうぜ」
ミロクの両腕が蛇に変形する。

それが、合図だ。

ここに、『巡り者』どうしの戦いが始まった。

〔*118〕

気がついた時。

私は、白い空間の中にいました。

さっきまで周りは全て木で占領されていたのに、今は真っ白です。
白、白、白。

どんなに遠くまで見ても何もない。

見えるのは白。

薄いも濃いもない。

見えるのは白。

物がある気配や輪郭もない。

見えるのは白。

唯一私の体にだけは、色がついて見えます。

ここまで肌色が映えて見えたのは初めてです。

「……………気持ち悪い」

暫くして、私はその環境に不快感を覚えます。

全部が白なのです。

めり張りがなさ過ぎて脳が混乱しているのでしょうか。

吐き気を催しますが、なんとか堪えます。

というか、ここはどこなのでしょう。

お父さんいません。

さっきまで確かにあった植物たちも、服も、何もかもありません。

……………服？

「きゃっっ！」

冷静になって自分の体を見てみると、裸でした。

何もなく、誰もいないのは見て分かりますが、思わず隠してしまい

ます。

だって女の子だもん。

てへ。

「……」

ひとり舌をだしてリアクションをしますが、誰も構ってくれません。と、勝手に羞恥と寂寥を感じていたところ。

↑↑↑↑↑天黄泉国瓊瓊杵神子……

どこからか、白い空間の中に浮かぶ黒い文字が現れました。

3Dのように、触れることができるのではないかという立体的な文字列が動いています。

ある文字列は右へ。

ある文字列は左へ。

ある文字列は上へ。

ある文字列は下へ。

そして、白い空間は文字で一杯になりました。

「なに……これ？」

私は恐怖とは違う何かを感じて、それを見ます。

穂神社宮崎県西早良臼杵郡高千新田神社県薩内市土神社都千代射水
神社山高岡諫早祀埋葬地筑紫可愛山陵伝承地南九各地明治政府旧薩
藩学意参篠崎考治島県川社可愛山陵治他向三陵鹿児島県内治者宮内
查東臼杵郡北可愛岳山麓古墳愛山陵伝承地崎県西都市西都原古墳群
男狭穂塚を可愛山陵参考稀坂出眞田倭帖娜腹茶竅蠱蛙鰕畠夥旄跛羅
太巴手楡軼質葉貳缶嗽霧瘤鍛瑩玻咲棧谷稗頗麻高呶穂妬嫁腦柢驗鳴
怒筆禾早奎杷預肚南葩英華花埤滕金穂神社宮崎県西早良臼杵郡高千
新田神社県薩内市土神社都千代射水神社山高岡諫早祀埋葬地筑紫可
愛山陵伝承地南九各地明治政府旧薩藩学意参篠崎考治島県川社可愛
山陵治他向三陵鹿児島県内治者宮内查東臼杵郡北可愛岳山麓古墳愛
山陵伝承地崎県西都市西都原古墳群男狭穂塚を可愛山陵参考稀坂出
眞田倭帖娜腹茶竅蠱蛙鰕畠夥旄跛羅太巴手楡軼質葉貳缶嗽霧瘤鍛瑩
玻咲棧谷稗頗麻高呶穂妬嫁腦柢驗鳴怒筆禾早奎杷預肚南葩英華花埤

藤金哉棧棚店倭梁殼挾咫亜嘛爺蠡店霸緋沛日本神話登神暈夜富仁把
古事記天穗神社宮崎県西早良臼杵郡高千新田神社県薩内市土神社都
千代射水神社山高岡諫早祀埋葬地筑紫可愛山陵伝承地南九各地明治
政府旧薩藩学意参篠崎考治島県川社可愛山陵治他向三陵鹿児島県内
治者宮内查東臼杵郡北可愛岳山麓古墳愛山陵伝承地崎県西都市西都
原古墳群男狭穂塚を可愛山陵参考稀坂出眞田倭帖娜腹茶竅蠱蛙鰕
夥旄跛縞太巴手榼軼質葉貳缶嗽霧瘤鍛瑩玻咲棧谷稗頗麻高呶穂妬嫁
腦柢驗鳴怒篁禾早奎杷預肚南葩英華花埤藤金哉棧棚店倭梁殼挾咫亜
嘛爺蠡店霸緋沛日本神話登神暈夜富仁把古事記天邇岐志国八岐大蛇
邇場女神一的木花咲耶姫記木花之佐久夜毘売書木花開耶姫記又単呼
神阿多都比売鹿葦津姫葦津姫本名娘姉妻海幸彦山幸彦目次述信仰偉
哉咫邇岐志国八岐大蛇邇場女神一的木花咲耶姫記木花之佐久夜毘売
書木花開耶姫記又単呼神阿多都比売鹿葦津姫葦津姫本名娘姉妻海幸
彦山幸彦目次述信仰偉哉咫哉棧棚店倭梁殼挾咫亜嘛爺蠡店霸緋沛日
本神話登神暈夜富仁把古事記天邇岐志国八岐大蛇邇場女神一的木花
咲耶姫記木花之佐久夜毘売書木花開耶姫記又単呼神阿多都比売鹿葦
津姫葦津姫本名娘姉妻海幸彦山幸彦目次述信仰偉哉咫……
文字列の動きが止まり
どこからか声。

「花子。貴女は私の『巡り者』よ」

そして私は目を覚ましました。

場所は——学校。

時間は——夜。

服は——ちゃんと着ています。

〔＊119〕

八戸ミロクは少し考えたようにした後、
思い出したようにして手をうった。
僕はその様子を注視して警戒する。
いつ、どんな攻撃をするか不明瞭だ。
ジャリ……。

足が砂との間に発した音にさえ、敏感に反応してしまいう程だ。

「ほんで。君は何神の『巡り者』やねん。名乗れや」

「……名乗るほどでもないさ」

矛盾が生じないように慎重に言葉を選ぶ。

僕は猛獣と対峙するつもりであつたが、相手は人間だつた。

知性がある分、厄介である。

それこそ相手を刺激して本気になられるのも本望でない。

その為には下手に喋って状況を悪化するわけにはいかない。

「なんやて？」

「……名乗る必要もないってことだよ」

「『ワイなんて敵じゃない』なんて口ぶりやな。ナメとんのか」

「その逆だよ」

そもそも、知らないのである。

何の神の血を継いでいるかなんて。

天野教授も大和爺さんも教えてくれなかったし、知っても無駄なことである。

僕は神の力を使えない。

だから、この無価値な会話を最大限利用してやることにした。

「僕は多分、お前には勝てない」

お前は多分、僕には勝てない。

だったら格好良かったのだろうが、それでは意味がない。

僕の目的は『示談』にもっていくことなのだ。

大和爺さんの作戦の重要因子だ。

その為には、僕を過少評価して貰わなくては困る。

「は？ なにいったんねん、君」

キシヤアアアアアアアアア！

先程同様。

蛇が僕に迫る。

ただその数は2匹に増えている。

左側の腕が新たに蛇に変形していた。

しかしながら。

さっきより幾分落ち着いていた僕は、冷静に唱えた。
神珠開灰守護――。

残り3枚。

今度は瞬間移動する。

ミロクの背後。

茶色の毛がたなびくのが目視できた。

2匹の蛇は虚無の空間を通過する。

今僕のいた場所。

そこで顔面を互いにぶつけあった。

ギジャアアアアアアアアア！

くねりながら悶えている。

「ほら。君はそんな凄い力をもつとるやんか。テレポート……かいな？ それを使えばエエ話や。きつとエエ殺し合いになるで」

ミロクは気配を察して、ゆっくり振り返った。

神珠開灰守護の力を称賛している。

かなり好戦的な性格なようだ。

正直助かる。

僕が力を持っていることを、純朴に嬉しがっている。
だから僕はそれを否定する。

「僕ができるのは、逃げることだけだ」

僕はまだ、神珠開灰『守護』の札しか使っていない。
そう。

まだ僕は防御しかしてないのである。

ということは攻撃をしていない。

「あゝ？」

ミロクの顔が、初めて険しさを表現する。

「僕は盾を作ったり、瞬間移動ができる。……丁度今見せたように
な」

出来るだけゆっくり、はつきり話す。

「――だが。僕にはお前を攻撃する手立てがない。つまり、僕は絶対に勝てないんだ」

まさか神相手に素手やナイフで応戦する訳にもいかない。即ち全くの無力である。と。

さつきから楽しい殺し合いを、望んでいるような態度のミロクだ。きっと失望感がある。

「それは……本当か……」

「……ああ。僕は、とてつもなく弱いぞ」

ミロクに応える。

そして。

キシャアアアアアアアアア!

唐突に左の蛇が叫ぶ。

口からは青白い光が発射。

レーザービームを意識させた。

僕は思わず又、札を使おうとする。

でも、使わなかった。

ここはくらっとおくべきだ。

覚悟を決めた。

――!!

効果音では表しきれない轟音。

「……か……は……?」

全身に走る痛み。

皮膚が丸ごと剥がされた様な感覚。

僕の体は生身の人間のものだ。

よって初体験の苦痛である。

小説や漫画の主人公は、いつもこんな痛みを堪えているのか。そう実感すると、お見それする。

悲鳴をあげようとも不可能だ。

上ってきた胃液が喉に詰まって声が出ない。

おまけに肺が圧迫されて発声できるほど、呼吸に余裕がなかった。

気功波のようなそれは、想定外の弾力を持っていて、受け流されるはずのダメージさえ、全部を喰らってしまった。

「ぐうう……」

目眩がした。

火傷を負った部分が、外気と触れてヒリヒリする。

おまけに足もガクガクと震えてきた。

だが、倒れはしない。

するべきことがまだある。

「避けへんのか？ 攻撃できへんとかゆうて、ふざけとる。君はワレと戦う気があんのか？」

「……ない……」

僕は痛みを耐えながら答える。

上ってきた胃液を飲み込むと、苦い味がした。

「僕は今日、お前と殺り合うつもりはない」

その苦味を構わず断言する。

ミロクは気性を更に荒くした。

「はあゝ?! ほんなら何でココにきたんや」

僕は言葉を絞り出す。

「……示談の為だ」

そうして、作戦を決行する。

作戦。

それは八岐大蛇の好物を利用する。

好物とは、人間神の娘もしくは酒。

伝説にも言い伝えられている、有名なものである。

「お前に、頼みがある」

僕はふらつく足をようやく動かして、近くの酒甕に歩み寄る。

何度も足が纏れるが、辿りついた。

その蓋を外し、ミロクに唆す。

「……」

ミロクはその表情さえ崩さない。

ただ、確実に興味は示している。

「お前は、これから沢山の人を殺そうとしているな？」

「この子らの好物なんや。しょうがあらへんやろ」

蛇がグルルツと唸る。

「でも、その蛇たちは、酒も好きだろう？」

「……」

「暫くは、この酒甕の中身だけで我慢して欲しい。人を、殺さないで欲しい」

ミロクはただ酒甕をジッと見ている。

その八岐大蛇伝説を彷彿とされる、

その漆塗りの酒甕を。

『八岐大蛇伝説』

天照大神の弟、スサノオが出雲国で八岐大蛇を討ったという説話である。

スサノオはアシナヅチとテナヅチという2柱の娘——クシナダヒメと出会い、惹かれる。

ところがクシナダヒメは、八岐大蛇に狙われていて、喰われてしまうかもしれないというのだ。

そこでスサノオは、八岐大蛇を退治するかわりに、クシナダヒメを妻に娶ることを承認させる。

そして来るべき時に備え、

スサノオはクシナダヒメを櫛に変えて自分の髪に挿して匿う。

加えて2柱に強い酒を用意させ、八岐大蛇のくる場所へ置いた。

すると間もなく八岐大蛇がやって来て、その酒を飲み始める。

八岐大蛇は酒好きで、あれば飲まずにいられないのだ。

暫く待つと、なんと酔っ払って寝てしまった。

寝ている八岐大蛇をスサノオは切り刻む。

こうして八岐大蛇は退治されたのである。

「これを……ワイに？」

「ああ、……そうだ」

正直そう上手くいくか不安だった。

ここまでは何とかなっているが、この作戦はこの交渉が最重要なのである。

運命を左右する。

大きくいえば、日本の未来をも左右する。

「……」

ゴクッ。と、唾を飲む。

ミロクは黙視を続けている。

「……」

沈黙。

その静けさは、先程の痛みだけをより強調させる。

「……はあ。」

やがてミロクが肩を落とす。

腕の両蛇の口からも、溜め息が漏れている気がした。

見た感じ。

がっかりしたような、印象。

……刹那。

――！と、

陶器が割れる高周波。

右の蛇が突進し、酒甕を割った。

中身が全てこぼれる。

地面に広がって、黄土色が焦げ茶色に変化するの分かる。

そして、声。

ミロクのもの。

「失望したで。君」

その口調も、冷徹なものに変化したのが分かった。

「ワイがそう簡単に騙されるおもうたか」

心なしか、その息遣いは荒い。

それは失望のみによってくるものか、それとも。

「ワイは、そんな馬鹿やないねん」

キシヤアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

そうミロクを観察していると、ミロクの体から新たな蛇が生えた。

腕が変形したのを含め合計は8匹となった。

両脇と両肩、背中の双方から1匹ずつ生えているので合計6。
 例えが悪いかもしれないが、

その1匹1匹がヌルヌルとしてグロテスクである。

これがミロクの本領域か……。○

か。猿やないし、伝説と同じ手に2度ひつかかる訳ないやろ。それにワイは未成年や。第一な……」

その間、常に俯き加減でいたが、にわかに顔を上げた。

シャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

それがミロクを中心として、蜘蛛の足のように伸びた。

「ワイは人殺しが大好きやねん」

間髪入れずに同じ周波の割れる音。

たいだ。

土壤汚染も甚だしい。

「あゝ！ もうつまらんわー！ 折角期待しとったのに……」

ミロクは地団駄を踏んで不快感をあらわにしている。

僅かに生じた衝突音が、僕の心臓の音と共鳴する。

そして溜め息の後。

「ええわ。もう終わりにしよか。とつとと死ねや」

8匹の蛇が牙を剥く。

よくみると、その牙からは薄紫の液体が出ている。

毒があるようだ。

毒を貰っては敵わない。僕は迷わず札を取り出した。

神珠開灰守護。

最初に特攻してきた2匹は、例によって盾を作り防ぐ。残り2枚。

牙が折れたようで、それが浮遊していた。

しかし追撃。

その数、6。

神珠開灰守護。残り1枚。

勿体なかったが、他に選択肢がない。

空間を今度は縦方向に押し込む。

6匹はまるで重量が何倍にも働いたように、

地面に勢いよくたたき付けられた。

そのまま脆弱な声を発しうねって苦しんでいる。

「ふん。苦し紛れかい。おとなしく死んだらどうや？ 君の作戦は

失敗したんやで」

そんな防戦一方の僕を見て、ミロクは哀れみの視線を注いだ。

哀れみ。

実につまらなそうなの瞳は、全てを見透かしたようだ。いかにも、

僕の作戦を全て見破ったかのように。

しかし僕はそれを見て

――笑った。

〔＊〕

ミロクは言った。

『君の作戦は失敗した』と。

僕はそれが可笑しくて仕方なかったのだ。

何をミロクは言ってるのだろう。

何をミロクは勘違いしているのだろう。

まさか僕が、『酒で酔わせそこを狙う』なんて単調な策をすると、

ミロクは本当に思ったのだろうか。

だとしたら、スゲー馬鹿だ。

人間のくせに智能ないのかコイツは。

滑稽にもほどがある。

作戦が失敗？

とんでもない。

作戦は思い通りだよ。

「くくく……」

「なに笑つとんねん」

思わず顔と声に出してしまう。

いけない、いけない。

あまりに上手くいっているものだから、笑ってしまった。

「いやお前さ。酒甕の中身何か分かってる？」

「……酒じゃ……ないのか」

ミロクは眉間に皺を寄せた。

「僕は『中身が酒』とは一度も言ってないぞ。ま、惜しいけどな。

酒に限りなく近い。」

一重の瞼を極端に細くし、睨んでいるようだ。

僕はそれが更に可笑しく感じられた。

だから僕は答えを教えてやることにした。

「メタノールだよ」

『メタノール』 Methanol

有機溶媒として用いられる

アルコールの一種。

別名メチルアルコールとも呼ばれ、アルコールの中で最も単純な分

子構造をもつ。

なつかしのアルコールランプの燃料を想像すれば話は早い。

「しかも高純度のメタノールだ。この状況、お前にとって不利なの、分かるよな？」

「……？」

ミロクは首を傾げる。理解していない。

そうか。

やはりコイツは阿呆なのか。

メタノールには『とても引火しやすい』という特徴がある。

その可燃性物質が、ミロクを中央に置いて万遍なく撒かれている。

正確に言えば、撒いたのだ。己の手によって。

則ちそれが意味するものは――墓穴。

僕は唱えた。神珠開灰天誅。

残り0枚。

1秒で、快晴だった空が雲に包まれ、

1秒で、ゴロゴロと轟音が響き、

その又1秒後。

チュドオオオオオオオオオオン！！

ほとばしる光線

高電圧の落雷がミロクに的中した。

僅か3秒の出来事。

ミロクはなすすべもない。

そして

落雷の秘めたエネルギーが、変換して拡散。

メタノールに引火。

校庭一体が誘爆した。

大。爆。発。

その威力は音を掻き消し、

光の波長を狂わせた。

色素が目視できない。

一瞬だが此処は『無』の世界へ転生した。

これぞ一撃必殺。

作戦成功だ。

やがて景色が映える。

校庭を丸ごとフランベしているようだ。

視界は青と赤、そしてその混合色によって占められた。

これで鎮火した後、ミロクの焼死体から『神珠』を見つけたし、『解脱』させればミッシェンクリア。

これで全てが終わる。

やった。

僕はやったんだ。

達成感が早くも漲る。

既に空には雷雲が無かった。

月は僕の敢闘を称えてくれている。

とにかく本当に良かった。

痛手を負ったものの、あっさり終わった。

死者が出なかったのは幸いだ。

早く花子を連れて帰ろう。

そしてこの奮闘記を語ってやる。

と、

そう安堵していたのも、つかの間。

「！　ガア　ああ……！！？」

僕は1匹の蛇によってミゾオチを突かれ、吹っ飛んだ。

地面にたたき付けられ、凄まじい勢いで転がる。咄嗟に立とうとし

ても、立ち上がれることが出来ない。

不意打ちとはこういうものか。

構えていなかった分、ダメージが大きい。

意識が掠れる感覚を初めて感じた。

その朦朧とするなかで、炎の渦中を見る。

そこにはミロクのシルエット。

崩れもしない。

両足でその体をしっかりと支えている。

更には、炎の中から抜け出して、僕の眼前にその『肢体』を誇示するように立った。

……。

「あつつれれ〜?」

話が違う。

爆発でミロクは黒焦げになってくれなければ困る。

しかしミロクは真っ赤な顔の筋肉を緩ませ、ニコツと笑顔まで見せた。

「今のは、ちと応えたで〜。でもそんだけや」

8匹の蛇が咆哮する。

同時に蛇の口から青白い光が放たれた。

さっきのレーザービームだ。

『解脱』用の札が残っていたが、飛び火で燃えないように、懐の奥深くにしまっていた為即座に取り出せない。

……あ。コレ死んだわ。

僕は花子の顔を追想して、その瞬間を待つしかなかった。

僕は顔を伏せる。

そして後悔した。

今まで死について軽々しく考えていたことである。

無頓着というか、このストレスばかりの社会を吟味すれば、死ぬことも一つの選択肢だと軽視していたのだ。

それが今更、間違いだったことに気づく。

いざ死に直面して、ようやく自分も生に執着しているのだと知った。皮肉なものだ。

死ぬ直前に気づいた。

既に光線は発射されている。

直ぐに僕はおだぶつになる。

僕は覚悟して、目を閉じた。

……。

……。

……。

「……」

ところが。

いつまで経っても来るはずの痛みは来ない。

一瞬で天国に逝ってしまったのかと思ったが、違う。

「……？」

不思議に思っ、顔をあげる。

そして僕は予想外の物を見た。

僕の水晶体はあの光線を捉えることが出来なかった。

その代わりに、茶色。

認識可能な色はそれだけ。

「……木？」

僕はすぐその正体を悟った。

その形から否応なしに分かってしまう。

木。

それもかなりの大木だ。タイボク

それが僕の前方に生えている。

立派に根をはって生えている

ただし葉は1枚もついていない。

丸裸の老木に見受けられる。

屋久島の縄文杉に匹敵する太さだった。

そして、

その木が、

その老木が、

ガガガガ……

なんと蛇の光線から僕を護ってくれている。

その身を呈して。

僕は意味がわからない。

なんということだろうか。

何が起こったのだろうか。

今さっきまで無かった大木が、急に生えた。

校庭には余りに似合わない大木。

なぜ、こんなものが、急に……

「何だ……コレ」

僕が漏らすと、その声が訝コタマした。

ドロヤナギノホコウケ

「『白 楊 之 巨 楯』だよ……ジン」

「＊」

私は足底をしっかりと地面につけながら、1歩1歩、歩きました。そうしてジンの倒れている方へ赴き、彼を治療する為にしゃがみ込みます。

「……はな……こ？」

「……ありがとジン。私の為に戦ってくれてたんだよね」

私は呆然とした様子のジンに対して、感謝の意を示します。

先程爆発音がする少し前に、私は長い昏睡から眼を覚めました。

どうやら昼間からずっと眠っていたようです。

しかし、私は全てを知っています。

お父さんが何故あの高千穂山に私を連れていったか、ということも。私が神の血を濃く受け継いでいて、その力を使えるのだ、ということも。

無論、ジンが私の為に八岐大蛇と戦ってくれていた、ということも。

私は直接、それらを見て確認した訳ではありません。

それでも私は知っているのです。

全て書いてありました。

あの虚無の空間に。

あの大量の文字列。

浮遊していたその形の情報は、私が覚醒した時、全て頭の中にインプットされていたのです。

だから私は、全て知っています。

「どうして花子が……」

「静かにしてジン。頭から血がでてるから、変なビーム防いでる間に止血しちゃうよ」

私は意識を集中させ、蓬^{ヨモギ}を頭の中でイメージします。

すると種がないにも関わらず、足元近くに蓬が芽生えました。

さすがにニヨキニヨキという効果音はしませんが、僅か1、2秒の間に、葉っぱをつけます。

「……つつ、しみる……」

「ごめんね、我慢して」

私はそれを噛み砕いたものを、頭に塗ります。

蓬には止血作用があるのです。

「ちいっ！ なんやねん、こねクソでかい木はあ……！」

ガガガガガガッ！！！！！！！！！！

そうして止血しおわるのと同じ時。

ミロクちゃんとかいう女の子が激昂し、ついに『白楊の巨楯』は根本から折られてしまいました。

それが私達に向かって倒れてきたので、慌てて別の樹木を生やしてそれを支えます。

まだコツは掴めませんが、私は瞬時に植物を生やすことができるのです。

「おい、その小学生！」

安堵すると、ミロクちゃんが言います。

白楊の大木が倒れた為に、視界が開き見つかってしまったようです。私の方を指して騒いでいます。

……しかしながら『小学生』とは何たる暴言。

取り敢えずシカトしておくべきですね。

誰でしょう。彼女のいう小学生とは……

というモーションをします。

「キヨロキヨロすんな！ お前だよ、そのガキンチョだよ」

でも私のささやかな抵抗は、通用しませんでした。逆に、ガキンチョと応酬されてしまいます。

「この木お前の仕業やろ？ 何の神の力やねん」

私は大いにムカつきましたが、グツと堪えました。

ここで憤りをあらわにしたら、またからかわれてしまいます。

だから私は所謂大人イワユルの対応をして、名乗ります。

「『植物神・木花之開耶姫の巡り者』花子。ちなみに16よろしくねっ♪」

コノハナノサキャビス木花之開耶姫のほうではなく、16をより強調します。

「なんやワイの1コ下かいな、チビ。お前は強いんやろな？」

「花子……」

双方から声がしましたが、私は答えません。

グラウンドははまだ火の海状態。

植物にとっては天敵。

同じ『巡り者』に対峙するに厳しいに違いありません。

私は校庭の周りの木々が燃えているのに傷心しながら、眼を閉じます。

風さえ感じられない夜の校庭。赤く染まっています。

炭素系の物質が少ない為か、燃えてはいるものの、それほど煙特有の臭いはしません。

一酸化炭素などの有害ガスも、あまり発生していないように見受けられます。

八岐大蛇についての情報も、ある程度あります。

それを全て踏まえれば、勝機は充分あるでしょう。

だとすれば、

私は彼女を、八岐大蛇を倒さなくてはなりません。

私にしか、できないのです。

正直殺し合いなんて、性に合いません。平和こそ第一です。しかし。

今は例外でしょう。

殺さなくてはならない時だってあるのです。

オカメザサノツルギ

「叢生せよ『神楽笹之如意草』」

私は涅槃の極地にいる心情で、唱えます。
すると、

カタカタカタカタカタ……と、

私の周囲を細長い笹の茎が生えて囲みます。

葉っぱはついていません。

1メートル程の笹の茎だけが、百余本。

まるで異常繁殖したケール植物。

1本1本がしなやかで、また丈夫そうに見えます。

「なんや……それ」

ガルッ

ミロクちゃんと蛇8匹は、揃って不思議そうにしています。

こんな細くて脆そうな笹を生やして、一体なにをしようというのか。
そんな雰囲気。

だから私は、説明代わりに一度、

「生長せよ『神楽笹之如意草』」

攻撃してやることにしました。

唱えた直後。

カタカタカタカタカタ……

全ての笹が急激に伸長し、ミロクちゃんに迫ります。

その速さは、音速。

いくら脆弱な笹の茎といえども、マッハ単位の初速を持ったそれは、
不尽の力学的エネルギーを携えます。

まさに、凶器となりえるのです。

「っっ！」

ミロクちゃんは咄嗟に8匹の蛇を重ねて身体を守ろうとします。
しかし、それは意味がない。

「そんなんじゃない、不十分だよミロクちゃん」

カカカカカカッ……

笹が蛇の身体を次々と貫通し、ミロクちゃんに襲い掛かります。蛇は串刺し状態です。

「ガああッ……！」

グルアアアアアアアアアア……！！！！！！！！！！

ミロクちゃんと蛇たちは、揃って悲痛の叫びをあげています。

身体を何本もの茎が、貫通しているのです。その苦痛は、欺瞞することを許しません。

アカメザサノツルギ

『神楽笹之如意草』

木花之開耶姫の創造性限界を物理的に応用し、植物を急発生、急生長させることで、無限の原動力を得ることのできる植物神の力。その阿亀笹タイプがこれ。

自由自在、変幻自在に植物たちを誘導することが出来ます。

則ち、私は畸形の植物を統率する参謀長となりうるのです。

「……」

ジンは絶句しています。

白楊に陰ったその目は、驚愕よりも恐縮を訴えているようです。その身体は地面に寝そべっています。

舌が唾液を掻く音がしました。

「ぐ……あああ……」

ギャシャアアアアア……！！！！！！！！！！

ミロクちゃんと八岐大蛇が、身体を蠢かし、笹をポキポキと折ります。

笹は耐久性が弱いのです。

「は、効いたで今の」

身体を解放して、そう言います。

至る所から血が滴っています。

フェイタルな量ではありません。

しかし痛手であることは目に見えて解ります。

頭。眼球。耳。口。首。胸。腰。腿。

ありとあらゆる場所に突き立っている筈。

これで平然としていられる筈がありません。

もはや私は勝利を疑いませんでした。

ところが。

「でも、それだけや」

ミロクちゃんは平然と、言い切ったのです。

玉響。

シャアアアアアアッ！

「うわっ……！」

「……！ ジン」

右肩の比較的傷の少ない蛇が、ジンを拘束し、首回りを締め付けます。

ジンはただでさえ虫の息であつたのに、追い撃ちを喰らって非常に苦しそうにしています。

「ま、定番の人質大作戦や。恨みっこ無しやで？ 折角タイマンかまそう思うたら、勝手に乱入してきたんやからな」

「ぐぐっ……」

私は訝しみます。

そして光って見えるダストを目で追いながら、頭を酷使しました。

「＊」

「けほっ……けほっ」

「なんや、苦しそうやな」

僕が喘鳴をあげると、ミロクは同情からか、その圧迫を緩和する。全く情けない。

状況が急展開したからといって、すっかり啞然としていた。

啞然として傍観し、自分の身を守ることさえ忘れる。

なんという失態だ。

そう自らを叱咤する。

「……はあ、はあ」

腕を蛇と首周りの間に入れて、何とか気道を確保する。

蛇の血が潤滑油となり、案外すんなり腕が通ったようだ。

依然苦しいのは変わらないが、窒息死は免れた。

「ジン！ だいじょぶ!？」

「……なんとか」

掠れた声で答える。

実際にはまだ多少余裕はあるが、まるで切羽詰まったようなトーンになってしまった。

花子が心配している様子が、知覚できる。

しかし、ミロクは全然それを諧謔視していない。

「ちっ。どいつもこいつも、ワイの気に入らんことばかりしやがって。」

再び、花子に蛇を仕向けた。

その際、流れ出た血が飛び散って、顔にかかった。生臭い臭いがして、気が萎える。

「ジンを、放して」

すかさず花子はあの巨木を顕現させ防護する。

その顔は普段とは違う。

まめなるものだ。

白楊の巨木はこれで3本。端から見ると凄むような威圧を感じる。

「それに何や？ 2人は恋仲か？ 追慕しやがって。ワイはなあ、幸せそうな奴が大嫌いやねん」

「ぐううつ……!」

ミロクが俄に締め付けをきつくする。

骨が折れる程ではないが、五臓六腑が口腔から出てしまうのではないかという憂患がある。

それに、かなり痛い。

「ジン！ 大丈夫!？」

「かふ……」

取り敢えず無事だと取り次ぎたかったが、上手く表現できない。

花子は笹を若干生長させ、どうにか八岐大蛇だけを突こうと惑乱しているようだ。

無論、ミロクはそれを黙許してくれない。

「……酷いよミロクちゃん。どうしてこんなことするの？」

「ふん。お前らみたいなボンボンに解るかい」

「わかんないよ。人を苦しめて何が楽しいの？ 何を訳に人を危めるの？」

花子は憐憫の面持ちで、言い交わす。

ミロクは依然憤怒の面構えを崩さない。

ただ、悲愴の色を加えて、

「ワイはな。親に捨てられたんや」

自身の境遇を語り始めた。〔＊〕

少し前に大規模な地震が起き、半壊滅状態に陥っていたとある島。

島国日本でも比較的大きな、本州と四国を結ぶとある島。

自我意識が確立された頃には、自分は既にその孤児院にいた。

乳児期が終わる1歳前後に両親に捨てられたのだという。

ただ周りの孤児たちも同じような立場にあったので、幼少期には特に気にすることは無かった。

第一、たくさんの同世代の子と共同生活をするのは自分にとって刺激的であったし、それが愉快でもあった。

両親がいないということは、些事に過ぎなかったのである。

コミュニケーション能力にも長けていたので畏友もたくさんいた。

順風満帆だったのだ。

・・・

幼少期は。

風向きが怪しくなったのは小学校入学をはたした児童期からだった。今まで多々いた親友達が、次々と孤児院から居なくなったのである。神隠しや誘拐などではない。

里親、養子縁組などといった形で、大勢が家庭に引き取られていったのだ。

一人。

また一人。

と、優しいような男女に連れていかれた。

内実、強い閉塞感を感じた。

家族に程近い友達を奪われたという気持ち1つ。

そして、

何故自分を貰って欲ってくれなかったのか、という気持ちが1つ。

皆が幸せそうに一つの家族の一員になっていくなかで、私はいつまで経っても、孤児院にいた。

ついには、何人もいた年の近い孤児たちは皆引き取られ、一人になってしまった。

従って孤児院の中でも孤独を感じ始める。

そして為す術もなく年を重ねると、状況は更に悪化した。

小学3年生にもなると、社会順応や自己理解も深まってくる。当然身体や思考も成長する。

それが大きな障害となった。

子供を受け入れたいという夫婦が現れても、その時点で既に自分は選択肢に入らなくなっていた。

受け入れ対象と見做されるのは、自分より低い年代の児ばかり。

大きくなると、扱いづらいということだろう。

小さい内ならともかく、小3ともなれば打ち解けるには難しい。

悪循環で、貰われずに成長すればするほど敬遠された。

孤児のまま迎えた

小学校高学年。

この頃、今までの人生観を一掃される事件が起きた。

心ない児童からの、イジメである。

2、3人の男子が孤児であることを指摘、罵倒してきたのだ。

そしてそれが皮切りのようにイジメはエスカレートし、漸増していく。

いつの間にか、イジメは学級公認の如く行われるようになっていた。

物を隠されるのは茶飯事で、直接暴力を奮われることもあった。机や椅子、教材はカラフルに彩られた。

不運にも担任は気の弱そうな新米教師で、もはや誰も助けてはくれなかった。

学校は地獄と化す。

一度無断で欠席したこともあったが、孤児院に連絡がいき結局登校させられた。

厭だった。

よもやイジメられる為に行くようなものだ。

何よりそのイジメで辛かったのは、自分の顔を侮蔑されたこと。

今まで気にしたことは無かったが、それ以来自分は鏡を見て、顔を気にし始めた。

中性的な顔立ちだと思っていたが、客観的にみると自分の顔は惨いものなのだろうか。

そう否定的な考えが優先する。

吊り上がった鋭い目。

深い頬の掘りの陰り。

細く伸びる湿った舌。

醜い。

自分自身そう感じるようになってしまった。

これでは『蛇女』と呼ばれても文句は言えない。

よって遣り場のないストレスが、衷心に蓄積する。

毎日毎日、欠かさず報告のように言われるのだ。

その度、下唇を噛む。

暫くして耐え難くなると、ある決断を強いられる。

そう、夭逝だ。

不運にも学校や近くの建造物に屋上と呼ばれる空間が無かったので、手首を切ることにした。

意外にも冷静に決断した自分に、今になって悍ましさを感じる。

孤児院の一室。

自分専用の部屋。

もう10年もいるせいか、殺風景な8畳間の個室は自分仕様に変貌している。

本来2人用の個室には、数年前まで一緒に住んでいた児の残していた物がまだ置いてある。

いつか邂逅した時に、孤児であった頃の思い出話ができるかと期待していたことだった。

だがもうそれは叶わない。

もう、永久に再会できないのだ。

だって自分は、

今死ぬのだから。

瞳を閉じて、カッターで手首を切る。

トロツと血が滴り、溢れてくる。

……痛かった。

だから、死にきれなかった。

そうして再びリストカットするのを躊躇していると

ふと、怨みのような物が沸き上がってくるのを感じた。

本質的な疑問が思い浮かぶ。

自分は何で

こんなに追い詰められているのだろう。

そもそも何で

こんな目に合っているのだろう。

……。

少し思索して、一つの結論が出た。

自殺を念ったのは、イジメのせいだ。

イジメを受けたのは、醜い顔であるのと孤児であるせいだ。
そして。

そして、醜い顔と孤児であるのは――

両親のせいだ。

ストレスのやり場を自分は見つけた。

そんな時だった。

自分を拒絶せず、受け入れてくれる8『人』の家族が顕れたのは。

〔＊〕

「ワイは手首を切った後、意識を失って何もない空間で目覚めた。そこでこのコラと会ったんや。」

ミロクは校庭をバックに言った。

校庭の烈火は次第に衰微し、脆弱な残り火が点々と散らばっているだけだった。

その景色は爆破とは違う雰囲気有していて、趣深ささえ感じられる。

僕はそれを見て風流心を働かせていたが、慢性的に続く圧迫感に、気持ち悪さを覚えていた。

「この蛇たちは、ワイと似ていた。ワイと同じように人間を憎んでたんや。」

更に拍車をかけるが如く、ミロクが話を繋げる。

「ワイはワイを虐めた奴らが、憎かった。ワイを捨てた親が憎たらしかった。だから――」

抑揚をつけてそう言うと、蛇たちが微かに唸り始める。

僕はその続きを聞かずとも感知できた。

「だから、殺してやったんや。」

「……」

花子もある程度予測していたのだろう。

目を軽く閉じて、静かに耳を澄ましている。

「楽しかったでー！ 普段ワイを嘲笑するあの顔が、絶望の色に染まるんや。泣き崩れて謝ってきた奴もおったな。そいつの断末魔がなんとも愉快やった。」

「……結局何人殺したの？」

クククと思い出し笑いのように肩を揺らすミロクに、花子が尋ねる。僕も同じように問おうとしたが、声が上手く出なかった。

「だいたい20人くらいやないかな。同級生が半分。気分で行った

そんな四字熟語がシナプス経由で頭によぎる。

今し方、僕自身が死に直面した時よりも遥かに緊張した。

全身から汗がどっと湧き出る

花子が、危ない！

「ぐああああ！」

僕は蛇の束縛から抜け出して、花子を庇おうと試みるが、前者さえ叶わない。

—

容赦なく蛇は突撃する。

敢え無くすまさじい衝突音。

僕は嫌に思って眼を閉じた。

「……」

暫くして、その光景を予期しながら目をあける。

「……？」

しかし、光景は僕が予期していたものと、だいぶ違っていた。

それは、巨大なものがある珍しい光景。

白楊や蛇ではない。

そこには巨大な『橙色の手』があった。

囂々と燃える炎で形成された手。

肘から指先まで確認できる。

それが地面から生えていた。

僕は大きいものに驚愕するのは今日2度目だなど、どこかで考えながら、聞き覚えのある声を察知する。

「駄目じゃないかナカツ君。花ちゃんをこんな危険な目に遭わせちゃ。オジサン怒っちゃうよ？」

「＊」

「花ちゃん大丈夫？ オジサンがきたからもう安心だよ」

私はナカツ君にひとこと言った後、口を開けたまま呆然としている花ちゃんに言葉をかける。

その視線は私ではなく、まだ蛇の塊の方を見ているが気にしない。

驚くのも当たり前だからだ。

視線の先。

蛇たちの密集体がまだそこにある。

花ちゃんを危険に陥れた恐怖の元凶。

相当なパワーを持って『いた』塊が、そこにはあった。

蛇は停止している。

運動エネルギーを計上するうえで、最重要因子となる『速さ』を失ってしまっていたのである。

『運動E＝質量×速さ²』

言うまでもないが、自然に減速したわけではない。

『巨大な炎の手』。

それが蛇と花ちゃんの間に出現し、蛇の頭を手の平に受けているのだ。

物が減速するにはそれに対抗する抵抗力が必須。

その抵抗力の役割をその手が果たしているのだ。

衝突部分からはプロミネンスのように炎が拡散している。

蛇は火傷を負ったようで、7匹はそれぞれ分離して濁った悲鳴を上げていた。

メグミビノミギウデ

『核火之右拳』

地殻やマントルの更に内側、地球の中心にあるコアという場所のマグマを熔岩として地上に誘導し、腕型に形成した、神の手。

則ち主成分は紛れも無く地球の溶岩である。

イメージとしては右肘を切り落とした部位。その炎版だとおもってくれればよい。

「ちいっ！ また新手か？！ 誰やねんお前はあ！」

「……」

蛇を生やした少女が喧しく騒ぐが、私は一先ず無視した。

そのかわりに私は右腕を天にかざし、槍を突く要領で手を勢いよく突き出す。

すると。

須臾にして『核火之右拳』が少女に向けてその指先を急接近させ、身体を突く。

実際には人間の脳には処理しきれないスピードであった為、残像として一筋の光が見えただけであった。

「ぐうつ……！」
声。

一見少女の声だと誤解してしまいそうだが、実は喘ぎを上げたのはナカツ君の方。

ドサドサッ、

という2つの物が落下した音と共にそれは伺えた。

1つは無防備に地面に自由落下したナカツ君。

そしてもう1つは、

・・・・・・・・・・・・・・・・

『核火之右拳』によって切断された蛇の首

今際の叫びをあげて、頭だけでくねっている。

やはり神だけあって生命力がつよいのか、直ぐに切断面から新しい首が生えてきたが、ナカツ君を救出することはできた。

余りにナカツ君が苦しそうだったので、助けてあげたのだ。

私の右腕は『核火之右拳』とリンクしており、腕を動かせば、自由に巨大な炎の手を操作できる。

私の力だ。

「大丈夫だよねナカツ君。というか学校の外さく、大パニックになってるよ」

「けほっ……けほっ」

私はナカツ君に近況報告をして、彼を気遣う。

さっきの大爆発や、落雷で街中は大混乱していた。

消防車やら警察やらが混乱を収める為に忙しそうだったので、後処理が大変だろう。

まあ、私はその騒ぎでこの出来事に気づいてやってきたのだけけれど

……

「紅が何でここに……まさか……」

「紅さん……？」

アマテラスの教典

同時に私を呼ぶ声。

それに含まれた質問に私は応ずる。

「おじいちゃんが『巡り者』だよ？ そりゃ高確率で私も『巡り者』になるっしょ」

案の定2人は目を見開いて硬直している。

「なんやねんお前も『巡り者』か？ ワイを多勢に無勢で虐めにきたんか？」

そして2人以外の少女の言葉。

私はそれに応酬して、名乗る。

「『炎神・天火明命の巡り者』アメノホアカリ海部紅。あんたさー、かなり自己チューだよね」

「＊」

「なんやて？」

少女は眉間に皺をよせて、私を睨む。

元々鋭いその目つきは、更に尖った威圧感を与えていた。

私はこの程度では怯まないが、普通の人なら奇妙に思ってしまうに違いない。

「『虐められたから、自分を捨てたから、人を殺す』っていう考え方が、自己中心的だっていつてんの」

さっきから聞いていて、私は少女のとてもない理屈に呆れていた。20という殺害人数も考えると、どうも頭が逝っちゃっている。

それか、殺している内に感覚がおかしくなったとか思えない。

普通の人にとって、人の死というものは稀にしか遭遇しないものだ。稀に、それも多くても数人単位でしか亡くならない。

だから私達はその死の重みを感じ取ることが出来るし、命に対する尊重の念を再認識できるのだ。

ところが、20人ともなると、話が違う。

万事にいえることだが、人はよくある出来事に『慣れる』習性を持っている。

厭に感じていたものも、回数をこなせばその内になんてことないものになるのである。

必然的に殺人の場合も然り。

少女は『己の手によって人が死ぬこと』に慣れてしまったのであるう。

その眼光からは快感さえ覚えているように感じ取れる。

「あんた自分勝手すぎて感覚マヒってんじゃないの？」

私はズバリそう伝えたと、ミロクは激昂する。

火傷を負った7匹の蛇たちも、鼻を朱くしながら吠えている。

「お前らにワイの何がわかるねん？」

「わかるさ」

「分かってたまるか！ 温室育ちのお前ら何かに分かるはずあらへん！」

「……紅」

そう少女の相手をしている内に、ナカツ君が近くに避難してきたのを黙視で確認する。

不安な様子だ。

花ちゃんも少しよってきて、似たような表情を浮かべている。

少女を怒らせてどうしようというのか。

そう言いたげだ。

だから私はそれを払拭するために、大丈夫だから、と囁いて、

「それが分かるんだよ、あんたの気持ち……」

「あ？」

言った。

「私も、両親いないからさ」

「＊」

「私に親はいない。もう死んだんだ」

呟くほどの小さな声。

それでも着実に伝わるように声を通す。

「それにさ、見てよこの容姿。髪もそうだけど、顔も男みたいだろ？ まあ、整ってはいるんだけどさ。私も『オトコ女』って言われて虐められてたんだ。通ってた公立校も転校したよ」

「え……」

「……」

身振りを踏まえて語る。

少女からの反応はない。

むしろナカツ君や花ちゃんの方が、だいぶアクションがある。

だが確実に効果はある。

「でも私はあんたとは違う。親がどうだって、虐められたって、誰も恨んだりしなかった」

「……黙れ……」

「ましてや殺してやる、だなんて考えもしなかった。そんなの殺人を正当化するのに、無力すぎる動機だからだ」

私は正直言って挑発は得意じゃない。

いつも口を軽くして話しているのは、人に嫌われたくないから。

それが故についた会話癖では、少女を怒らせるには弱いのではないかという危惧があった。

でも、今は安心していい。

だって少女は

かなりの短気みたいだから。

「黙れ……」

「あんたは周りが見えてなかったんだよ。だから殺人なんてことを平然とする。……単なるチンピラだ！」

「黙れェ！」

少女は蛇と共に声高に訴える。

それが証拠に、こんなに早くキレた。

口を大きく開くと、決して清潔そうではない犬歯が牙を剥く。

私は予定通りだったので、更に言葉を紡いだ。

「そんなチンピラのアんたは私には勝てないよ。絶対にね」

「だったら証明してみろよ！ 言っとくけど、ワイに炎はいまひとつやで」

湿気を含む風が吹く。

私はそれを肌に感じたのを合図に、気を引き締めた。

少女は矢継ぎ早に3匹の蛇を伸展させる。

私は冷静に右腕を動かし、『核火之右拳』でそれをまるごと捕縛した。

握り潰せはしないが、じわりじわりと丸焼きにしてやることにしたのだ。

案の定、蛇は熱さから悶えている。

また、それと同時に前に走り出し、少女に接近する。

しかし、続いて2匹が襲来。

炎の手は店員オーバーなので、私は新たにマグマを地上に呼び起こす。

メグミビノバシラ

「吹き出せ……『核火柱』」

鉛直方向に誘導し、溶岩の塔を2本生み出す。

灼熱という修飾が似合いそうなその塔は、蛇の顎にクリーンヒットし、上空へ吹っ飛ばした。

ジャックの童話に出てくる豆の木のように天を貫くその灼熱塔は、茶色に変色した校庭を割って進む。

これを操って、少女に体当たりさせるのだ。

少女は、蛇を前方の地面に突っ込ませ、その反作用の力で後退。回避する。

だが突っ込んだ蛇はいけにえとなる。

灼熱塔に挟まれる形で激突を受けた蛇は、火だるまになっていた。相殺され、『核火柱』もろとも蛇は力尽きる。

「なっ……!?!」

少女はその様子に、初めて顔を青く染める。
驚きからだろう。

今までの言動を含めて考えれば至極当然だ。
あれ程の大爆発を受けて涼しい顔をしていて、『炎はいまひとつ』
という発言。

つまり八岐大蛇は炎属性には滅法強い方なのだろう。
そうであるのに、炎に包まれて瀕死している。

納得がいかなかったに違いない。

私は走りながらその疑問に返答してあげた。

鼻に生き物を焼いた時の刺激臭を知覚したが、気にしない。

「……ねえ、育成型のゲームなんて、やったことあるよね？」

「……ちい！」

少女は一時怯んでいたが、声に気づいたように蛇を仕向ける。
残った2匹を振らせて、決死の勢いで迫って来る。

そして私は、その時。

……勝った。

理想通りに進んだ事を受けて、勝利を確信していた。

心の中だけでほくそ笑む。

機嫌よく私は言う。

「ああいうゲームってさー。いくらタイプの相性良くても、レベル
が違いすぎると、歯がたたないんだよねー」

最初の3匹を握り絞めていた『核火之右拳』から解放させる。

握られていた蛇たちは、過度に焼かれて炭に近い状態となっていた。
もう身動きとれないだろう。

それを目だけで確認してから右手を移動させ、追撃から防御させる。
その間に私は少女の眼前に迫った。

「ぐ……」

視線が一度合わさる。

少女はこの危機をどうにかして避けようと後ろへ下がった。
歯を食いしばって、目を盛んにキョロキョロとさせている。

しかし、彼女を守ってくれる手立てはない。
蛇も8匹全て、役に立ちはない。

「終わりだね」

「ま、まて……」

私は構わず空いている左手を普天へと翳す。
するとボコッという音。

今度は炎で象られた左手

メグミビノヒダリウデ

——『核火之左拳』が生えた。

少女の前にそびえ立つ。

これが、八岐大蛇を抹殺する一手となるのだ。

「私とあんたじゃあ、レベルが違いすぎるんだよ」

「待ってくれ！　ワイはまだ——」

「同情はしない。酌量するには、あんたの罪は重すぎる」
言って左手を、はたきおとす。

『核火之左拳』は手の平に少女を飲み込んで、倒れ落ちた。

ドゴオオオオオオオオオオオン！

直後に地震。

そこを震央として地震波が発射されるのが分かった。

「がぁぁぁぁぁ——！！」

炎熱によって熔けてゆく姿が、黒いシルエットによってよく分かる。

八岐大蛇の死は、決定づけられた。

私は安堵する。

ジ・エンド、ってやつだ。

……地震で更に学校の外は大混乱だな。

でもおじいちゃんが何とかしてくれるから大丈夫かな。

そう考えて、胸を撫で下した。

〔＊〕

よし、終わりだ。

「つ、強すぎるだろ……」

「……紅さん」

ナカツ君と花ちゃんも同じように、近寄ってきてそう漏らす。

「まーね。私チヨ一強いから。こんなの朝飯前さ」

私は2人に誇示するように言った。

実際『巡り者』としての戦いは物凄く久しぶりで緊張していたのだが、言わないことにした。

「じゃあ何で最初っから一緒に戦ってくんなかったんだよ」

「いや、だって知らなかったんだもん」

「は……？」

気持ち（?↑コレが）10個付きそうな間抜けな声をナカツ君は出した。

私はメラメラと燃える八岐大蛇の断末魔を耳にとめ、答える。

「おじいちゃん何も私に言ってくんなかったし」

「大和爺さんが？ 何でやねん」

「私って超強いからさ、力が制御できなくて、一般人に被害を及ぼすと思ったんじゃないかなー。時々マグマがドバドバ出て、止まなくなっちゃうんだよね。アハハ」

「アハハ、って何やねん……全く……僕が思い詰めてたのは何だったんだ……」

「ジン、口調が微妙に関西弁になってるよ。変なの」

緊張がとれたのか、2人からは笑顔も覗ける。

やっぱりこの2人には笑顔が似合う。

「よし。じゃあ後始末しよう。ナカツ君多分『解脱』のオフダ持ってるよね」

私は妙に2人に親しみを抱きながら、話を進める。

八岐大蛇の断末魔は既に聞こえなくなっていた。

あとは鎮火し、解脱させるのみだ。

と、私自身気を緩めていたその時。

「「「「「おのれエ！ 人間神の人形どもメ！」「」「」「」

「
低音大音量の声が訝した。
燃え盛る炎のなかから。

「＊」八岐大蛇の台詞も統一
僕たちは突如響いた声に反応して、反射的に身構えた。
その声の主はすぐに分かった。

八岐大蛇のものだ。

八戸ミロクのものでなく、

八岐大蛇本体の。

花子は即座に笹を生やし、攻撃しようとするが、紅がそれを咎めた。
「もういい。八岐大蛇はもう動けない筈だ」

紅がいう。

動きのある姿がないことから、どうやら本当のようだ。

すると紅はその声と何やら対話を始めた。

「八岐大蛇。1つ聞きたいことがある」

「なんだト？」

会話が出来るものなのかと驚いたが、今は口だしすべきでないと思
った。

「何故その娘に寄生したんだ？」

「……」

八岐大蛇は少し黙ったが、その問いに答える。

「……人間どもを、この地上から抹消するたメダ……その為に遥々
黄泉の国から甦ってきたのダ」

「黄泉の国？ 神はそんなにもたやすく三界を移動できるのか」
三界。

『高天原』

『葦原中国』

『黄泉国』

のことで

言い換えれば、天国と地上と地獄のことだ。

正確には少し違うが、専門家にならない限り知る必要はないだろう。
「今までは出来なかつた。三界を自由に行き来するには、肉体が有る限り、特殊な力がなければ出来なかつたのだ。人間が生きたまま死後の世界に行けぬのと同じだ」

「『今まで』は出来な『かつた』……過去形なのか？」

紅は鋭い問いを投げかける。

するとその声は含み笑いをしていった。

「くくく……そうなのダ。今までは、出来なかつた。だが、今は違う」

烈しく燃え盛る炎の中には、とても八岐大蛇と認識できる影はない。ただ確かに声は炎の中から響く。

この状況に少し混乱している僕であったが、聞き漏らさないよう耳を澄ます。

物が燃える特有の音。

それと交わって伝わる。

「15、6年前のある日のコトダ。この地上にある『巡り者』が生マレタ。」

「『巡り者』……」

紅は1人呟いた。

「くく……そウナのだ。その『巡り者』！ その『巡り者』の人間の誕生が、世界の門扉を拓いたのだ！」

声は反響していた。

僕と花子は良く分からないその会話に、黙っているしか無かつた。しかし紅は全て理解しているように核心的な質問をする。

「ふくん。じゃあさ、あんたみたいな動物神は、まだいる訳だ？」

「その通り。我を殺しても、まだまだ人間神を恨む動物神は多々いる。人間に寄生して地上に顕れルダロウな……お前らを殺ス為に……」

「なんだって……!？」

僕は思わず声をあげてしまう。

僕は八岐大蛇を倒して花子を救えば、それで全て終わると思っていた。

それこそ魔王を倒してお姫様を救うように。

ところが今の発言だと、魔王がまだまだ沢山いるということになる。八岐大蛇だけじゃないのかよ……

僕は強い倦怠感に苛まれる。

紅はそんな僕を尻目に、「そうなんだ」といつて続ける。

「で、さっきから人間神がどうたら言ってるけどさ、何でそんなに恨んでんの？」

聞き出せることは一氣に聞いてしまおうといった口振りである。

良く分からないが、もう時間がないようだった。

気持ち早口で返答がくる。

「……元を辿れば、全て人間神が悪いのダ！ 人間神はこの地上を、全生物の住家として造ることを約束シタ。それなのにも関わらず、地上は人間によって支配されているでハナいか！ 挙げ句の果てには我々動物神を黄泉の国へと追いやツタ！ これは許せることではナイー！」

「……」

そうして最後に言い残して、その声は途絶えた。

不協和音が突如収まって、耳に開放感が満ちる。

反対に胸には、蟠りが満ちていくのが分かった。

煙が妙に目に染みた。

）

その後、今度こそ安静の時を手に入れた僕達は、後片付けに追われていた。

実際には消火しただけなので、些かオーバーな表現かもしれない。

時刻は午後10時。

校庭に備え付けられている時計は壊れてしまったが、紅の腕時計を見て確認する。

予想外に過ぎていない時間に、ビックリした。

それだけ濃厚な時間だったのかもしれない。
空気の流れも、いつもより遅く感じる。

しかしながら、更にビックリしたことがある。

それは、八戸ミロクが生きていたということだ。

僕はてっきり八岐大蛇の死イコール八戸ミロクの死だと思っていた。
事実、紅はミロクを炎の餌食にしていたし、手加減なしで戦っていた。

まるで殺すのが目的であるように。

しかし。

違っていたらしい。

ミロクを焼いたはずの炎の中からは、確かに人の焼死体があった。
ところが、その死体の『神珠』を『解脱』させた後、グロテスクな
肉体は急に発光したのである。

そうして、物凄い明度のそれが収まると、ミロクの健康的な身体が
横たわっていた。

まあ、直後は裸だったので違う方面で気が動転したのだが……。

紅が言うには、

『ミロクを殺さないように八岐大蛇だけ焼いた』そうだ。

そんな都合良くできるものなのか。

僕にはさっぱり分からないから、深く考えないことにした。

やがて大和爺さんと浅間教授がやってきて、全てを報告した。

大和爺さんは、騒動になった町の人々全員の記憶操作をしなくては
ならないようで、妙にイライラとしていた。

加えてミロクの記憶をどうかし、辻妻を合わせるのだという。

忙しそうに、劳いの言葉もなしに僕達の元から去って行ってしまっ
た。

対して浅間教授は花子をずっと気遣ってる。

どうやら初めて『巡り者』の力を解放した為に、花子は気疲れして
しまったらしい。

物凄く眠そうだったので、先に家に連れて帰って貰うことにした。

そうして僕は紅と2人で学校に残る。

後頭部に痒みを感じるも我慢していた所、不意に紅が言った。

「花ちゃんのせい……かもね」

「……何がだ」

「今回の件がさ」

「……？」

今回の件が花子のせい。

僕は話の筋が分からなかったが、紅に向き合う。

目が細くなっている。

いかにも真剣さをアピールしているようだった。

僕はさっきから意味不明なことばかり言う紅に、面倒な気持ちを抱きながらも、会話する。

「私はあのミロクとかいう娘の話を聞いてた。ナカツ君も聞いてた
だろ？」

「……ああ」

「そんでもって、私と八岐大蛇との話も聞いてたよね。……何か気
付かない？」

「……」

僕は思索してみるが、思い当たることはない。

首を傾げて続きを促す。

「ミロクはさ、1歳の時に親に捨てられた、って言ってたよね」

「……そうだった？」

僕は正直あまり覚えていなかった。

八岐大蛇に締め付けられていたので、頭に入って来なかったのだ。

「そんでもって、八岐大蛇は15、6年前に、世界の門扉が拓かれ
たと言った。——つまり、15、6年前に八岐大蛇は地上に甦った
訳だ」

強い風が一度吹く。

耳に特有の風切りの音が響いた。

そしてその声も響いた。

コイツミの教典

「ここまで言えば……分かるよねナカツ君」

簡潔に纏められた情報から、ひとつの憶測を導き出す。

「八岐大蛇の転生のせいで、ミロクは捨てられたって言いたいのか……？」

ミロクは花子に対して『ワイの1コ下』という発言をしていた。

花子は16であるから、必然的に17歳という年齢が弾き出せる。

そこから世界が拓いたという15、6年の星霜を引くと、その解は1、2年。

見事にミロクが孤児になった時期と一致する。

「その通りだよナカツ君。ミロクの親も、何か彼女から異質なものを感じとったんだろうね……」

「ミロクが自棄に好戦的だったのも、八岐大蛇のせいか……」

「うん、そうだろうね。そしてだ……もうひとつだけ、気掛かりなことがある」

「気掛かりなこと……」

「そう、気掛かりなこと。八岐大蛇は言ったよね『とある巡り者によって世界の門扉が拓かれた』って……」

僕はある程度予期してしまう自分を意識する。

だけでもそれは、認めたくない予測。

紅は二重の目をより冷徹な物にして言った。

「一体誰だろうね。その『巡り者』って言うのは」

「……」

「分かってるんでしょ、ナカツ君」

「……」

……指摘通り分かっていた。

分かりたくなかったが、分かってしまった。

『とある巡り者によって世界の門扉が拓かれた』のは口説いようだ

が、15、6年前。

則ち、その巡り者が生まれたのが15、6年前。

現在15か16歳ということになる。

それが該当する『巡り者』といえば、現時点でたったの2人。

「まず年齢的に当て嵌まるのが第1の条件。そして、世界を拓くには絶大的な神の力が必要になる。それだけ神に近いことが、第2の条件」

「……」

また、その2人の内1人は神の力なんぞ使えない程、血が薄い。となると、その『巡り者』は残る1人に絞られる。

「花ちゃんしか……いないよね」

「……」

僕は沈黙をただ続けた。

確かに天野教授は土曜に言った。

浅間花子の大半は神の血だと。

それと紅の提示した条件を検証すれば、花子がその『巡り者』だという可能性は実に高くなる。

そして。

花子の誕生によって三界が拓かれ、八岐大蛇が顕現。そのせいでミロクは孤児になり、殺人を犯した。

前者が真実であれば、当然後者も真実になる。

僕は信じたくは無かった。

だから言葉を濁す。

「でも……花子は……」

「認めたく無い、っていう口ぶりだね」

答えるべき言葉を模索する。

だが紅の言葉が心中に刺さっていく感覚がして、集中が逸れていた。「でもさ、ナカツ君。もし花ちゃんが世界を拓いたとしたらさ、大変なことだよね」

「……ああ、分かるよ」

三界のゲートが拓いている、ということは、人間を恨む動物神が地上にいくらでも顕れる、ということだ。

今回は20という数字であったが、相手は神だ。

このままでは、いつしか膨大な犠牲者数が出るに決まっている。

それは防がなくてはならない。

それを防ぐには、世界の門扉を封鎖するしかない。

つまり、ゲートを拓いている『巡り者』を、どうにかするしかないのである。

「じゃあ何で君は認めようとしないのかな？ 分かってんだろう、人が死ぬって」

「……まだ、花子がその『巡り者』だと決まった訳じゃない」

苦し紛れにそう答える。

その答えに紅の顔からは感情が抜けていくのが分かった。

これは憐憫か、憤慨か。

ただ僕が感じたのは、

「それは最悪だね、中津仁彦。」

「……え」

紛れもない『恐怖』だった。

紅が僕を初めてフルネームで呼んだのもそうだが、いつもと様相が違い過ぎた。

霊感はないが、まとっているオーラの色が違う。

「それはお前が、浅間花子に惚れてるから、最悪してるだけなんだよ。お前は顕れる動物神に対峙出来るのか？」

「……」

その威圧に耐え切れなくなって、視線を泳がす。

はつきり言って、それは出来ない。

僕には神の力が使えない。

全くの無力だからだ。

「今回分かっただろ、動物神は、危険だ。……確かに浅間花子がその当事者だという確証はない。けどな、もし確証があれば、私は然

るべき対応をとる……。一殺多生だからね」

「……！」

然るべき対応。

一殺多生。

そのキーワードに敏感に反応した僕だったが、結局口は開けない。やっぱり黒い土を見つめて、箝口して語らず仕舞いである。黙って思索する。

「……ま、それもまだ先の事だけだね。でも動物神いたら全力で殺しにかканなよ、ナカツ君。オジサンも力は貸すけど。」

そうして暫く気まずくしていると、紅はいつもの調子で話した。

僕はその緊張が解けたのを見て、どっと疲れが出てしまったが、熟考することは止めなかった。

夜はまだ浅かった。

『一殺多生』 イッセツタシヨウ

1人を犠牲にすることによって、多くの人の命を助けること。

ムハンマドやキリスト、釈迦までもがこれを説いた。

「＊」

その後。

早々と退散した私達は

祝勝会をあげていた。

まあ、なんだか色々あったのだが、実況する気が失せたので、内容は会話だけでお送りしたい。

想像力を働かせて読んで欲しい。

私は何だか疲れてしまった。

まあ、元はと言えば、落ち込んでいるナカツ君に私が酒を勧めたのが全ての始まりだった。

(前略)

「なーっはっはっは！ 愉快だー！」

「ひょっとく飲み過ぎだよジン（人名）」

「そうよアンタ、うるさくて階下の人から苦情きてんのよ！」

「うるへー！ 酒飲まずにやってられっか！」

「何で未成年のアンタが酒なんか飲んでんのよ」

「詩織ちゃんの言う通りだよジン（人名）。お酒とドラッグはハタチからだよー」

「ドラッグは駄目よ！ アンタも酔ってんじゃないのよ！」

「あーうるせーな！。ほら、花子。もつとのめ、好きだろジン（酒の名前）」

「うん。私ジン（酒の名前）大好き♪」

「素直な花たん萌え〜！ 僕も花たん大好き〜！」

「きゃ。ちよつとジン（人名）。そんなトコ触っちゃ駄目だよ」

「花子に触んな！」

「ごふっつ……！」

「わわっ、お父さんそんなに蹴ったらジン（人名）死んじゃうよー」

「何よこの茶番……」

「大変！ ジン（人名）どっかから鼻血でてる！」

「へ？ どこどこ？ どっから鼻血でてる、花たん？」

「鼻からに決まってるんだろ！ 花たん呼ぶな！」

「げぶっつ……」

「……」

（中略）&（後略）

とまあ、そんなこんなで夜は更けていった訳である。

どうやらあのカップルにお酒を与えてはならなかったようだが、元氣そうなので結果オーライだろう。

ナカツ君の部屋で、その祝勝会は深夜4時まで続いたらしい。

もう私は疲れてしまっているので、殆ど省略してしまったが、まあ要望があればその内ちゃんと実況つきで書きたいと思っている。

まあ要望なんて無いと思うが。

とにかく今日は寝てしまいたいと思う。

きっと学校は休むことになるが、おじいちゃんの記憶操作を手伝う羽目になる。

今回の騒ぎの収縮。

おじいちゃんは未だ帰ってこない。

決して短い時間では終わらないのだろう。

丁度、動物神との争いのように。

〔*2↓〕

あれから1ヶ月の月日が経った。

『あれから』とは、無論八岐大蛇と対戦した時のこと。

そして、酒に酔って浅間教授のドロップキックによって、打撲をした時のことである。

翌日病院に行って、八岐大蛇との激戦の傷を癒しに行ったのだが、その打撲が一番大きな怪我だったのである。

親バカというか、浅間教授の花子に対する愛情は度を越している。花子の為だったら、喜んで僕を殺しそうだ。

全く以てとんでもない。

それとも親とはそういうものか。

僕にはまだ分かりそうにない。

日曜日の午前10時11分。

僕は自宅リビングのソファーに腰かけて、そんなことを思い出して、苦笑していた。

ソファーには、酒をラッパ飲みした際、盛大に零した時のシミがついている。

それを見て、あの時は大変だったと振り返る。

あの後、階下に住む人に謝りにいったりしたのだ。

大家さんにも迷惑をかけたと反省する。

ピンポーン。

そう寛いでいた所、呼び鈴がなった。

誰だろうと思いつながら、玄関に向かって、ただ慣例的に扉をあける。

「はいはい。どなたでしょう——かあ！」

すると、開けるや否や、ラグビーのタックルの勢いで抱き着かれた感覚がした。

一瞬、強盗かと思ったが違う。

声が女の子の物だった。

「あんたの……せいなんだから……」

「つつ……詩織!？」

尻餅をついた痛みと、お団子頭から匂うシャンプーのいい香りに怯みながら言う。

抱き着いてきたのは、紛れも無い、あの大屋詩織だった。

僕は離れるよう促したかったが、それは出来なかった。
物理的にではなく、雰囲気的に。

「あんたの……せいなんだからあ!」

「!」

僕の胸に埋もれていたその美顔を上げて詩織は叫んだ。
そして分かった。

その顔は、涙で、くしゃくしゃになってしまっている。

あの強気の詩織が、泣いていた。

「どうしたんだ一体!」

ただならぬ感触から、詩織に尋ねる。

そうして一言。

らしくない子猫のような声で。

「アタシ……アタシね……」

そして驚愕。絶句。沈黙。

僕は一時、頭が真っ白になった。

神は巡る、とある少年に。

神は巡る、とある少女に。

神は宿る、現代に。

そうして神話は、繰り返される。

「第1幕 完」

主題 親の存在

副題 慣れの恐さ

アメノホの教典

「*201」

梅雨が明けても暫く気温が上がらなかったせいか、今年初の35度越えは、かなり体に堪えた。

今まで眠っていた蟬の声が、何とも耳障りなハーモニーを作り出している。

その蒸し暑さを引き立てているようだ。

ただ教室にはクーラーも扇風機も、まだ設置されていない。

冷房器具は休み始めの講座から作動するらしい。

南国の県の生徒は暑さに強い、とかいう勝手な先入観によって、どっかの教育関係者が決めたのだ。

恐らくは空調の効いている会議室で。

県立高校だから仕方ないのかも知れないが、そういう考えは止めてほしい。

暑いものは暑い。

教室の中の生徒のその白い夏仕様の制服は、既にびっしょである。授業よりも、下敷き等で風を生み出す作業に忙しそうにしている。全体的に集中力に欠けていた。

そんな今日は夏休み一週間前。あの詩織に抱き着かれる2日前の日のこと。

前後期2学期制の進学校なので、学期が終了する訳ではない。

しかし1つのゴールが見えたせいか、生徒の間にはだらけた空気が漂っていた。

「暑すぎる……」

それを証明するように、クラスメイトの1人が顔を机に伏せ、うなだれている。

「見苦しいぞお前」

その額には大量の汗で装飾されていた。

ハンカチを差し出し、拭くように促す。

「捺^{ナツ}乃^ノって、そんなに暑いの手苦しかったっけ？」

「いや……別に苦手じゃないけどさ。雰囲気^{キョウキ}がさ……」

「雰囲気？」

僕は机に手を置いて体を楽にすると、そのクラスメイト――清原^{キヨハラ}捺^{ナツ}乃^ノに聞き返した。

「幼なじみなんだから分かるでしょ。私は気まずい事が駄目なの」

「ああ……なるほど」

捺乃は目だけで、とある席を示す。

昼休み。

各自が思い思いに机に弁当を広げている中、その座席には誰もいなかった。

欠席しているのだ。

その席の生徒は。

「服部君のウワサのせいで、何だかクラスの空気が濁ってる気がするの」

「……ま、当然だろうな」

実は今日休んでいる服部日向には、とある嘘のような噂が流れていたのである。

捺乃は昔から敏感に空気を察知していたから、些細な状況の変化も、感じ取ってしまうのだろう。

噂によって休み時間の度にどよめく教室に、何か嫌悪感を感じたのだ。

田舎だからか、噂の拡がるスピードも異様に早かったから、尚更だ。

僕はそう推測した。

「でもそれ、まだウワサだからな。そんなに気にする必要ないんじゃないか？ お前の悪い癖だぞ、それ」

「……そうかな」

捺乃は僅かに茶色の光沢をもつ髪を携えて、首を傾げる。

肩に揃うサラサラした髪は、すっきりとした印象を与える。

バスケット部であるせいか、身長は大分高く、花子とは対象的である。座高だけでもそれがよくわかる。

少し前まで、花子とそんなに差はなかったのに、人は変わるもんだ。鼻筋の通った顔の汗が拭き取られるのを見ながらそう思う。

捺乃は、この学校に2人しかいない幼なじみの内の1人なのである。本来ならもっと気の知れた友達と高校生活をスタートしたかったのだが、僕は中学まで隣の県で育っているので致し方ない。

当然残りの1人は花子な訳で、入学当初は男の友達が恋しくて仕方なかったのだが、今となってはどうでもよい話であろう。

男友達も数人出来たし。

「でも日向くんのウワサ、妙にリアリティがあるじゃん。日向くんチャラいし……」

その男友達が1人、野球部の服部日向のとあるウワサに対し、捺乃は神経質にしている。

「うーん。だけど流石にそれは無いんじゃないか？ 日向も弁えてるだろうし」

「でもさ……」

「『でも』じゃないの。気にしすぎ何だよお前は……」

「何してんの。ジン、捺乃ちゃん」

と、神経質な捺乃の相手をしていた所、いかにも脳天気な少女が教室の外からやってきて言った。

「そうだ捺乃。こいつを見習え。多分何も気にしてねえぞ」

「はは……まあそうだね……」

「へ？ 何のこと？」

ロングの黒髪を後ろで束ねている小顔の少女は、二重の目をパチクリとさせて不思議そうにしている。

捺乃とは違って体中みんなミニサイズなものだから、そのロングが存在感を放っていた。

どうやら中庭の花達に、水を与えに行っていたようだ。チェックのスカートが濡れているのは、なぜだろうか。

水を出し過ぎて、ホースの暴走を制御出来なかったのだろうか。以前にも、同じようなドジをして、びっちゃんになっていたことがあるから、そんな感じであろう。

ま、濡れても花子は気にしないし、制服が透けたりしても大丈夫だろう。

ボディラインは極めて直線的なことだし。特に胸部とかは。

「花子ちゃんの良いなあ。悩みとか無さそうで」

「む、心外だよ捺乃ちゃん。私にだって沢山悩みはあるよー」

「何だよ悩みて」

僕は問う。

「私もう何年も、全く背が伸びないんだよー。毎日牛乳飲んでるのに。それに……」

「それに？」

「おっぱいだって、全然おっきくならないし……」

「……」

「あー、なるほど……」

花子が視線を自分の胸に落として不意に言ったのに、僕は動揺する。教室中から視線が集められたのを感じて、慌てて『会話に参加していなかったフリ』をする。

教室にはだいたい10個の仲良しグループで各々が固まっていて、どこを向いても視線がいそうだったので、息を殺して外にでた。

「でも、おっきいのも大変だよ。バスケットする時スッゴい邪魔になるし」

「まだペッタンコよりマシだよー」

「私の分けてあげたら良いんだけどね」

「ホント、どうしたらおっきくなるかな？」

「んー、そうだねー」

僕は必死に聞いていないアピールをするが、女の子2人はお構い無しにガールズトークを展開する。

今に限って捺乃は回りの視線を気にしてないようである。
対して男の僕は気まずい。

だからそのまま、教室に戻ることはなく、その日を終えた。
もしくは、終えてしまった。

「*202」

そしてそれから2日後。

思えばあの時、会話を逸らして、日向の噂について深く考えなかったのが、失敗だったのかもしれない。

今の状況を鑑みると実にそう思う。

僕は自宅マンションの玄関先に座り込み、大家さんの愛娘、大屋詩織に抱き着かれ、硬直していた。

僕の胸に顔を沈め、涙を流している。

靴が踏み潰されていたが、とてもそんな些事に言及できない。

それどころか、何を言っているのかも。

詩織は言ったのだ。

僕に向かって。

「アタシ……アタシね……」

「……おなかに、赤ちゃんいるの……」

「……ええっ!？」

当然僕は困惑した。

「だ……誰の……?」

「……」

反射的に聞くが、詩織は唇を噛んで俯いている。

対して僕は頭をフル回転させて、状況把握にあたっていた。

玄関先の段差部分に尻餅をついた為に尻が痛い、致し方ない。

まず考えたのが、あの泥酔した夜のこと。

僕は相当酔っていたようで、その証拠に記憶がない。

しかもかなりのハイテンションだったらしく、紅に大分からかいを受けたのだ。

ついでに細部まで報告を受けた。

花子にも記憶がないのだけが唯一の救いだ。

つまりあの時酔った勢いで……なんていう可能性がなくないのだ。そう考えて、動悸が激しくなる感覚がした。詩織の速い脈が体越しに感じられる。

近くに掛けられた時計の、秒針の音がそれと共鳴する。

チクタク。

そんな効果音が意図的になっている様に思えてしかたない。

そしてゴクリと唾を飲んだ。

尋ねる。

「僕との……赤ちゃん？」

吉備津彦の教典

「……ううん、違う……」

詩織は瞼を重たそうにして答えた。

ハッキリ言って僕は安堵する。

もしそんな行為をして、意図せず子供を授かったとしたら、天命にも社会に対しても申し訳がないことなのだ。

親どころか友人にさえ、合わせる顔が無くなる気がしてならない。ともかく、僕が当事者でないことに多少楽な気分になった。

自己中かもしれないが。

「じゃあ……だれの……」

「……」

依然として詩織は鼻を赤くしている。

目の下のクマから、随分焦燥している様子が分かる。

その童顔には似合わない。

「……」

暫く黙って、ようやく詩織は顔を上げる。

噛んだことで赤く染まった唇を離して発声した。

「……ひゅうが……日向君。アタシ……日向君と付き合ってるの……」

「日向って……服部日向のことか」

「うん……」

その詩織の指摘した名前が知己のものであったことに、また別の動揺をする。

服部日向。

同じ学校の同級生で、茶髪の球児である。

見た目こそチャライが、進学校のあの高校に受かるあたり、実は好青年だったりする。

クラスの皆の印象は決して良くないが、僕は日向に対してある程度

の評価をしている。

だから詩織の口から、その名が発せられたのは、想定外だったのである。

「……日向」

詩織は再び視線を落とす。

僕は玄関の扉が半開きになっていたので、足を使って器用に閉める。こんな状況を、誰かに見られては面倒だと思った為だ。

ガチャンといういつもなら何気ない音が、三半規管を刺激する。

そうして詩織と硬直しているうに、あることを思い出した。

少し前の日向のウワサ。

それは『日向が彼女を妊娠させた』とかいう、常識から外れた噂。

いかにもクラスの調子者が、流しそうな噂であった為に、あまり気にしていなかった。

だが日向はここ1週間

学校を休んでいた。

そうして今の状況。

ウワサは急激に信憑性を得た。

「日向には……言ったのか……」

「……うん、先週……。でも、それから連絡とれない……」

「……大家さんには……?」

「お母さんには……言っていない……言えないよお……」

詩織はまた涙を頬に伝わせた。そこまで聞いて、これは僕ひとりで解決できる問題ではないと判断する。

詩織の身体を抱き抱えて、一緒に立ち上がらせる。

脱力しているが、一応は立てるようだ。

「とりあえず奥行こう。知り合いの女の子呼んでくるから、皆でどうするか考えよ? ね?」

「うん……」

肩を抱えてリビングに導く。

いつもと違う詩織の調子に、不覚にも胸を突かれたが、同時に自分

の顔が強張るのを感じた。

床が、ひんやりとしていた。

〔＊203〕

「え、マジで！？ やったじゃん」

「何でお前そんなに嬉しそうなんだよ……」

それから、そんな会話をして、僕は紅を部屋に連れていった。

僕は色々と疎いので、こういうのは女の子同士で話し合って貰った方がいいと判断したのだ。

まず花子を一応呼んだが、何だか頼りない。

よって僕はそういうのに頼りがいのありそうな海部紅を呼んだのだ。最初面倒がっていたが、事情を説明すると、目の色を変えて嬉しうについてきた。

初めてコイツと知り合いで良かったな、とか思った。

正午より1時間前。

4階の南側に位置する8畳間に、女の子3人と男1人、集結していた。

田舎ならではの広く部屋数のある賃貸で、助かったと感じる。

二つしかないソファーには、それぞれ紅と詩織が座っている。

テーブル越しに向き合っていた。

花子はただフローリングの床に、そのまま座り込んでいる。

「んじゃあ、僕はどっか行ってるから。後は頼んだ」

「任せときなさい、ナカツ君。決して隣の部屋で盗み聞きしちゃ駄目だよ。女の子の大事な話なんだから」

「しねえよ！」

僕は役者が揃ったのを確認して、自宅を後にすることにした。

花子とはともかく、紅がいれば何とかなるだろう。

僕は一先ず、浅間教授のいる大学に行こうかと思って、最後に座り込む詩織を一瞥する。

きっとたくさん考えたのだろう。

気疲れしているようにも感じられた。

詩織が言うには、日向と付き合った理由は、

僕と花子が酒に酔って、仲睦まじそうにしているのに、羨望したからだそうである。

となれば、多少なりとも僕に責任はある。

何とかしてやらなくちゃな……

そう考えて、靴を履いた。

靴紐を結び、外に出る。

急に胸が痛くなった気がした。

大学に行こうとエレベーターに向かうが、その気が唐突に失せる。

第一、その理由がない。

浅間教授は何やら忙しげに研究に没頭しているだろうし、あの酒に酔った日から何だか態度が冷たい。

となれば天野教授がよりどころだが、教授は残念ながら大学にはいない。

こここの近くの島に、ロケットを発射する為の宇宙局がある。

そしてそこに日本初の有人宇宙飛行のプロジェクトがあるらしく、

天野教授はそのプロジェクトの参謀として招かれたのだという。

先月、八岐大蛇を倒した後も見かけなかったのには、そんな理由があったらしい。

曰く、国家の威信を賭けた宇宙事業だというから、申し分はない。

天野教授はいかにも優秀そうであるし。

よって僕には大学に行く口実も意欲もない。

断念した。

では、何処に行けばよいのか。思索する。

「あちちっ」

無意識に手摺りに手をのせると、ステンレス製のそれは熱を持っていた。

条件反射をする。

もう季節は夏の入口に立っていた。

今日は黒い長袖を着てきたが、選択を間違えたかもしれない。これからグングン気温はあがるだろう。

4階からマンションの前の道をみると、ユラユラと熱気が疼いているのが確認できた。

「……」

それでもう一つ。

花子がいつも看取れていた花の集合体が、目で見える。

その花。

顔を天道に揃って向けるその花を見て、僕は目的地を定めた。

「……日向んトコ、いつてみるか……」

『向日葵^{ヒマワリ}』

キク科の一年草。

黄色の映える、サンフラワーである。

「*204」

窓を開けてもまだ蒸し暑いジンの部屋に、今、私達はいます。

正午丁度。

あれから詩織ちゃんの話を、紅さんと暫く聞いていました。

とても、衝撃的な内容。

私は何度も耳を塞いでしまいたくなるような気持ちになりました。

紅さんは至極真摯に聴き入っていましたが、詩織ちゃんの悲痛な声が入り混じると、辛くなって仕方なかったのです。

そして一通り聞き終わった今、私はお昼なので、料理を作ることにしました。

ジンの部屋の冷蔵庫ならば、勝手に使っても問題ないでしょう。因みに紅さんと詩織ちゃんは、近所のドラッグストアに行った後、何やらトイレに籠って二人して騒いでいます。

「いーじゃん、女の子どうしなんだからー」

「嫌よ！ アンタさっきまでの真剣な態度は何だったのよ！ 真面目に聞いてたのは！」

「失敬な……今も真剣だよ詩織ちゃん。ほら、直接見ないとわかん

ないことも……」

「無いわよ!」

どうやら検査薬が何かを買ってきて、ゴタゴタとしているようです。私はその雑音を小耳に挟みながら、密かに紅さんを頼もしく思いました。

さっきまで詩織ちゃんは、絶望の淵にいろような面持ちであったのです。

紅さんは、いつもの絡みでそれを払拭したのです。

それが意図的な行為かは定かではありません。

ただ、詩織ちゃんのトーンを改善させ、前向きに事態の解決に向かわせている。

自然にそれができるのは、紅さんの凄い所です。

「そんな強く言わないでよ」。私検査薬買う時、店員さんに変な目で見られたんだから」

「だから何よ」

「み・せ・て」

「……アタシ、アンタ嫌いだわ」

語尾にハートマークが付きそうな紅さんの声に、不覚にも微笑しました。

彼女がいれば、どうにかなるでしょう。

そう樂觀してみても、私は包丁を握りました。

加えて鍋がキッチンの天井側の収納にあるのに気付いて、私は自分の身長に悲観しました。

ジンの分も作っておこうかと思いましたが、腹いせに止めておきました。

これは彼の陰謀に違いありません。

「ぎゃ! アンタそこは駄目!そこは(自重)だからダメ!」

「綺麗だねー詩織ちゃん。オジサン(自重)よー」

「(自重)……」

「(自重)!」

その後、なまめかしい声を感知した私ですが、聞かなかった事にしました。

詩織ちゃんは私達に言ってくれました。

一ヶ月前の、あの祝勝会でジンと私がイチャイチャとしているのを見て嫉妬したということも。

直後ジンの部屋を訪ねてきた日向くんと知り合いになり、交際を求められた経緯も。

異変に気付いたのは一週間前で、来るはずの所謂女の子の日が来ず、基礎体温が高かったということも。

一部始終を私達に話してくれました。

溜まっていたであろう、ある種の罪悪感と共に。

それは、両親に対する懺悔や

または、自分に対する悔恨にも思えました。

私はあの日ジンとイチャイチャなど、していた記憶はありません。

それに、こういったことは余り得意ではありません。

しかし、詩織ちゃんが苦しんでいる因子に関わっている以上、私には義務があります。

それが倫理的に、

いくらシビアで、

タブーな問題であったとしても。

〔＊〕

結局、日曜に日向に会えることはなかった。

自宅には赴いたのだが、玄関先で拒絶されたのである。

赤い屋根の庭付きの大きな家。

車が何台も停められる敷地面積を誇る立派な一軒家だった。

しかしインターホン越しに聞こえる日向の声は、とても小さく、弱々しいもの。

更には詩織の名前をだすと、黙り込んで、それ以上応対してくれなかったのである。

僕はその時、日向に対する蟠りの正体を理解した。

だからこそ、明日学校にくることだけを約束させ、退散したのだ。よって行き処を失った僕は、時間を潰すべく大和爺さんのいる大垣神社へと寄った後、アッサリと帰途へついたのだった。

アスファルトを目で流しながら、両端の生け垣を何と無く見てみる。透視図法によって、小さくなるはずの道端が、延々と続く無限回廊に思われた。

蟬の喘ぎともおぼしきBGMが、僕を決心させる。

住宅街の一本道。

やるべきことも、一本に定まっていた。

「どうしたのジン？ 何か顔強張ってるよ……」

「ああ、ちよつとな……」

花子に話し掛けられて、僕は長い考え事をしていたのだと気付いた。午前8時2分。

教室。

早めのこの時間にも関わらず、室内には既に半数の20名程が登校していた。

ただし机に向かって真面目に勉強する者はいない。

ただ仲の良い者どうしが集まって、各々がお喋りに興じていた。

穏やかな雰囲気の中でも絶えず会話が流れ、心地好い喧騒である。

そんな中、僕は花子が近くに立っているのに関わらず、話をする訳でもなく、机にほお杖をついていた。

その視点は、教室の入口に固定されている。

待っているのだ。

服部日向を。

一度真剣に話さなくてはならない。

今後の対応について。

そして幾つかの決断を下して貰い、落し前をつけて貰わねば困る。

日向がした事は、幾分高校生の許容される範囲の外にあるのだ。

その決断と落し前の程度は、並ではない。

特に、最大の決断は命そのものに関わるものであるから、大層だ。

「……」

ガラガラという音と共に誰かが入室する度に、僕は奇妙に緊張する。まだ、日向はこない。

というか、もしかしたら日向はバックレて来ないのではないかという危惧さえある。

僕に会うのが、

クラスメイトに噂の真相を尋ねられるのが、

厭だという感情も勿論あるのだろう。

だが、それは避けては通れないマストな道である。

避けては通れない、決断と落し前。

落し前。

それは、詩織やその両親に対して、どう弁解して謝罪するのかということだ。

聞くところによると、詩織の両親は、二人が付き合っているという事実さえ知らないらしい。

そんな全く予備知識のない人に、今回の事を言って、すんなりと話が通る訳がない。

どれだけ日向が誠意を見せ、納得してもらえるかに懸かっているのだ。

決断。

まずしなくてはならないのは、詩織との子を『産む』のか『産まない』のか、という決断である。

当然これは二人だけの問題ではない。

双方の両親はもとい、社会倫理的な意見を併せて総合的に判断する必要がある。

偏った見方をして、蔑ろな決断をすることがないように、細心の注意を払わねばならない点だ。

これは紅から言われたことだが、『高校生で妊娠したらおろすのが当然』というバイアスで決めることも、あってはならない。

だからこそ、

日向と話し合う必要があるのだ。

「おっ、日向じゃん。どした今まで」

そんなことを考えて

生暖かい風を顔に受けて心地よさげにしていると、あるクラスメイトが不意に言った。

瞬時に入口を注視する。

「おう、ちよつとなー」

確かにそこに服部日向はいた。

中学が同じだという赤縁メガネの委員長、泉隼人と少し会話をしている。

「日向大丈夫かよ、心配したんたぜオレ」

「平気ヘーキ。ちよつと風邪こじらせただけだよ」

その顔からは笑みを感じ取ることも出来た。

恐らくは無理にテンションをあげているのだろう。覇気のなさは否めない。

僕は立ち上がる。

隼人と会話し終わった様子の日向の前に立った。

そして言う。

クラスメイトがいるのも関係なしに、通るような声で。

「おまえ……ナニやってんだよ……」

「……」

詩織が見せた涙。

それを思い出した僕の声には、怒りの要素が含まれていた。

日向から笑顔が消えた。

「おまえ……なにやってんの……？」

当然ながら、日向が応えることはない。

日向は教室の床を見詰めて黙り込んだ。

バツの悪そうに口を閉ざしているのが鮮明に分かった。

周りが静かになった為だ。

思い思いに話していた教室の中の生徒たちは、僕の尖った声に反応

して、黙ったのだ。

シラケるといふ表現は似合わないが、室内はシーンとなった。

花子も足をブラブラとさせていたのを止め、机に手について固まった。

構わず続ける。

「おまえが、あの子にしたことがどういふことか……わかってんの？」

「……」

箝口する。

今の一言で、クラスメイト達は、絶対不可侵な話をしているのだと悟ったのだろう。

誰かが、唾を飲んだ。

「しかも連絡を断ってたらしいじゃないか。あの子がどんな思いしたか、わかってんの……？」

「……」

「……」

黙る。

空気は完全に停止し、ピクリとも動いてはいない。

捺乃がここにいたら、きっと敏感に反応していただろう。

バスケ部の朝練でいないが、安易にそれが想像できた。

「……」

まだ、黙っている。

ただ日向は顔をあげて、僕とアイコンタクトを取った。

その目は二重で、目の下には穴のようなクマがクッキリとついていた。

整えられた眉毛が、その悲しいような辛いような表情を作り出す。

「……」

「……」

「……何か言えよ」

「……」

ついに僕は痺れを切らす。

場合によっては殴ってやろうかという気を持って、それでも返答を待った。

一体何を日向は言ってくるのか。

それを予想して黙って待つことにした。

ただ、待った。

やがて、声が耳元に集音した。

「キュパァ♪」

『キュパァ』

そんなソプラノ歌手のような高い音が、

そんな小さな子供のように無邪気な音が、

聴神経を通して伝わった。

……。

……あれ？ 日向の声か？ これ？

「「……へ？」」

思わず漏らした素っ頓狂な声が、不覚にも日向とハモった。

「＊」

とても気まずい空気が室内を支配する中、その声は、ジンと日向くんの間から発せられました。

「「……へ？」」

目を点にして声を揃える二人に併せて、私はその音源を見ます。

そこには、50センチ程の物体。

色は緑色で、幼児のような頭デッカチの人型。その手足は極端に細く、胴体と頭だけが存在感を持っています。

緑の服を着た子供かとも一瞬思いましたが、全く違っていました。人とは違う点が幾つか。

まずはその手。

5本の指ははっきりと区別して認識することは出来ません。

なぜなら指と指との間に、膜のようなものがあつた為です。

奈良の大仏の掌にも、同様な膜が張られていたのを、不意に思い出

しました。

名前を忘れてしまいました、それが確かにくつついています。
そして背中。

本来平坦な筈のそこは、丸みを帯びていました。よくみると、何かを背負っているのが解ります。

亀の甲羅のような何かを、猫背に乗せていました。

決定的なのが、その頭。

子供がシャンプーをする際に、顔にかからないように頭に嵌める例のアレ。

それが頭の上にありました。

加えてお皿も。

えっと……。

この物体は……つまり……。

「か……カップ……？」

「キュー♪」

そう、河童です。

ジンの手によって一瞬の内にシリアスになった教室に突如、河童が現れたのです。

なぜこんな所に河童が……。

……という以前に、河童って実在したんですね。

クラスメイトも皆、そんな突如の来訪者に驚きの色を隠せないように、硬直、呆然としています。

訳が分からない。

教室中の皆が皆、そんな表情を浮かべて困惑しています。

時間が無駄に過ぎて行きます。

そして誰もが動く機会を失ってしまったかのように固まっていると、ドアが音をたてて開きました。

崇神の教典

「みんなオハヨー……って何！？ 何で皆固まってんの？ 時間止まってんのコレ」

私はそこからの発信音だけで彼女の声を判別します。

清原捺乃ちゃん。

その人のものです。

朝練を終えてやってきたのでしょうか。

僅かですが、清感スプレー特有の匂いが漂いました。

「あれだよ、アレ」

「アレ……？」

近くにいた委員長の隼人くんが、例の生命体を指差し、捺乃ちゃんに示唆します。

捺乃ちゃんは従って体を動かして、それを視界に入れました。

「キュ〜♪」

河童の方もまるで併せるように、大きな瞳と黄色の嘴を駆使して首を傾げたような仕草をします。

直後。

「きゃ〜！ 何コレ超かわいいじゃん！」

捺乃ちゃんは驚愕より先に、それに何故か好意を示しました。

「「……え?!」」

今度はその意外な反応に驚いて、声が合わさります。

私も例外ではありません。

捺乃ちゃんは机を掻き分け河童に接近し、何の警戒心も持たず、河童を抱き抱えました。

捺乃ちゃん。大胆すぎませんか……？

「キュパー♪」

「すごい！ モチモチしてる！ ね、これ河童だよね！ 可愛い〜！」

挙げ句の果てに、ほお擦りまでしています。

河童も何やら気持ちよさげにそれに応じています。

「ちょ……捺乃……」

「何かよさ気……俺にも触らせろよ」

ジンが話し掛けようとした時、隼人くんが捺乃ちゃん同様河童に近づきました。

「ホントだー！　すごいもち肌」

「マジで、私にも触らせて」

「キュ〜♪」

するとさっきまで硬直していた生徒達が、続々と河童えと群がり、またザワザワと騒ぎ立て始めました。

「隼人ーカッパって生き物だよな？　これ教室で飼えるんじゃない？」

「いーねー。委員長、飼おうよコレー」

「オレ明日キュウリ持つてくる」

そして早くも飼おうとかいう意見が派生し、その方向で話が進んでいきます。

何だか盛り上がってしまつて一層の喧騒が拡がってしまいました。

「……」

「何でカッパが……」

ジンと日向くんはそれぞれ複雑な表情を浮かべながら、その様子を見つめていました。

特にジンは出鼻をくじかれたように、ただ立って。

「カッパ……」

結局、日向くんに言いたいことを言えずに、その日は終わってしまったそうです。

因みにこの時には既に、

ジンは気づいていたようです。

河童も、

日本に数多いる動物神の1柱だということに。

「＊」

そしてあれから数日が経ち、世間の学生は夏休みというオアシスを満喫する頃となった。

ただ僕の通う高校には、夏期講習という名の普通授業が設定されていて、結局は毎日学校に来る羽目になっている。

しかも課題がどっぷりと出ているから、僕達にとって夏休みは、通常授業にプラス課題がつく単なる嫌な期間なのである。

……夏休み？

何それ美味しいの？

毎年この高校ではそんな言葉が飛び交う。

『夏休みやることなくて暇』とぼく他校生に殺意を抱いているのは、僕だけではないはずだ。

救いといえば、教室のクーラーが稼動したことくらい。

猛暑日が続く中で、空調が効いた室内は実に快適だった。それでも一つ。

クラスメイト達の間で夏期講習の救いとなっている存在があった。

「キュー〜♪」

その救い——河童であるが——は床に大の字のように仰向けになって気持ちよさそうにしていた。

床がヒンヤリとしていているのだろうか。

ただし甲羅を背負っている為に、直接素肌が触れることはないが。

「ねえ委員長〜。キューちゃんあんパン食べるかな〜」

そしてその河童さ今やクラスメイトの一員が如く、VIPな対応を受けていた。

キューちゃんとか言う愛称までついている。

捺乃が昼休みに、買ってきたあんパンを与えて見ようと試みていた。何だかよく分からないが、クラスメイト曰く『癒し系』らしい。

数日たっても、クラスの話題は河童で持ち切りなのである。

「……」

それに対して

僕は複雑だった。

「キュー」

黄色い口に、契ったあんパンを加えている河童を見ながら、考える。河童。

日本の伝説上の妖怪であり、動物。

河太郎とも呼ばれている、河を護る川神である。一説では、水神の仮の姿だとも考えられている程だ。

見た目は小さくて貧弱そうであっても、河童は立派な神なのだ。

人間よりも優位な存在。

本来、決してペット感覚で扱ってなどならない。

一つの説話が頭を過ぎる。

平安末期。

壇之浦の戦いに破れた平家一門の霊魂が、河童となって蘇ったという言い伝えだ。

ココ九州ではとても有名な伝説で、小さい頃によく聞いたことがある。

なぜなら、九州は山口県壇之浦から逃れた平家が、最終的に殺戮された土地だからだ。

そして河童となった平家一門は、九州各地の川に住み着き、子供を川の中に引きずり込む等といった悪戯を働いたというのである。

そのタチの悪い悪戯。

取り分けそこから連想されるのは『死』。

河童といえど妖怪だ。

今人間に対して懇ろであったとしても、危険で無いとは限らない。

『動物神は危険だ。全力で殺しにかかれ』

加えて脳内を巡って消え去ることの無いアイツの言葉。

あの日が回顧される。

僕は分かっていた。

結論は既に出ているのだ。

だが良く分からない抵抗が邪魔して、結論から次すべき行動を見出

だせずにいるのである。

「ギュッ！　ギュッ」

「あ！　やばい委員長！　キューちゃん吐いた！」

「あゝあ、やっぱしアンパンは駄目か……」

楽しそうにスキンシップを取る様子を耳だけで感じる。目を閉じて、親指の爪を噛んだ。

それでも僕は、決断を下すのだ。

「ちよつと……いいか？」

「キュー？」

「……？　どしたの仁？　キューちゃんがどうかした？」

僕は立ち上がって歩み寄り、河童の前に屹立する。

太陽が雲隠れしたのか、教室内部が俄かにうっすらと暗くなった。著しく反射率が下がり、河童の艶やかな黄緑色も、補色のない灰色に見える。

「ああ、コイツをちよつと借りたい。」

「え……何で？」

「ちよつと学校の外でやりたい事がある」

「……やりたい事？」

捺乃と隼人が続けて疑問符を用いるも、僕は半ば上の空だった。

頭の中で今からの行動をシュミレーションをしていた為だ。

流石にシカトは不自然であるため、隼人に軽く生返事をしたが考えることは中断しない。

僕はしなくてはならないのだ。

非常に厭な事を。

表現を変えれば、『河童を殺さなくてはならない』。

人間神、もとい人間の最凶の敵、動物神。

河童がそれに該当する限り、それは不変の真理である。

「僕の知り合いに妖怪とかに詳しい人がいるからさ、ソイツの一度みて貰おうと思って」

まずは河童を連れ出す口実を得るため、都合のよい嘘をつく。

「詳しい人？ 誰じゃそりゃ」

「ほら、裏門の向こうに廃れた神社あるじゃん。その神主だよ」

「ふ〜ん……って、あそこ神主とかいるんだ……」

神主とは無論、大和爺さんのことである。事実これから河童を彼のもとに連れていこうとしているから、これは嘘ではない。

昨日、大和爺さんに海部紅、電話にて天野教授に報告したのである。その結論が、『早急に対処』。

今日、河童退治を行うに至った。そのために花子は既に神社にいる。神主いない神社ないか無いだろ。

そうツツコミをしてから、

「んじゃ、コイツ貰ってくわ」

「キュキュー♪」

河童の胴体を抱えて、肩車の要領で頭に乗せる。思い違いか、河童は園児のように頭の上で喜んでいるようだった。

人間より体温が低いのか、ヒンヤリとした感覚が頭を冷やす。

程よく弾力を持つ肌は、プニプニとした感触を与え、心地好い。

今から手をかけようとしている奴のものだと意識すると、蟠りが湧いてくるのが分かった。

夏期講習2日目。

午前中の受講義務を果たした午後1時。

野球部が校庭で精進しているのを見て、図らずに日向を探してしまう。いないのは分かっているのだが、である。

河童の件が片付いたら、また直ぐに詩織と日向に向き合わねばならない。

「キュー♪」

「はぁ……」

音が重なった。

「＊」

そうして僕は皆が待つ大垣神社へと赴いた。

新興の住宅街の中にある影響か、その神社は母屋は遺跡並の古さを

感じさせる。

廃墟ともたえられるだろう。

夏になると若者が肝試しにくるというのだから、尤もだ。

誇れる所といえば、その敷地面積。

両隣を隣家の塀で挟まれた鳥居を通って、数段の階段を昇ると、そこには杉の木で囲まれた広い空間がある。

その木の外側は普通の民家なのだが、小さな台地となった内裏は、住宅街に在るという感覚を忘れさせる。

まるで森林浴をしているようだ。

また、内裏の中には、もはやジブリ映画でしか見たことの無いような井戸が二つもあった。

双方とも板で蓋がされ、使われていないようだったが、モニュメントとして実に象徴的だ。

その井戸の前。

砂利が敷かれている広場の箇所で、僕は河童と対峙していた。紅もいる。

自然と動悸が激しくなる。

「キュー？」

河童は、その僕と紅のただならぬ様子に怪訝な表情を示している。首を直角近くまで傾けている。

しかしその様子に構っていられる余裕は僕には無かった。想定外の出来事があったのだ。

その事に関して、紅に尋ねる。

「大和爺さんと花子は？」

想定外の出来事。

簡潔に言えば、居ると思っていた二人が居なかったのである。

「おじいちゃんなら、『共倒れするといけないから』って言ってどこか行っちゃったよ」

「……前と同じか……」

前。

つまり八岐大蛇との闘いの際も、大和爺さんは立ち会ってくれなかった。共倒れを懸念しての事だろう。

「じゃあ花子は？　一回家帰ってから来るとか言ってたんだけど……」

「花ちゃんなら、さっき電話があつたよ。『金魚が死んじゃったあー！』だとか。何か凄い泣いてたけど……ナカツ君なんかしたの？」

「え……あ、ああ……なるほど」

『金魚』というワードに、一瞬何の事か解らず困惑したが、直ぐに理解した。

金魚とは恐らく『金魚草』という花の事だ。

花子曰く、死んだ花子の母親が好きだった花だそうで、肥料を与えたり、念入りに水を与えたりと特別に扱っていた。

しかし余りに大切にすぎで、栄養剤や除虫剤を多用していた為に枯れてしまったのだろう。

滅多に入手出来ないが故に、その失敗に対する悔恨は大きい。

ましてや花子のことから、今頃家でぶすくれているに違いない。

「『なるほど』……って事はナカツ君、何かしたんだ。駄目じゃないか、花ちゃん泣かせちゃ」

「別に僕が泣かせたわけじゃねえよ。でもじゃあ今日は花子は来ないな」

以前にもあったことだが、花子はお気に入りの方が枯れるとその日はもう立ち直れない。

どうやら河童には、二人でどうにか対処しなくてはならないようだ。

「キュー！」

「あ！　駄目だよ河童くん！　そっちは駄目！」

河童はやはり水気を好むのか、井戸の方へ行こうとするが、紅に制止される。

肩を不意に捕まれたようで、そのまま後ろに倒れ込んでバタバタとしている。

ゆるキャラになりそうなその河童を見て、僕は覚悟を決めた。

「……よし！ それじゃあ紅……頼む。」

覚悟とは、河童を殺める覚悟のことだ。

そして大原則として、神は人間に殺せない。

大和爺さんと花子がない今、河童を始末できるのは、能力的にも海部紅ただ一人。

僕はそれを、見届けるしかないのである。恐らく残酷なその光景を。

「頼むって……何いってんのナカツ君。」

「……？」

そう考えて、身構えて待っていたところ、紅が言った。

「私は今回やらないよ」

「……え？」

素っ頓狂な声で反応してしまう。

「おじいちゃんに危険だからって言われてるしさ……君の覚悟を見たい」

「キュー？」

その言葉の真意を理解するには、多少の時間がかかった。

亀が裏返ったように甲羅に仰向けになる河童を眼中に入れたまま、その言葉を受信する。

「ナカツ君。……君が、やるんだよ」

「キュー！」 「………はい？」

聞き返すように声を出すも紅は応じてはくれなかった。代わりに念押しのような言葉を発信する。

「君が、殺すんだ。」

「ど、どうやって？」

正直言って、気が動転した。

僕は昨日からずっと、ある意味で楽観していたのだ。『河童を始末する』といっても、僕は力のない巡り者だ。

きっと大和爺さんか花子か紅の誰かが、その主犯を務めてくれるだろうと思っていた。

それが今になって自分だと解り、抵抗感を覚えているのだ。
それに第一、僕には河童を殺める手立てがない。

「君この前さ、おじいちゃんからアレ貰ったよね？」

「『アレ』……？」

「ほら、八岐大蛇から出て来たっていう――」

「八岐大蛇……って、もしかしてアレか……」

思い当たる節があった事に、顔が引き攣る。もしかすると、僕には河童を殺める手立てがあるかもしれない。

僕は太和爺さんから授かった『アレ』を持っているのだ。

先日の日曜。

日向の家から退散し、時間潰しに大垣神社に来た時の事。紅は詩織と話していた為にいなかったが、太和爺さんと暫く話をしたのである。

その時に、ある物を僕は太和爺さんから貰ったのだ。

「アレどこにあんの？ 神社の中にまだあるとか？」

「ああ、確か」

「んじゃ取ってきてあげるよ」

そう言って紅は、『アレ』を取りに神社の中へと入っていった。がさつな性格なのか、土足で入っていったが気にしない。

「キューウ♪」

「……」

対して気になったが、河童の様子だ。

裏返しになったまま、その細い手足を背伸びして、脱力している。

今からされようとしていることを、理解していないのだろう。

無邪気で無神経なその姿を見て、上唇を舐めた。複雑すぎる。

生き物を殺すのに、抵抗がないはずがない。

蚊やダニの様な無脊椎動物は意図せずに殺すことがあったとしても、罪悪感は生まれにくい。

だが哺乳類に近い動物になれば、話は異次元並に違ってくるのだ。

「キュー？」

千差万別の未来予測が脳内を駆け巡る。ジッと見つめていると、そのクリクリとした、異常に大きな目と目が合った。

「持ってきたよ」

そうして深く思索している内に、紅が戻ってきた。手にはやはり、想像していたものが握られている。

「見た目の割に軽いねコレ。名前なんつったつけ？」

「草薙剣……だろ」

僕は紅の疑問に答えてから、その『草薙剣』を受け取る。

それは所謂某流行ゲームのハンターが持っているような、大太刀だった。

柄の部分が細いのに対して、鐔から上は極端に太く、いかにも重厚感に溢れていた。

これこそが、大和爺さんから授かった『アレ』の正体である。

バーサス神専用の武器だ。

僕には神の力が使えない為に、大和爺さんが護身用として、こしらえてくれたようだ。

ただ、今の状況を慮ると、完全に余計なお世話というに他ない。

さつきから、己の心拍音が耳障りで仕方なくなってしまうている。

『草薙剣』 クサナギノツルギ

アマノムラクモノツルギ

別名、天叢雲剣とも呼ばれる伝説の剣である。

三種の神器の一つであり、天皇の持つ武力の象徴であるとされる。

『クサ』は臭、『ナギ』は蛇を表していて、本来は『蛇の剣』という意味であったそうだ。

神話によると、この剣はヤマタノオロチの中央の尾からスサノオが発見しており、その信憑性は高い。

偽造、盗難、消失、と様々な苦難を経験しており、現在どこにあるのかは明確でない。

その伝説の剣が、八戸ミロクないし八岐大蛇から実際に出て来たという訳だ。

「キュー♪」

「……」

僕はゴクリと生唾を飲んだ。

この剣を用いれば、今日の前にいる動物神をどうにか出来てしまうのだ。

太刀に対して興味津々として嬉しそうにする神を。

「さ、ナカツ君。……やるんだ」

紅がその行為を促す。その言葉の合間に含まれる要素を察知して、僕は悟った。

どうにか出来てしまう、のではなく、どうにかしなくてはならないのだ。

もう、逃げられはしない。

持った太刀を左手に持ち替えて、右手を制服のズボンに擦る。手汗が異常に出ていた為だ。

杉がそよ風に揺れて、シャワシャワとした音を発生すると、それが僕を後押しする。

「分かってるな？ 中津仁彦……」

「……ああ」

僕は覚悟した。

瞼に力をいれて閉じ、目だけで柔軟する。

「キュー？」

目を開くのとやや同時。

矛先を緑色のそれに向けた。

脈動が不快だ。

正直なところ、刃物など調理用の包丁くらいしか使ったことも持ったこともない。

つまり僕には殺害の為の刃物の扱い方なんてサッパリ解らない。しかし僕は、

不格好ながら、

槍を突くように、

矛先に勢いを与えて、

河童にそれを侵入させた。

「ギ
ユ
ツ
ツ
…
!!」

直後。

濁音が幾らついても表現出来ない程のくぐもった声が、僕の内耳に伝わった。そうして赤い噴水が映像として網膜に映える。

直ぐには止まらない。

実に勢いよく放物線を描いている。

僕はすぐに分かった。

河童の体の体積対してこの赤い液体の量。

致命傷というに申し分はない。

僕は反射的に手を離す。

『草薙劍』が仰向けの河童に垂直に突き刺さって停止した。

まるで墓標のようである。

「ギユツ……ウツ……」

目を見開いた河童が痙攣したように体を震わせ、地面の上で悶える。

「……」

手の平を視界に入れると、拭いたはずの汗が大量に湧いていた。

不思議と震えはしていない。

生き物もとい神を殺したというのに、僕は極めて冷静だった。

神がこんな簡単に死んで良いものなのか、と状況を分析することま

で出来る。

「意外にあっけないね」

「……ああ」

暫くすると紅の声がして、普通に対応する。河童はもう動いていなかった。

代わりに河童の血液が地面に広がり、流動的に土壌を侵している。靴にその淀んだ色が付くのを嫌に思つて、少しだけ距離をとつた。さつきまで聞こえていた自分の心臓の鼓動も、いつの間にか聞こえなくなっている。

「これで……いいんだよね……？」

八岐大蛇の時とは打って変わるあっけない展開に、なぜか不安を抱いたものの、紅が頷いたのを確認して安堵する。

やたら緊張したが、これで今回は終わりのようでホッとした。

「よかった……」

僕は大きく息を吸って、安堵のため息を吐いた。

……いや。

今の表現には若干の語弊がある。

僕は、ため息を吐いてはいない。

ため息を吐く前に、

再び緊張して吸うだけに終わったのだ。

僕の耳はキャッチした。

その声を。

「じ……ん？　なに……コレ……？」

明らかに清原捺乃の声が、

僕の背後から発信されていた。――

〔＊〕

その時。

ワタシは『夢』を見ているのだと思いました。

だってワタシの視野にある光景は、余りに有り得ないものだったんです。信じられる筈がありません。

それに、信じたくありません。

ワタシは仁が出ていった後、学校でお昼ご飯を食べ終わり次第、帰途に着こうと校舎をあとにしました。

今日はたまたま、バスケ部の午後練がなかったのです。

ワタシは宮崎の県境に住んでいるので、まずは電車に乗ろうと地方の無人駅へ向かっていました。

仁や花子ちゃんのように、学校の近くに引越すことができれば良いのですが、さすがにそれは叶いません。

社会的に高校生の独り立ちというのは抵抗があるようで、両親が許してくれなかったのです。

仁の両親は許容したのいうのに、全く、ワタシの親は頑固者です。だからワタシは、

片道1時間半をかけて毎日通っています。

先程も又、長時間電車に揺られる覚悟をしながら住宅街を歩いていました。

その駅までの道のり。

あの弁柄の門扉を見つけてしまったワタシは、迷わずそれをくぐり抜けました。

仁の言葉を回顧しながら。

そして見たのです。

あの幼なじみの仁が、

誰に対しても懇ろな仁が、

オサナナジミガキューチャンヲコロシタトイウ

河童を大剣で刺している、その惨劇を。

何かの間違いだろう。

初めはそう思って、その仮説を裏付けする根拠をワタシは思索しました。

キューチャンヲサシコロス

だって仁がこんなことをする訳がないのだもの。

仁は本が好きなバリバリの文系。

虫採りに行くより、図書館に籠っているタイプなのです。

素手で蚊を潰すことにさえ抵抗を覚えていたくらい、生き物に対して独自の禁忌の念を持っていたのです。

幼なじみのワタシですから、それは容易に証言できます。

しかし。

そんな状況的な根拠は、現場の実証に比べれば、何の役にもたちません。

ワタシの目の前には、隠しも出来ぬ程の証拠が広がっているのです。

「な……つの、何で……此処に……？」

「……」

キューチャンノシタイ

惨い緑色の肢体を向こうに、仁と見知らぬ女（？）の人が振り返って、ワタシに注目します。

同時に雲隠れしていた太陽が顔を出すと、日光が彼の顔に降り注ぎ、陰や堀がハッキリと浮かび上がりました。

その無駄に陰影効果の効いた光景に

ワタシが感じたのは、

石上宅嗣の教典

「や……だ……」

「え……」

彼に対する『恐怖』と『拒絶』でした。

「じん……なんで……こんな……」

「……捺乃……」

恐らく彼のことから、何か理由があるに違いありません。ですが今のワタシにそのことを考慮して彼と接するのは、ほぼ不可能でした。

「これは……違うんだよ……」

「ひつつ……!」

彼が狼狽した様子で手を伸ばしてきましたが、ワタシは半歩後退り、腕を掴まれる前に走り出していました。

生き物を殺めた彼を、体が瞬時に拒んだのでしょうか。

「捺乃!」

砂利が滑るのをお構い無しに、ワタシは足を運びます。

とにかく速く。

とにかく前に。

彼が追ってこないことに、安心感と不安感の両方を覚えながら。

「*」

翌日の教室。

学生にとっての学校生活というものは、学業や部活動に精進する時間であり、同時に恋愛や学友との交遊を楽しむ猶予期間である。けれども、今の僕には双方の権利を享受できる状況にない。

『巡り者』という形で人間神と動物神の争いに関わってからこつち、常に緊張状態にあったせいだ。

動物を見るたび神であることを疑い気を使っていたのだ。

些か、普通の高校生を満喫するには難しい。

お蔭様でここ一月で成績も大分落ちてしまっている。

しかも最近の僕に降り懸かる問題は、単に『巡り者』としてのものばかりではない。

日向と詩織の妊娠問題にも一向に解決の糸口が見えないし、昨日には捺乃に『あの現場』を目撃されてしまったのだ。

更に悪いことに、今日午前中の夏季講習に、捺乃と日向は来ていない。

これでは弁解しようにも捺乃がいないのだからどうしようもない。

自宅は遠くて現実的に不可能であるし、携帯にかけても着信拒否されていることから、捺乃の信賴を失っていることがよく分かる。

今の僕が何をいっても逆効果だろう。

また、日向の件もいつまでも先延ばしにして良いものではない。

中絶可能期間もかぎられてくるし、詩織の外見にも変化が見て取れてくるだろう。

早期解決に越したことはないのだ。

……それにしても。

余りに問題が山積しすぎじゃないだろうか。

河童。

詩織の妊娠。

この二つに加え、

花子の機嫌を直す。

捺乃の信賴回復。

という新たな問題まで発生してしまっている。

皮肉なことに、河童の問題解決の為に新たな問題を生んでしまっているという現状があるのだ。

しかも。

実は僕が解決したと『思っていた』河童の問題も、解決などしてはいなかったのである。

昨日。

捺乃が走り去っていった後のことだ。

暫くの沈黙の後。

紅はこうそれを破った。

「あの子は……知り合いかい？」

「……幼なじみだよ……」

「ふーん。ナカツ君も隅に置けない子だね」

「何だよそれ……」

僕は捺乃にこの状態を見られて、どう釈明するかで頭が一杯であったが、調子の変わらぬ紅の言葉に苦笑する。

不覚であったが、今は河童の亡きがらを処理するのが先決であると思っただのだ。

指で示して、紅に問う。

「んで、これはどうすんだ？」

「『どうする』って……どの子のこと？」

「？ この河童のことだよ」

「……だから、どのさ？」

「キュパー？」

「キュパー！」

「ええっ……！」

「……ええっと。」

もう細かい説明はなくても理解できるだろうか。

会話の不自然すぎる流れと急展開から、河童が生き返ったように思われるかもしれないが、それは誤解だ。

河童の死体は確かに眼前にある。

ただその横には河童の肢体が見て取れるのだ。

そうつまり、僕は河童を殺したが、

また別の河童が顕れた。

という訳だ。

「キュパー？」

「キュパー！」

しかもその数2。

いつのまにか殖えた。

なんで河童が殖えてんだ……？

紅に問うと、意外にも冷静に答えてくれた。

どうやら、河童という神は、一柱で構成されている訳じゃないらしい。

表現を変えれば、『河童』は複数の川神の総称であって、日本全国に数多顕現しているらしいのだ。

だから僕がたった一柱の河童を黄泉送りにしたからといって、『河童』を退治したことにはならないというのだ。

なるほど、『八岐大蛇』という単数の神とは、性質が違う。八岐大蛇本体を倒せばよかった前回とは勝手が違うようだ。

だとすれば、河童本体を倒しても、何の解決にもならない。

紅がいうには、根本的な解決には、『河童の帰属する巡り者』を倒さなくてはならない。

河童を葦原に出現させている、河童の血を持つ巡り者。

その人間をどうかしなくては、解決しないというのである。

本当に骨の折れる話だ。

紅には見当がついているらしいが、その『巡り者』を見つけ出す手間が増えた訳だ。

本当に、厄介な問題が山積している。

結局河童の死体と新たに顕れた河童を紅に任せて、昨日は自宅へ戻ったのだが、その自宅にも問題があったのである。

忘れかけていたのだが、家には花を枯らして拗ねている様子の花子がいた。

僕は何の解決にもならなかった経緯を話そうと花子に試みたわけだが、花子は全く聞く耳を持たなかったのだ。

僕は処理しきれない苦悩に苛々といっていた為に、ムカツときてしまった。

僕は花子の為に神と対峙してきたというのに、その当事者が怠惰な

態度であつたから、やるせなかつたのだ。

人生で初めて、声を荒げた。

しまいには、花子と喧嘩をしてしまった。

一体何年振りだろう？

花子の機嫌をくすね、一日経つた今でも気まずさが残るこんな感覚は。

教室。

講義終わりの昼。

河童が一匹増えたことに興味を寄せ、群がる生徒の塊の他には、女子生徒がただひとり。

1番前の窓際の席に顔を伏せる花子の肩を叩き、ややあつて声をかける。

「花子……ほら、いくぞ……？」

「……」

実は今日も、紅に呼ばれている。

むろん河童についてだろうが、花子を連れて来いというのである。

昨日の今日であるから、正直厭ではあつたが致し方ない。

数コマに渡る沈黙があつて、花子が口を開く。

「お花屋さん……」

「ん……？」

「お花屋さん。神社いく前に……寄っちゃ駄目？」

「……」

その真意は考えずとも分かつた。

金魚草があるか否か、花屋の主人に尋ねようという打算だ。

昨日花子が不機嫌だったのは金魚草を枯らしたためである。

しかし聞くところによると、金魚草というのはそもそも乾燥地帯に生息する植物であつて、日本のような多湿地帯では枯れて当然だというのだ。

それではいくら買ったって意味がない。

僕は駄目だといって花子を咎めた。

すると花子は眉を狭め、泣きそうな顔で訴える。

「何で？ 私……今度はちゃんと世話するよ……？ ジンのお母さんは元気だから、分からないかもしれないけど、金魚は私のお母さんなんだよ……？ ……それを『枯れるだけで金の無駄遣い』なんて言われて……私、悲しいよ……」

『枯れるだけで金の無駄遣い』

僕が昨日の喧嘩で言い放った言葉を使って花子は言ったあと、また顔を伏せた。

僕の性から言って、あまり感情を露にするのはよくないと思っているし、昨日の反省もあるので、表には出さなかったが、その態度に再び憤りを覚えた。

鼻だけで溜息をつき、気持ちを落ち着かせてから、応酬する。

「そんなに言うなら勝手にいけよ。僕は行かねーけどな」

「……」

「紅んトコには僕ひとりで行く。花子は来なくていい」

自分の声が素っ気ないものになっているのに、僕は気づいていた。だがそれを調整出来る程、僕の脳幹は優れていない。

左手の手相を何となく眺めた後、手提げのカバンを手にとって、教室をあとにする。

花子は俯いたまま、結局顔をあげた姿を確かめることなく、神社へと向かった。

「なんでこうなるのかなあ」

そう呟いて、痒くもないのに目を擦る。

Chapter 3 錘のついた水死体

〔＊〕

クーラーをつけている訳でもないのに、閉めきった自室の中に、アタシはいた。

ピンクを基調とした家具やカーテンで彩られた室内は、当然ながら非常に暑い。

ましてや、お母さんが初夏の太陽で天日干しした直後の布団に寝そ

べっているのだから、尚更だ。

ぼんやりと見える自分の鼻先には、多量の汗が見て取れる。

だがしかし、

アタシはそれ程暑さを感じていなかった。

暑さを意識できない程に、アタシの脳は別のことを考えるのに必死だったから。

水も飲まずに脱力する。

熱中症になるのではないかという危惧はあったが、それはそれでいいと思った。

結局いまだ、

お腹の赤ちゃんに関して、

何の進展もない。

4階の住人とその知り合いの変な女に事情を話してから、だいぶ楽にはなったのだが、今なお不安だらけなのだ。

アイツは、

『僕がなんとかする』とは言ってくれているけれど、それもどこまでアテにして良いのか、分からない。

アイツは、

『オジサンに任せにゃさい』とか言ってたけれど、同じくアテになるのか、分からない。

日向くんからも依然連絡はないし、

お母さんにも何も言えてない。

さっきお昼ご飯を食べている時、『詩織太った?』と尋ねられてホントウに動揺した。

気丈に振る舞ったが、

その言葉はアタシに重くのしかかった。

しかも最近、お腹の中が重くなったように思えて、一日中気をつかって過ごすようになった。

さすがに四六時中だから、気疲れしてしまう。夏休み期間で、学校がないのがせめてもの救いだ。友達や先生に対して、気を使わずに

済む。

もう、タイムリミットが近づいている。

それなのに、アタシはお母さんに本当のことを言えてさえない。そう考えると、今熱中症で倒れて、いつそのこと死んでしまえば楽なのではないだろうか。

そうも思ったので、このまま寝てしまおうと試みる。

俯せで寝ると、お腹が圧迫されて悪いので、横になって白い壁を視野にいった。

恐らくこのまま寝ても、数時間後に起きて又、倦怠感を感じることになるだろう。

でも、一時でも懐妊したこのカラダから解放されるのなら、それでいい。

手の甲を壁に沿わせると、ヒンヤリとして心地好かった。

目を閉じてても光を感じるその時間帯に、アタシは安息を求める。

とにかく、今だけは……。

と、睡魔に従おうとした時だった。

『キュパー♪ キュパパー♪』

アニメでしか聞いたことのないような、

超音波の音が咎した。

部屋の中から、ではなく

頭の中から。

え……？

アタシは頭に直接伝わった音に、内容が含まれているのに気づいて、耳を傾ける。

突然のことであつたが、以外にも動揺しなかった。

姿は何処にもない。

しかし声は確実に聞こえた。

『キュ〜。 キュパパー♪』

不思議なものだ。

全く知らない言語なのに、

声の主の意図は理解できる。

そして暫く響いたそのボイスを聞き終わった後。

アタシはその声にしたがって、

部屋を飛び出した。

賃貸マンションの管理をしている両親を持つアタシだから、必然的にそのマンションの1階に住んでいる。

そのマンションの入口。

今時の建物なので、ガラスで隔たれたエントランスの空間がある。

そのオートロックとモニターが

設置されている場所に――

その監視カメラと郵便受けが

設置されている場所に――

「……ひゅうが……くん……?」

「……詩織」

服部日向。

その人が、佇んでいた。

飯田蛇笏の教典

・・・・・・

声が言った通りだった。

「＊」

「え？　じゃあ花ちゃん来ないの？」

「ああ、花屋行くんだと。……アイツはもうよく分からん」

アスファルトと天然の土壌では、これ程までに違うものか。

僕は住宅街に点在する避暑地の1つである大垣神社に訪れて、猛暑の中にも涼しさを実感していた。

杉の木が天然の日傘となり、遮光された薄暗い空間は視覚的にも心地好い。

あれから炎熱の大気をくぐり抜け此処にやってきたわけだが、開口一番紅が聞いてきたのは、花子の所在であった。

「花ちゃんいないのかー……。ていうか連れてきてって私言ったよね？　駄目じゃないかナカツくんー」

「しょうがないだろ。花子は花のことになると頑固なんだよ」

「頑固って……そこを何とかするのが彼氏の役目だろー」

「彼氏じゃねえよ」

何ら変哲のない会話を交わした後、僕は聞く。

「んで、河童の件はどうなったんだ？　花子がいないとマズイのか？」

「居なきゃまずいわけじゃないけど……居た方がいいでしょ普通。君なんかより全然重要な戦力なんだから」

「戦力……？」

尋ねると紅は『戦力』なんていう言葉を持ち出した。

僕はその口調から、恐らくは河童について何か核心的な事が分かったであろうと悟ったが、その『戦力』という言葉には少し違和感を覚えた。

「花子が『戦力』って……河童なんて弱い神なら僕と紅で十分だろ
そうなのだ。」

昨日僕が実行したように、河童は剣で一回刺せば殺せてしまうほど、
ヤワな神である。

それであるのに、機嫌の悪い花子の手を患わせるとは、何とも無駄
なことなのだ。

「まさか八岐大蛇みたいに獰猛な神ではないだろうし……『草薙剣』
だってあるだろ？」

そのことを含蓄して紅に問う。

しかし紅は

ナカツ君分かってないね、といって、僕の予想を裏切る発言をした。

「ナカツ君なんか勘違いしてない？」

「？ 何がだよ」

「今のナカツ君の言い分だと、何だか純粋な『戦闘の戦力』を言っ
てるみたいじゃん。河童と実際に花ちゃんが戦うみたいな」

「え……闘わないのか？」

僕はてっきり、八岐大蛇の時の様にその神の巡り者との戦闘になる
のだと思ったのだが、どうやら違うらしい。

「あのさナカツ君。今顕れている動物神ってのはさ、皆その巡り者
に寄生してるんだよ。それは解るよね？」

「ああ、だから巡り者を倒さないと駄目なんだろう？」

「……そこだ。ナカツ君はそこを勘違いしてる」

僕が見解を述べると、紅は一瞬人差し指を顎に当てると、分かった
ように頷いた。

「ナカツ君が思ってるように、神殺しには帰属する巡り者を排除す
る必要がある。でもね……別に闘わなくちゃいけないわけじゃな
いんだ」

「……？」

紅は短く切り揃えたその髪を掻きながら、含み口調で言う。

僕はわからなくなって、首を傾げた。

アブラゼミが急に騒がしくなって、耳障りな羽音と共に雑音を発する。より耳を澄まして聞くように努めた。

「闘わなくなっている。要は、動物神の巡り者がいなくなればいいんだ。」

「『巡り者』がいなくなる……？」

「そう。つまりは、『いなくなってくれば何だっていい』んだよ。それが他殺であつても、自殺であつてもね……」

耳を澄ました分、集中してその言葉を聞いたせいか、違和感のある悍ましさを余計に感じた。

僕はその言葉から

『なぜ闘わなくてよいのか』

という疑問の解答こそ得ることができなかった。

だがその次に紅が放つ言葉に、決定的な何かがあることを感知して唾を飲んだのだ。

紅は言う。

「私は今から、『河童の巡り者』に会いに行く。そして交渉する。

『死んでくれ』ってね……」

「やっぱり分かってたんだな『河童の巡り者』が……。何処のドイツだよ？」

どう考えてもその『交渉』は簡単でない。

だからこそその元凶の人物像を尋ねた訳だ。まさか、何の繋がりも無いと思っていた二つの神経が伝達するとも考えず。

おじいちゃんに確認とってないから100%ではないけどね。

紅はそう呟いて続けた。

（—————）だ。間違いない。」

「……ええっ！」

丁度肝心な部分だけが、一層強まった蝉の騒音によって掻き消えたが、僕の基底膜は十分に揺れた。

一体最近何度驚いたことか。

そう意識しても

僕は驚愕して空いた口が塞がらない。

「＊」

一体何のために詩織と付き合い、何のために子を授かったのか。俺はここ数週間、ずっと考えて閉塞的に一点を見詰めていた。

思えばずっと昔から俺は、獰猛な自立心を持ち続けていたのだ。その獰猛さが故に俺は、自らを律することが出来なくて、無駄にカッコつけて、自分を誇大に見せようと足掻いていた。

その顛末が今の結果だ。

獰猛さは己の欲求に伝染し、詩織に俺の子を孕ませる羽目になった。このぶざまな結果から言えば、

この自立心は理不尽な両親に対する反抗心から産まれた獣とも言えるだろう。

俺は、猛獣使いにはなれなかった訳だ。

ただ、後悔はしていない。

俺は獰猛な自立心と共に、ある意味で冷徹な人生観を持っている。その冷徹な人生観を以って、子を授かって後悔など出来る筈がない。笑うかもしれないが、俺は早く家庭を持ちたかったのだ。

人生というのは新たな命によって大きく左右されるのだと分かっている。家族を築きたい願望は肥え太り、抑えきれなくなった。

詩織を実際に抱いた時も、俺は堪え難くなった訳ではなくて、その願望によってしたのだ。

平凡な人間はその行為を、若気の至りと嘲笑うだろう。

典型的な意気がる餓鬼の愚行だと。

だが違う。

俺の覚悟が甘かったのは認めるが、俺の考えは正しかったはずだ。そして、俺には詩織にすべきことがまだある。

そう考えると

『詩織の元へ行け』という声が、衷心から聴こえてきた気がした。また不思議なことに

その声が俺の知らない情報を発信しているのに気づき、頭を働かせ

る。

「……」

ある程度聞き終えると

俺は至極詩織に逢いたくなつて、自宅を飛び出した。

その声の主に逢う為にも。

あのマンションへ向かい、そして。

その道中、長身の男に出くわした。

俺は全てを知った。

「＊」

詩織と日向が一緒にいることを知ったのは、僕が詩織に電話をした時のことだった。

詩織の携帯に電話した筈が、知己の男がそれに出た為に一瞬困惑してしまった。

だが、どうせ日向も呼び出すつもりだったので、手間が省けて良かったのだと勝手に納得した。

紅に『河童の巡り者』の正体を聞いてから、僕は忙しくしている。当事者達の召集は勿論。

天野教授や浅間教授に指示を扇いだりもした。

また、やはり花子はいるに越したことは無いので、機嫌を治しに行くのにも試みていた。

花屋にも自宅にもいなかったもので、結局それは叶わず、捜す作業に手間がかかってしまった。

どうやら『交渉』には、紅と僕の2人で臨まなくてはならないようだ。

正直僕は交渉術に全く自信がないが、闘わずして済むのであれば、まだマシだろう。

交渉の場所は、やはり学校。

紅と話し合った結果に決めた。もしも戦闘になった場合でも対処しやすいからだ。以前のように大和爺さんに学校内の利用許可を取って貰うことになった。

ただ前回とは違って、校庭ではなく教室で対峙することになる。
あくまで交渉であるから、そんな広々とした空間は必要ないし、夜になるとナイト設備を稼動しなくてはならなくなる。

警備会社との兼ね合いで、今日は使用出来ないというのだから仕方ない。

もう既に日は暮れ始めてしまっているのだから、尚更だ。
よって、夜の教室。

二年二組。

僕は黄昏れの黄金色だけが照らす見慣れた風景を見ながら、二人の到着を待っていた。

黒板の側に一つだけある教卓に腰掛けて、何気なく黒板消しを手にとった。深緑の盤上にそれを滑らせると、余計に白く汚くなる。どうやら消した後、チョークの粉をチキンと取り除いていないらしい。

これでは綺麗にしようと使っても、まるで意味をなさない。むしろ逆効果だ。

ポンと黒板消しを叩き付けて、意識的に粉を巻き上げる。なんだか黒板消しと自分の今の状況が被って不思議な気分になった。

僕は今様々な問題にがむしゃらな状態になっているけれど、丁寧に対処しなくては余計に事態を悪化させてしまう可能性があることを、認知しておく必要があるのだ。

丁度、汚いままの黒板消しで黒板を消しても無駄なように。
妙に癪に触る。

そんな妙に説得力のある例え話を、あの紅にされた事に、だ。

今は何処かに出掛けているが、僕は相変わらずアイツがよく分からん。正直頼もしく思う事はあるが、それは特異な場合に限るし、第一なんでアイツは花子にこれ程こだわるのだろうか、苛々を感じる。

ほっとけばいいのに。

今も花子の元へ行っているのかもしれない。『オジサンちょっとセ

クハラしてくる』とか言ってたから、その可能性は高い。

つか僕は、花子よりそんなに頼りないのか。ちょっぴり失意した。そうして黒板消しを綺麗にしてやろうと、戸口近くにあるクリーナーを用いる。

麻布に包んだ『草薙剣』が床に放置させられているのに留意しながら、幾つかある黒板消し全てをクリーナーにかける。

紅も日向達も中々こず、暇だったからしたことだったが、自然と心が落ち着いたような気がした。

そして最後の一つを手を取った、その時。

「……やっときたか」

ガラガラという特有の音と共に、教室の扉が開いた。

紅ではない。

二人組だ。

「……おう、仁彦」

「……」

学校指定の制服姿の男が先立って立ち、その後ろに怯えるように少女が隠れていた。

心構えは十分にしていたつもりであったが、心拍数が急上昇していくのが明らかに分かった。紅が帰ってきたのだと、思い込んでいたからかもしれない。

ともかく、僕はその男女を招き入れる。

「入れよ、待っててくれ。まだこれから人がくる」

「ああ」

「……」

紅がくるまでは触発しない方が得策だと考えて、適当に椅子に座るように促した。

さっきまで黄金色だった天然の照明は、珍しくピンク色をしている。屈折率の関係であろう。

その桃色の空模様を望もうと、窓際に立つ。時間稼ぎの為に、簡素

な会話もする。

「お前ら……今日一緒にいて……ちゃんと話しあったのか？」

話し合いとは当然ながら、詩織の妊娠問題についてのこと。今の二人のツーショットにおいて、連想される最重要ワードである。

「ああ、まあ……な」

「……」

日向は言葉を濁したが、詩織がコクリと小さく頷いた。

日向は奇妙に冷淡に見えたので、信用ならない気持ちになったが、詩織が認可するなら間違いないだろう。

「そうか……なら丁度いいな。実は今日はそのことで呼んだんだ……」

「……分かってるさ」

「……うん……」

当たり前だろうか、その進言に二人は肯定し僕の次の言葉を待つようにした。

僕はその様子に、紅がくる前に彼らを納得させられるかもしれないと思った。

ただし、一瞬だけ口をもごつかせるが、結局言わない。

「紅……」

代わりに正面口から校内に入ってくる紅の姿を窓越しに見つけ、思わず呟いた。

さあ。

交渉開始だ。

〔＊〕

しかしながらその交渉は、いきなりの展開を迎えることになった。

詩織は未だ15歳で、母子共に危険になる可能性があるから、子供を降ろしたほうが良い。

僕は、律儀に椅子に座る二人にそう対処するように提案したのだ。

「詩織はまだ妊娠が経過して若い。色々僕達も考えたけど、初期中

絶が出来るなら、それが一番良いと思うんだ」

第一それが普通だし、迷って中絶可能期間を過ぎてもどうしようもない。

それに加え、母体保護法の中絶理由に詩織の境遇は申し分ない筈だ。そう付け加える。

「ぼたい保護法……？」

詩織が呟いた。

『母体保護法』

不妊手術や人工妊娠中絶に関する事項を定め、母体の生命健康を保護することを目的とする法律である。

第3章の母性保護の第14条では、指定医師は次のいずれかに該当する者に対して、本人及び配偶者の同意を得て、人工妊娠中絶を行うことができる」とされている。

(1) 妊娠の継続又は分娩が身体的又は経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれのあるもの

(2) 暴行若しくは脅迫によつて又は抵抗若しくは拒絶することができない間に姦淫されて妊娠したもの

詩織は、前者の場合に当て嵌まるだろう。そして同法に定められている『中絶は妊娠22週未満』という条件もまだ満たされている。

「22週に近づく、危険度が増す。なるべく早くに、中絶した方がいいと思うんだが……どうだ？」

「……」

つまり、僕は今日『中絶の交渉』に来たのである。

僕は当然、肯定の答えを期待して尋ねた。そして詩織と日向は俯いていたものの、結局はそうしてくれると信じていた。だがしかし。

「それは……嫌……かも」

「え……？」

「中絶手術は……少し……」

詩織の口から、人工中絶を渋る言葉が発せられた。

「掻爬術は……ちょっと……」

『掻爬術』 ソウヒジュツ

基本的に人工中絶は、頸管拡張後、掻爬術や吸引器で胎児を取り除く方法で行われる。

皆がどれ程ご存知なのかは解らないが、その手術は、驚くほど原始的に思われた。

なぜなら、掻爬術とは子宮に直接、鉗のような器具をこじ入れ、無理矢理に掻き出すという方法なのだ。

『お腹の中の命がグチャグチャにされて体外に掻き出される感覚』

『前日から部分麻酔をかけられ、いざその工具で胎児をグニヨグニヨにされる感覚』

僕は男だから上手く解らないが、それは、何事にも変えられない喪失感と罪悪感らしい。

それを詩織が躊躇うのは尤もなことだ。

でも。

それでも。

詩織はそれを乗り越えなければならない。中絶がいくら犯罪的で酷い行為だからといっても、僕らにも引けない理由がある。

「でも……手術は受けないと中絶できないぞ？」

「……」

「解るよな？ お前なら……」

僕は若干口調を強めた。

掻爬術が嫌だといっても、中絶の為には致し方ないことなのだ。懐妊したのだから、それは避けて通れない。

避けて通れないのだけでも、詩織は再三僕の期待を裏切る発言をした。

「……アタシ……赤ちゃん産みたい」

「……………はあっ!？」

何言っただ、コイツ。

予想外過ぎる発言に、僕は語気を遙かに強める。

「何バカなことやってんだっ！ 中絶手術が嫌だからって無責任に産んでも仕方ないだろ？」

「……」

僕は腰掛けていた教卓を『バン』と叩き、強調する。座ったままの詩織は更に角度をつけて俯いた。

「日向、お前からも説得しろよ……。中絶が最善の選択なんだって僕は仕方なく動かなかった日向にも説得するように促した。」

元はと言えば、日向の耐え性が無かったのが元凶だし、日向には責任を持って胎児に対処する義務がある。きっと日向が出産を咎めた方が効果がある。

「仁彦……」

しかし、日向は詩織に話しかけるのではなく、僕に向かって視線を合わせた。

何だろう。

真直ぐ僕を見るその視線の悍ましさは。

「……なんだ？」

嫌な予感がした。

そうしてやはり、日向もまた僕の期待を裏切った。

それと同時に、背筋が凍るような驚愕の恐怖を感じる羽目になる。

その日向の発言は、

そんなダメージを僕に与えた。

その発言。

「仁彦、お前さ。詩織のお腹の子が『河童の巡り者』だから、降ろせて言ってるんだろ？」

………は？

生じる混乱と疑問。

なんで。

なんで日向が

詩織の胎児が『河童の巡り者』

だと知っているのか。

いや、そもそもなんで。
なんで日向が

『巡り者』なんて言葉を
知っているのか。

ピンク色だった背景色は
薄暗いグレーへと変化していた。

〔＊〕

私が教室に辿り着いた時には既に、ナカツ君と二人が話し合いを始めていたのが分かった。

ただし開いたままのドアを潜ると、薄暗いその空間に動く物は何一つない。

本来動いている筈の三つの『者』は、暗闇の中で硬直していたのである。

それを見て、『交渉』はナカツ君の手で核心的部分にまで進んだのだと悟った。

「どーしたナカツ君。電気くらい点けなよ」

私は敢えて平静を装い、カチカチと教室の全ての蛍光灯を点ける。

『明順応』を実感してから、開いた窓から蛾が侵入しないようカーテンを閉めに向かう。

「……って、何じゃコレ」

教室の中部あたりだろうか。

教室全体が見渡せる位置に辿り着いた時、私は気付いた。なんか生命体の数がやたらと多い。

まず私が捕らえたのが、中央の席に座った茶髪の男と詩織ちゃん。

正直その二人なら動揺すべきことは何もないが、その後方が問題だ。特進クラス特有の『少人数学級』のせいか、教室の後ろには多少のスペースの余裕がある。

目の錯覚ではなからう。

その数人の生徒が余裕でいれそうなその空間に、ひしめき合う物体の緑色。明らかに映えている。

黄色い嘴を携えたチビデブ体型の有機物、即ち河童が、大量に顕現していた。

その数、……おおよそ15。

長勇の教典

私は顔を引き攣らせているナカツ君を見て、溜息交じりに言った。

「あゝ。ナカツ君さゝ。もう交渉決裂させちゃったワケ？」

「……スマン。何かそうみたい」

「……ダメだなあ、ナカツ君は」

「「キューパー」」

言い終わるのと同時。

二体の河童が一体ずつ、私とナカツ君の元に襲い掛かってきた。

茶髪の男が密かに指示を出していたらしい。警戒されているのか。

私は瞬時に炎の玉を造りだし、河童にドッジボールの要領で衝突させる。

河童は吹っ飛ぶも、炎の玉はそのまま河童に密接し続け、焼き続ける。

やがて黒焦げの炭素に変質させると、不自然なボツという音をたてて消失した。

同時に、回りが少し涼しくなった。

『賤炎御霊』 ヌヒノミタマ

空気中の熱エネルギーを一点に集中させることで、エネルギー球を生み出す炎神の業。

周囲に拡散している熱を奪うことになるので、気温が下がる。

上手く利用すれば冷房要らずだ。

「イテテッ！」

対してナカツ君に向かった河童は、彼の顔面に両足で着地、へばり付いて髪の毛を抜いていた。

ナカツ君は床に置いた『草薙剣』を取ろうとしゃがんでいたが、視界を奪われオタオタとしていた。

「キュー」

仕方ないので、賤炎御霊で器用に焼いてあげた。

『草薙剣』を拾い上げて渡し、尋ねる。

「んで、何でこんな状況になってんの？ いきなり戦闘になっちゃったんだけど」

「イテテッ。わっかんね。『墮ろせ』って言ったら突然……」

「突然？ んじゃあ君は、『河童』について二人に何もいってないんだね？」

ナカツ君はケホケホ咳をしながら立ち上がり、コクリと頷いた。そうして屹立し、当事者の二人を見る。

詩織チャンはたった今繰り広げられた光景に目茶苦茶動揺して、目を泳がせていたものの、茶髪の方は嫌に落ち着いていた。

不思議なことだ。最早、あの茶髪は事の本質を知ってるんじゃないか考えられない。

「おっかしいな〜？ お二人さん。じゃあ何でその『胎児が巡り者』だって知ってんのかな？ オジサンに根掘り葉掘り教えてくれない？」

ジェスチャーを交えて言う

二人はそつと立ち上がり、暫く周囲を見回すようにした後、ほぼ同時に呟いた。

「声がしたんだ……」

「聴こえたの……声が」

「……声？」

側のナカツ君が聞き返すようにすると、茶髪が続けざまに答えた。

「そう、声。それで全部知った。俺達の子が『河童の巡り者』だってことも。『巡り者』がどういう存在かってことも……そんで……」

「そんで……？」

「アンタらが、『俺達の子を殺そうとしてる』ってことも……」

私はその語句に威嚇の要素が含まれているのを感じて、

「嫌だなあ『殺す』なんて物騒な……。ただ墮ろした方が良いつて言ってるだけじゃないか。ね、詩織チャン♪」

「……」

彼女の方に話題を振るも、困ったように口をもごらせて、茶髪の影に身を隠してしまった。これはダメだ。

仕方なく対峙する。

「ねえ、じゃあ何で墮ろしたくないの？ それは二人の意志？」

「本当に、ちゃんと二人で話し合ったのか？」

ナカツ君も加勢した。

でも私はある程度次の結果が読めていたので、麻布に包まっている『草薙剣』を取り出しておくよう目だけで指示を出した。

少し風が出て来たようだ。

カーテンを閉めそびれた窓の暗黒の空間から、心地好い温度のそれが頬を撫でる。

案の定、茶髪は言った。

「ああ、二人で決めた。『産む』ってな……」

「それが皆に反対されたとしても？」

「ああ。だからアンタらに、俺達の子供は殺させない。俺達が……守ってみせる……」

俯き加減の顔を上げたかと思ったその時、やにわに数匹の河童が迫った。

何だか事情は解らないが、完全に話し合いは紛糾してしまったようだ。

「ムキユ〜♪」

「もががっ！」

先頭の河童がナカツ君の顔にへばり付く。何だかコミカルな風景だった。

必死に剥がそうとするも、剥がれないようだ。

「もげが、もげがぐげげ〜！！」

ヌヒノミタマ

賤炎御霊で、その他の河童を炭化した後、そんな悲鳴をナカツ君はあげていた。

翻訳すると、

『息が、息が出来ね〜!!』
と言ってるのだろう。

河童の皮膚はそれ程に密着力が強いのか。さすがに危機感を持ったので、焼いて剥がした。

「おえ……」

「ダイジョブ？ ナカツ君……」

「何とか……」

「……行け。」

粘液らしきもので顔中を汚したナカツ君は気持ち悪がっていたが、茶髪は手加減無しに河童を寄越してきた。

加えて、十数匹。

今度は素早い。

これは賤炎御霊で処理できる限界を超えている。

「ナカツ君！ それ振りかざして！」

「え!？」

「いいから早く！」

私はナカツ君に指示するのに加え、間髪入れずにその草薙剣に炎を纏わせた。

反射的にであろう。

迫りくる緑に草薙剣がヒットする。

『ズガガガッ』という音をたてて、威力を増した剣は一直線に全ての河童を巻き込んで吹っ飛ばした。

教室の壁に次々と衝突すると、一様に白目を剥いて気を失った。

「うわっ、惨い……」

ナカツ君はその失神した河童達の山に拒否反応を示すが、私は動じない。

というか、いつの間に河童が教室の後ろ半分を占めるまでに増殖している。

数十……いや、数百匹は確実にいる。

ヤバイぞ、これは。

何せ、今回は以前の八岐大蛇とは違って、巡り者のタイプが違う。以前は八戸ミロクという生身の人間であったが、河童の巡り者は未だ胎児。つまり、大屋詩織という肉体の中に存在しているのだ。

以前のように、直接攻撃すれば詩織の胎内にいるため、詩織を攻撃することになる。胎児は巡り者でも、詩織は巡り者でない。

死のリスクは、存分に高い。

加えて、無限に増えつづける河童。

一匹一匹は弱小でも、蟻の大群のように集まれば、脅威に違いない。また、さっき顔に張り付いたように、窒息死を狙われても非常に厄介だ。

うーむ。

これはやはり、もう少しだけ交渉した方がよいかもしれない。転々と心変わりする。

「ねえ、詩織チャン。何で詩織チャンも産もうと思ったの？ この

茶髪に脅された？」

茶髪とは誰のことだろう、という表情をしてから、茶髪を一瞥して答えた。

「……ううん、違う。アタシも、日向くんの考えと同じだったから……」

「考え……って？」

再びナカツ君が割って入る。

暫く不思議に風切りの音が響くと、茶髪が神妙な面持ちに変わった。意図しない沈黙の後、言う。

その発言もまた、私達の意図しないものであった。

「俺にはよ……妹がいたんだ……」

茶髪の手は、その彼女の手をしっかりと握っていた。

「＊」

あの年の夏も、確か猛烈に暑かった。

しかし自らの名前をようやく書けるようになった位の歳だったので、俺はそういった不快感からはまだ無縁だったかもしれない。

具体的にはお盆だっただろうか。来年度の小学校入学を控え、田舎のおじいちゃんにランドセルを買ってもらった覚えがある。

田舎に帰省、といっても隣町に住むおじいちゃんの家泊まっていた時の事だった。

妹が産まれた。

そんな一報が入ってきた。

出産予定日より一月も早い早産だったという。

当時子分のような兄弟に憧れていた俺は、素直に、そして無邪気に喜んだ。病院に駆け付け、親父よりも早く妹に触れた位だ。

それだけ妹の誕生に、これからの生活を期待したのを覚えている。又、お袋や親父も妹が産まれてきたことを心から喜んでるように見えた。待望の女の子であったそうだから、それは一塩である。

名前は『日当^{ヒナタ}』。

お日様の光が作り出す憩いの空間のように、温かく、温もりのある和やかな女の子に育って欲しいという願いが込められていたそうだ。俺も両親も、日当を文字通り『箱入り娘』のように親密に世話をし、期待をしていた。

しかし、その期待は脆くも崩れ落ちた。

出生届を出した後の、一ヶ月検診の日だっただろうか。ようやく家族の一員として日当を家庭に迎え、『日当に英才教育をしよう』と、意気込んでいた時の検診だった。

日当は、『健常者』ではなかったのだ。

……病名、ダウン症候群。

『ダウン症候群』 down syndrome

体細胞の21番染色体が1本余分に存在し、計3本持つことによつて発症する、先天性の疾患群。ダウン症とも呼ばれる。

体に様々な発達障害が生じ、主に知能が発達せず健常者より社会適応能力に欠けることが多い。

現在のところ根本的（医学的）な治療法・治療薬はない。

人間の染色体は通常、46本である。しかしダウン症候群を患う人

には、47本の染色体が存在してしまうのだ。

染色体は多ければ良いという訳ではない。それに、まさか染色体を一本取るなんて、できるはずがないから、明確な治療法はない。

日当もまた、染色体を47本持つて、産まれてきたのである。

暫くして、日当にもダウン症候群の症状が著しく表れた。

産まれて間もない赤子がトイレを我慢できないのは、脳幹という感情を制御する部分が発達していない為である。

成長するに連れて脳幹は発達し、次第に『我慢』ができるようになるのだが、日当は脳幹がいつまで経っても発達しなかった。

ゾツとしたり、ビククリしたりすると、トイレが我慢出来ず『失禁』してしまうのである。

それは自我が目覚めた、本来なら幼稚園に通い始める頃にも治らず、お袋は苦勞していた。

そしてお袋の失望感は大きい。

俺が学力で悩まなかったのもその為だが、

私立の名門お嬢様学校の卒業で、俺にも小さな頃から英才教育をするなど、お袋はかなり熱心な『教育ママ』だった。

日当にも胎教などをしていたことから、産まれる前から期待を寄せていたことが解る。

『日当は、私が卒業した学校に入れる』と、未来数年に渡る教育ビジョンさえ持っていたほどだ。

しかし実際は『失禁癖』が治らず、幼稚園にさえ通えないとなれば、失意はそこしれないだろう。

夜な夜な、日当を巡る夫婦喧嘩をしていたのを、俺は知っている。

怒鳴り声こそしなかったが、日当に対する失意の声を漏らしていた。何である子は『失禁』するのか。

何である子は何も話せないのか。

いずれもダウン症候群による知能障害によるものだが、お袋は日当を忌ましく思うようになっていたそうだ。

俺から見ても、それはよく解った。

そしてついに、その日が来た。
いや、来てしまった。

俺が中学受験の為に勉強に励んでいた時。日当が特別養護小学校への入学の調整をしていた時だ。

自宅で日当は突然腹部の激痛を訴え、救急車で運ばれたのだ。小学校入学を控えても、片言でしか言葉を全く喋れなかったものだから、その痛みに気づくのに大層遅れてしまった。

日当が大声で『おにいた！ おにいた！』と言ってくれなければ、更に遅れていただろう。

結果、その痛みの原因は先天的な臓器の発達障害による破裂だと分かった。

そしてそれは
生存率10%以下の、難手術を受けなければならないのだ、とも分かった。

『おにいた……』

病床で、俺をか弱く呼ぶ日当の姿が今でも焼き付いている。

手術の結果次第で、この日当の命はどうにでもなってしまうのだ。

そう思い、俺はただただ沈黙したのだ。

そしてその沈黙の中、俺は耳にする。

病室の外から漏れている、お袋と、日当の担当医の会話。

何やら、必死な声だったから、俺はお袋が先生に日当を助けるよう懇願しているのかと思った。

でも、違った。

「何を馬鹿な事をおっしゃるのですか！ 『10%しか助からない』のではなく、『10%は助かる』のですよ！」

必死だったのは、お袋の方ではなく、担当医の方だったのだ。

「『10%しか助からないなら、手術は受けさせない』なんて、あの子の母親が言う言葉ですか！？」

俺はその『手術は受けさせない』という言葉に一瞬混乱しながら、それに続くお袋の声に耳を澄ます。

「分かっています……」

「分かっています……でも私は、あの子には手術を受けずに、余生を全うして欲しいと思うのです。……そんな低い可能性の手術を受けるより、残りの人生を楽しんで貰いたいのです」

「……でも」

「貴方はお医者様ですから、わからないでしょう。あの子を子供に持ったこんな哀れな母親の気持ちなど……貴方には、わからないでしょう……」

「……」

医者は何も言わなくなった。

そして続いた静寂の中、俺の心には、様々な感情が湧いてくるのが分かった。

疑問。怒り。不信心。

あのお袋は、一体何で

日当に手術を受けさせないのだろうか。

普通、手術を受けさせるのが当然だろう。それなのに、何故助かる可能性を身内の手で絶つのか。

『余生を全う』？

『残りの人生を楽しむ』？

……詭弁だ。

あのお袋……

いや、あのババアは

日当を忌ま忌ましく思っていた。

理想の娘より程遠い『失禁癖のある娘』に、喧しさを抱いていた。

あのババアにとって、日当は邪魔物だったのだ。

そう結論に至るのに、複雑な思索は要らなかった。そしてその結論は、俺に新手の不信心を産む。

お袋、もとい、ババアは

日当に過度の期待をかけ、期待通りにならなかった日当を忌ま忌ましく思い、挙げ句の果てに排除しようとしている。

……哀しくなった。

案の定、その二ヶ月後。

服部日当は息をしなくなった。

その日のことだ。

俺にある信条が産まれた。

俺はババアのことを、

母親だとは思わない。

俺は産まれてくる子供に、

過剰な期待などかけない。

子供は子供だ。親の分身じゃない。子供は『作る』ものじゃない。

『授かる』ものだ。『思い通りに育てる』権利はない。

俺は産まれてくる子供が

……

どんな子供であろうとも

絶対に責任を持って育ててみせる。

そうだ。

だから俺は、早く家庭が持ちたかったんだ。

今の親達は、

自分達が主人公であるかのように、子供をほったらかしにしたり、
自分達の分身であるかのように、子供を思い通りにしようとする。

だから俺は

子供を『授かり』、

俺の恵まれなかった家庭を築きたいと願ったのだ。

真面目だった俺があの日から、急にモテようと髪を染めたり、異性
との交遊に耽り始めたのは、そういった願望からだっただ。

偏屈な自己分析だと、笑う奴は笑え。

俺は屈しない。

だから俺は宣言する。

「俺はババアのように自分の子供を見殺しにしたりしない！ 俺は
俺の子供がどんな境遇であろうと守ってみせる！ 絶対に！ ……」

それが『河童の巡り者』だったとしても!」

それが守ってやれなかった

日当に対する罪滅しだから。

「＊」

大音声の鼓舞の音につられるようにして、強い風が吹き込む。遮光用の黒いカーテンを靡かせ、バサバサと、佳境を思わすBGMを作り出す。

それは、生温い空気が纏わり付く感覚を払拭すると共に、奇妙な緊張感を大気に与えることになった。

茶髪は息を切らす程に烈しく語っていた。10分にも満たない時間であったが、内容はそれにあまりに似合わない。夜はまだ浅い。

対して思考は深い暗闇の無限回廊をさ迷っている。

事情というか、人生観というものが、十人十色なのは十二分に分かっているつもりだった。

しかし私は浅はかだったのかもしれない。

単に欲情してエッチをし、後先を考えなかった結果が齎したもの。

そう今回のくだんを見做していた私は、急に茶髪が大きく見えた気がした。

「殺そうと思うなら、殺してみろよ。……俺は全力で抵抗するけどな」

「……日向くん……」

茶髪は詩織チャンを後ろに匿うようにして、臨戦体勢を取る。

私は言うべき言葉を必死に検索したが、ヒットするコンテンツは見当たらない。

「……」

完全に、雰囲気支配したのは茶髪の方だ。河童もなお増殖を続け、視界の過半が碧色に映えている。

意気消沈。

そんな熟語が有髄神経を伝導する。言付けを失ったような気がしたのだ。胎児殺しの正当性の希薄は甚だしい。

けれども、意外な事に、

「……詭弁はお前だよ、日向。お前の考えは歪んでる」

「え……」

ナカツ君が、口を挟んだ。

「日向、お前は甘えてんだよ。お前の過去がどうだか知らねえけどな、意気がるのも大概にしろよ」

それも、なぜか怒り口調で。

訳が分からない。

ナカツ君の言葉が、俄かに鋭利なものに変わった。

「＊」

日向の言い分は解った。

若干興奮気味に言い放ったせいとか、よく理解出来ない箇所はある。それでも感情移入するに不足ない。同情とでも言えるかもしれない。しかし、僕は知っている。

妹の理不尽な死という悲劇は、日向の我が儘に対する『こじつけ』に過ぎないということを。

「我が儘なんだよ、お前は」

「……我が儘？」

皺を寄せながら如何にも怪訝な顔をする日向に苛立つ。舌を鳴らす。更には河童の増加により急に人口密度の上がり、室内温度も湿度もかなり上昇していた。風があるのが救いだが、不快指数は決して低くない。

不快指数。

本来は気象庁が気候の状態から割り出す指標である。ところが今、その指標は全く意味をなしていないと思う。

不快さは憤怒の閾値を既に越えている。

「な、なかつくん……？」

硬直したような声がした。普段適当そうな紅だが、意外にも感化され易いのだろう。

尋ねたいことが一つあったが、日向にまず言葉を紡いだ。

「お前が子供を持ちたい気持ちには分かったよ。でもな、お前詩織はどうなんだよ」

僕が、一番ムカついたことだ。

「お前はその胎児を『俺の子供』とかずっと言ってた。でも違うだろ？ それは『詩織とお前の子供』じゃないのか？ ……それを『俺の』呼ばわりしてやがる。自分一人の所有物扱いしてやがる」
「……」

だから言ってやるんだ。

客観的に見た日向の姿を。

「お前は自分勝手なんだよ、自己中野郎。一人で子供の利権を握ろうとしてる辺り、お前は母親とソックリだ……」

世の中には、どんな私情を以ってしても大切にしなければならぬものがある。

他者との調和だ。

日向の主張は確かに一理以上のものがある。しかしそれに基づいた願望によって、詩織の人生を犠牲にしようとしている。

よくあることだ。

人間にはどこか偽善者的な側面がある。同情によって不条理極まらない願望を許容してしまう。

殺人事件の被害者遺族に対する同情から、死刑制度を肯定する者がいるように。

妹を見殺しにされたことを動機に、詩織を身籠らせた。そんな今回の背景によく似てはないだろうか。

大切なのは、調和だ。

悪があるから善を実感できる。だが、悪が絶滅すれば、善の概念はなくなるだろう。

戦争があるから平和を実感できる。だが、戦争が根絶すれば、平和の概念はなくなるだろう。

対立概念の調和がこの世界を保つ。ふと、老子の一節『大道廃有仁義』を思い出した。

胎児が巡り者である以上、外界の調和を乱すに違いない。その我が儘による災いを、やすやすと見逃す訳にもいかない。

僕は決意を固めた。

「宣戦布告だ、日向。命の保障はしないからな……」

「こっちもだよ……。俺は信条を絶対に曲げない。詩織を、子供を、俺は守る……！」

『川神の巡り者』との争いは、二人の信念の闘いとして始まった。河童が群れで突進してくる。数はもはや数え切れない。多過ぎて数える気にもならない。そこで僕は決断した。

「よし！ 逃げよう！」

「ええっ……！」

僕は分が悪いと判断して、戦闘開始数秒で教室を飛び出した。紅もついで追ってくる。

調子よく言い放った後だから、イマイチ合点しない行動かもしれない。でも今はこれが最善の道なのだ。

真っ暗な廊下を走りながら、紅と話す。

「紅！ さっきお前、どこ行ってた？ 花子のトコか？」

「え？ そうだけど……」

「花子は来んのか？」

「ウーン、多分。でも遅くなるかな……。なんで？」

「花子が必要なんだよ！」

「……おう、ラブラブ」

「言ってる場合か！」

紅に炎を出して貰い、明るさを確保すると、やはり大量の河童に追尾されているのが見えた。

策を思いついていたのだが、花子の力がないと実行できない。その間、どうにか河童群から逃れなくてはならない。

実際仲たがいでいる最中であるし、花子が来てくれるかどうか微妙である。でも、信じるしかない。

「キュ☆」

「げっ！」

階段に差し掛かると、既に河童が数体いた。仕方なく草薙剣で、駆け降りながら切り倒してゆく。

その時に、血液が飛び散って制服が汚れた。こんなことじゃあ制服で来なければ良かった。

「早くしないと、手に負えなくなるぞコリヤ」

「そーだねー。河童の学校になっちゃうにゃー」

「なんでお前はそんな脳天気でいられるんだよ……」

三段飛ばしで一気に駆け降りる。見た目通りというか、運動神経が良いようで、紅も難無くついて来ている。

追ってくる河童を気遣いながら、一階、生徒玄関の昇降口に着いた。

「とりあえず非常階段から屋上いくぞ」

「屋上？　じゃあ何で一階来たのさ？」

「下の階に行ったとなれば、屋上は捜されづらくなるだろ。非常階段使えば、見つからずにいける」

河童にどれほどの知能があるかは知らないが、そんなに賢くはない筈だ。

日向に関しても、下の階で見失ったとなれば、近くの部屋に隠れていると思うに違いない。

「きゅー♪」

非常階段へと急ぐ途中、再び二匹の河童と出くわす。顔を不意に狙われたので怯んだが、剣を縦に裁いて切った。

特に問題なく進む。

「きゃっ！」

河童が歩いた為に、粘液が床を濡らしていたのか。短い女の子らしい悲鳴が聞こえたので、咄嗟に振り向く。

紅がすっ転んでたが、

特に、問題はない。

制服がスカートだったが、

特に、問題はない。

意外にもピンク色だったが、

無論、問題はない。

問題ないので、平静に手を差し延べる。

「大丈夫か……？ 早くいくぞ？」

「……………見た？」

「……ピンクだった」

……頬をはたかれたが、

特に、問題はない。

炎の赤い光と、時々見つかる緑色の避難案内の光だけが照らす廊下。頬に感じるヒリヒリとした感覚に構わずそこを走る。

ひたすら進むと、外部の非常階段へと続く扉が見えた。

非常階段への入口には何故か南京錠が掛かっていたのでブチ切る。

つか、鍵かけてたら非常時使えないと思うのだが……。しかも内側から……。

この学校の危機管理の甘さに失望する。

粗い作りの階段に侵入して、同様に三段飛ばしで駆け上がる。

これで屋上に到着して、時間を稼ぎ、花子が来れば、何とかなる。

花子はきつと来てくれる。

ならば、僕は信じて待たねばなるまい。

外に出ているから、月を望むことが出来た。兎が餅をついている。

普段はそう認識できないけれど、極限状態にある今、感性が研ぎ澄まされているのかもしれない。

そうして、屋上に着いた。

流石に高いせいか、さっきから吹き荒れる強風が一層強く感じる。

月が綺麗だが、それが緊張感を解く訳でもない。

花子が来なければ、埒があかないのだ。連絡をとって、一刻も早く来てもらう必要がある。携帯を取り出した。

「ちよっと花子に電話するわ」

「あら、そう……」

仲良し登録名簿から、最初に登録された名前を選び、電話をかける。バッテリーがあと一つしかないのに不安がりながら、コール音をせわしく聞く。

特有の音が一定間隔で鳴る。

一回目。……でない。

再びかけ直す。

二回目。……でない。

三回目。……でない。

でない。

繋がったと思っても、結局はお留守番サービスである。

「あーもうっ！ この大事な時に何で出ないんだ、あの馬鹿！」

僕は携帯に向かって怒鳴った。

「……馬鹿呼ばわりはキツくない？ ナカツ君？」

いつまで経っても出ない花子に再三の苛立ちを覚えるも、事態は解決しない。

僕はやるせなくなつて闇空を見上げた。

ふと、考えてみた。

花子は、今回の懷妊劇を、どうみてるんだろう。もし花子が詩織の立場になり、僕が日向の立場になったら、花子はどうするだろう。母親思いの花子だが、自分が母親になるとなった時、どう思うのか。分からなかった。

花子はいつも天真爛漫で、どちらかと言えば清楚な方だから、下の話になると考えがわからないのである。

しかし別の事が分かった。

僕はもう十年以上も側にいるのに、花子の事をこんなにも知らない。その無知さを今、初めて認識した。

思えば僕はずっと、花子の事を分かっていたつもりでいたんだ。

花子の全てを知っていると勘違いしてたから、花子を理解してやれないでいるんだ。

ああ、そうか。

僕は花子の事がもっと知りたいんだ。

そう分かった。

あの活発でちっちゃな花子を僕は……

「キュ〜♪」

そうやって、結論を見出だそうとしていた時だ。

「此処にいたか、仁彦……」

予想より遥かに早く来訪者が現れてしまった。僕の邪推ではあと数十分は稼げていた筈なのに。

「どうして此処が、分かった？」

「……馬鹿じゃねえってことだよ」

後ろに控えた詩織は相変わらず俯いていた。

「＊」

動揺すべきことが私には今三つほどある。

一つはナカツ君にパンツを見られたこと。

しかも今日は酷い日であるから、血を見られたかもしれない。まあ、そんなことは些事なのだが。

二つは、花ちゃんについて。

どうやらナカツ君には何か現状打破の秘策があるようで、花ちゃん
の力を必要としているらしい。

だが私は花ちゃんに、ある提案をさっき会った時にした。

その提案に花ちゃんがもし従っていたら、あと一時間は花ちゃんは
こない。

私が強引に『河童の巡り者』を殺められない訳ではない。

けれども『河童の巡り者の死』は『大屋詩織の死』である以上、そ
れは最悪の選択肢だから、最終手段だと思った方がいい。

三つ目は今、茶髪が説明していることだ。

後方に河童の大群を携えて、指揮官の如く気取っていやがる。

「この河童達は、馬鹿じゃねえんだ。河童は知恵や経験を、共有し
てる。お前らが殺してくれた河童の記憶も、全部共有してんだよ」
そういえば先程、私がすっ転んだ時に退治した河童は、ナカツ君の

顔を狙って迫ってきた。

顔を狙うことが合理的であると、知っていたかのように。

私達は窒息を恐れているから、その攻撃は脅威と言っている。あの河童は、それをも認識していたのではないか。

今考えると、そうも思えた。

まるで、教室で私達が対峙した河童の経験を、受け継いでいるかのようだった。

また、茶髪がその憶測を裏付ける。

「コイツらは学習出来る。数が増えれば増えるほど、情報量が増える。そうしてドンドン賢くなる……見せてやるよ」

「キュ〜!!」

河童の群れが迫る。

私は例のように賤炎御霊を発生させて、群れに投げた。しかし。

今度は簡単には焼かれてくれなかった。

「キュ〜、パツ！」

河童達はその嘴を大きく開け、何かを吐き出した。

その『何か』に賤炎御霊が衝突したかと思えると、肉が焼けるような音をたてて消滅した。

「……何だコレ……」

ナカツ君が呟いた。

無理もない。

開かれた屋上の東側に、私達。西側に、茶髪達と、スクラムを組んでいる河童群。その中央には、実に奇妙なものが浮遊していた。

視覚できるのは、球体。

一つは赤く轟々と燃えていた。これは、私が明るさを確保する為に出したものだから、気にする必要はない。

問題は、その周りだ。

河童の身体位だろう。

中くらいの柔らかかそうな水色の球体が、沢山浮遊している。

青白い光を僅かに発していて、闇夜に幻想的な雰囲気を提供していた。

恐らくは水の塊とおぼしき浮遊物。完全な球体ではなく、タプタプと不安定そうに流浪している。

突如、河童がそんな物を吐き出したのだ。

「ほら、行けよ……」

「キュ〜★」

私達はその神秘的情景にキョトンとしていたが、茶髪に容赦はない。すかさず河童に指示を出している。

「キュ〜、……キュ！」

それに応えた河童は、急に空手の様に構えをとると、『押忍！』と言うかの如く腕を前に突き出した。

ゆるキャラ代表とでもいうべきチビデブで、余りに短い腕であった為に、不覚にも可愛いさを感じていたが、それはすぐに払拭された。河童が腕を突き出した直後である。

浮遊する水の球から、何かレーザーの様に飛び出たのが視覚できた。そうして、視覚したところ。

「……っっ！」

「……痛あっ！」

右肩に激痛が走った。

「ぐうう……」

見ると、右肩がえぐられていた。痛みから、思わず押さえて疼くまってしまう。

ナカツ君は草薙剣を盾にして防いだようだが、かなり握力を浪費しているみたいだ。私はしゃがみ込み、あの水の球を見る。

今の光線の発射源は間違いなくあそこだ。

あの河童の吐き出した浮遊物から、水鉄砲のような高水圧噴射が私達を襲った。

河童の突きがその発射合図であろう。

「うわっ紅。大丈夫かその血」

「そんなことより、ナカツ君。あれ斬ってくれる？ 多分かなり厄介になるから」

怪我を気遣ってくれるナカツ君に、そう依頼する。

今にも再び河童が拳を前に出そうとしていたから、急がないとマズイことになると思ったのだ。

ナカツ君は草薙剣の扱いに慣れてきたようで、素早くその球体を叩き切る。破裂音と共に、それが弾けた。

水が粒子となって空中に拡散する。

見た目単なる水の様なので、少しだけ安堵した。

「キュ〜♪」

「……あーあ」

安堵したのだが。

「墓穴掘ったな、……仁彦」

茶髪の放ったその言葉に、緊張は頂点に達した。

安堵など掻き消されてしまう程に。

時間が、止まったような気がした。

月光りが水粒子に乱反射をし、キラキラとした粉が降り注ぐ。

私はその情景が、スローモーションで時間が流れる象徴であると思った。

墓穴。

茶髪がそう言った真意は、直ぐに分かった。全身を刺される痛みを以って。

茶髪が指をならした時だ。

.....

空中に拡散していた水粒子が

.....

極小の弾頭のように、降ってきた。

「……！！」

「か……は……！！」

豪雨を思わせる粒子が、上から下へと、高速移動を始める。

その量子力学レベルの加速度を持ったそれに、私達はただ皮膚を切られるしかなかった。

身体中の皮膚が、ぱっくりと開く。

「痛たたた……」

「や、やばいなコレ」

ナカツ君も同様なようで、制服も八つ裂きにされてしまっていた。赤く染まり制服特有の白さは見受けられない。

さらに悪いことに。

「弾ける……」

「キュパー！」

河童が腕を突き上げる動作をすると共に、今だ浮遊していた水の球の全てが、爆発し、細かな粒子となった。視界全体が占められる。

綺麗であるが、この状況で風流を意識出来るほど、私は楽観していない。粒子が大量に拡散している、ということは、いわば凶器が空中に存在しているということなのだ。

先程たった一つ分の粒子で、この傷だ。

これだけあれば、高確率で……死ぬ。

……否、確実に、死ぬ。

「何だよ、もう……河童……目茶苦茶強エじゃねえかよ……」

「……だね」

生返事をしながら、脳を駆使して考える。

核火之右拳も、核火柱も、賤炎御霊も、現状を打破するには力不足。かと言って草薙剣も全く利用価値がない。

というか、河童がこんな特異な攻撃をするものだとは知らなかった。故に、咄嗟に対応など出来る筈がない。

んー。

やばいなあ……。

つか、もう茶髪が指を鳴らそうとしてんだけど。少しは躊躇しろっての。

内心めっちゃ焦る。

「ちょっとタンマ！ その茶髪少し待とうか?!」

「……あんたらに容赦はしない」

「いやいや、普通ね物語ってのはさ、主人公の思索が終わるまで敵は攻撃しないじゃん？ 君がこのまま私達殺してもつまんないよ読者は……!」

「……じゃあな、仁彦。これで終わりだ」

「完全無視かいっつ!!」

結局、説得の甲斐無く茶髪は親指と人差し指を合わせる。

ナカツ君が唾を飲む、その音と共に。

その指が、なった。

「＊」

私は紅さんに言われた通りにすべく、自宅へと帰ってきていました。本当はジンに会いたくなかったので、別の場所で夜を明かす覚悟でいたのです。

しかし紅さんにジンが『交渉』の為に暫く帰って来ないと聞いて、やって来ました。

早速紅さんの提案通り、着替えをしてみようと思い、自室のタンズに向かいます。

「……アレ？」

その途中、リビングにある机の上に、何か見慣れないものがあることに気づきました。

普段、ジンの部屋で食事など、大半の時間を過ごす私は、滅多にその机使いません。

ましてや、入浴と睡眠以外に、この部屋を利用することは、ほぼ有りません。

ですから、机の上に置いてある花飾りの髪留と、一枚の紙の存在には直ぐに分かりました。

窓から外を眺めてから、その紙を手に取ります。

空には、小さくも幽玄に月が輝いていました。そこでは、兎が餅を

ついています。

あの兎は、ずっとあのポーズで膠着しています。
対して私も、その場に硬直してしまいました。

「え……」

その紙に書かれた内容に、私は心を握りしめずには、いられなくなつたのです。

一枚の紙は、手紙でした。

宛名は、ジン。

「……全く、もうっ」

読み終えた私は、たまらず部屋を出ます。

彼の元に行きたいと、願いながら。

その手紙には、書いてありました。

ネットで金魚草について調べていた時、偶然見つけた髪留を購入したということと、

彼の不器用な思いが。

「＊」

一方その頃。

一人称で『一方』という表現は些か違和感があるかもしれないが、
我にとってそんな事はどうでもいいのである。

九州南部に位置する、鉄砲がこの国に初めて伝来したとある島。

この国が開発した、H2Aロケットの発射台がある唯一の島。

その有名な島に、我は『盟友』と共にいた。

地上は恐らく夜が始まった頃だろう。

推量形なのは、我が地下室にいて、人工的な明感しか捕らえることが出来ない為だ。

6畳に満たない薄暗い閉塞的空間。

我は、無造作に置かれた三脚椅子に座る『盟友』を一目して、こう尋ねる。

「大丈夫なのであるか？ お主は彼等に何と言って此処に来たのだ？」

ウタリの教典

「ああ、心配するな……『地亥宰』クニタダノツカサよ。奴らには、宇宙開発計画の
為だと言つてある」

『地亥宰』。

苦笑しながら、彼は私の『フィリウス』の名を言う。

椅子に腰かけていても、彼は座高だけで私の身長とほぼ同じである
ので、そのデカさはよく分かる。

白衣を纏っているとすれば、更に異質だ。

「そういう小野殿は、どうなのだ？ 俺は天文学者だから、この島
に来る尤もらしい理由はいくらでもある。しかし、地質学者である
小野殿には、口実などないと思うが……？」

小野五郎。
オノゴロウ

中部地方で、地殻の研究を中心に行っている私の本名だ。

そんな私は、有給休暇である旨を彼に伝えた後、本題に入ろうと席
を立った。

薄暗い中で、空調設備の音だけが室内にこだまする。

「……で、どうなのだ？ お主の言う『君臨宰』ニギリノツカサというのは……」

君臨宰の様子。

実はこれに関する意見交換こそ、我々の目的であるのだ。

彼は、埃っぽい空気を払うようにしながら、

「ああ、まだ『水宰』スイノツカサと『獄宰』ヒトヤノツカサに頼ってる段階だが……着実に経

験値は積んでいる。今頃も、『川神』を淘汰しているだろうな……」

随分と余裕そうに答えた。

対して我はその答えを聞いて、動揺してしまう。

「『経験値を積んでいる』……？ そんな悠長な事を言ってる暇が

あるのか？ 『創造宰』ミイタマノツカサ様は、既にお冠でおられるのだぞ……？！」

当然だ。

我らが盟主、『創造宰』様は既に痺れを切らしておられる。ようや

く待望の『君臨宰』が分かったというのに、我々のていたらくで先延ばしにしては、何を思われるか分からない。

それに、『あの動物神』の反逆だって恐ろしい。少しばかり、口調が荒れる。

「まあ、落ち着けよ。小野殿。……何せあの少年は君臨宰だ。扱いには気をつけねばならないだろ……？」

「……ああ」

「それに、君臨宰たるもの、人を統べる……上手く利用する采配の力が必要不可欠。『獄宰』と『水宰』を巧みに利用してこそ、一人前と言えるだろ？」

「だが……しかし……」

我は言葉を濁す。

それは盟主である『あのお方』に対する恐れから来ていたが、敢えて意識はしなかった。

続けて彼は言い放つ。

「『創造宰』様も分かって下さる筈さ。それがあの少年に、『あの動物神』を抹殺させる、最善の道だってな……」

「……そうであればよいが……」

我は見える筈のない空を見上げる。天井を突き抜け、月が綺麗に見える気がした。

仕方がないが、今回は盟主に上手く報告するでしょう。彼に対する『創造宰』様の信頼は厚い。

以上。

『太陽宰・天照大神のフィリウス』

天野照美。

『地亥宰・大国命主のフィリウス』

小野五郎。

二人の会話である。

言ってることが意味不明？

……我には関係ないことだ。

「＊」

こんな気持ちになったのは、二回目だった。

言うまでもなく、一回目は八岐大蛇に殺されかけた時。死に直面した時にだけ味わうこの感覚。

僕はその感覚に、悔恨を抱かずにはいられない。

志賀直哉が山手線に轢かれ、考えたという生死観。それを僕は悟り、同時にある人を思い浮かべたのだ。

浅間花子。

今際の危機に瀕した時に、彼女の姿を思い浮かべずにはいられない。ましてや、彼女に対して申し訳なさを感じている今では、尚更だ。もう花子に会えない。

仲直りしておけば良かった。
そう思う。

水粒子によって八つ裂きにされようとしている今になって、である。死ぬのは怖くない。

しかし僕は、生に固執していた。

それはやはり、『花子が又来てくれる』という淡い期待があったから。

そして……案の定。

とっくに感じている筈の痛みはない。

僕は厭に思って頑なに閉じた瞼を開ける。

そこには、やはり。

見覚えのある『大木』^{タイボク}が、そびえ立っていた。

幹を傷付けられた姿で。

続けて、聞き覚えのある声。

「何が『僕が守る』だよ、ジン。私はもう、子供じゃないんだからね……！」

浅間花子。

その人が、来てくれた。

僕らが通った非常階段口に、その小さな体を反らして。

「……はな……こ」

「は、花ちゃん……？」

「ちっ……浅間か……」

「アンタ……」

それぞれが、それぞれの言い方で彼女を呼ぶ。驚きが後者三人を襲う。

対して僕は目の前がぼやけていくのが分かった。白い膜が視界を占める。

その正体を認めたくなくって、腕で目を拭う。

傷口が開いていたものだから、顔が血で濡れてしまいが、それでいい。

ごまかすには、丁度いい。

それに、今僕にはやるべきことがある。

スタスタと、花子が僕達に歩みよる。

近寄ってきて、やはり小ささを感じた。けれど今、その存在はかなり大きい。

日向と詩織は、花子も巡り者であることを悟ったようで、出方を窺って警戒している。

そのタイムロスを利用して、花子と話す。

「うわっ、大丈夫？ ジンも紅さんも、酷い傷……」

大丈夫。

傷を労る花子に、ただそう一言加えて、僕は早急に旨を伝える。

旨とは、無論、河童を殺す策のこと。

詩織の胎児を、日向と詩織を傷付けずに、僕達のできる最善のことだ。

「……で、出来そうか？ 出来るだけ密閉して欲しい」

「うーん。屋上のコンクリの上からだ、少し手こずるかも……」

「……そうか」

「でもやるっきゃないもんね。花子ちゃんを信じなさい、ジンっ」
その策に対して、一瞬眉間にシワを寄せた花子だが、直ぐに笑顔で

答えてくれた。

紅の出した炎によって照らされた顔が、何とも愛おしい。僕の胸あたりしか身長のないこの少女が、どうしてこんなにも頼りがいがあるのか。

僕達はスポットライトに当てられた錯覚を受けた。

「紅も……大丈夫だよな？」

「うん。てかナカツ君も、ちゃんと考えてるんだね……いい策じゃあないか」

「どうも……じゃあ、どうやら時間切れみたいだから」

何度も聞いたキューキューという声が響く。

再び、屋上中にシャボン玉状の水玉が浮遊した。

九死に一生を得て、本来なら助かった余韻に浸りたい所である。でも、臨場の瀬戸際にある今、そんな時間はない。

よって、ここからの展開は速かった。

「全く、お前は良いよな仁彦……」

水鉄砲が、四方八方から噴射される。

「何がだ……？」

「恵まれてるんだよ、お前は」

すかさず、花子が『白楊之楯』を叢生し、取り囲むようにして僕を守る。

それに安心して、僕は日向と詩織に向かって歩み始めた。

「よく言われるだろ？ 子供は親を選べない。お前は、親に恵まれたんだよ」

「……やっぱし歪んでるな、お前の思考は……」

今度は水粒子が拡散し、降り注ぐ。『白楊』の隙間を埋めるようにして、小さな樹木が生えて、ドーム状の防衛網が張られた。

紅の炎は防御には不向きな為に劣勢だったが、花子の植物はさすがに強い。

「詩織！」

そのドームに河童と二人を誘導した後、僕は詩織を呼んだ。

「さつきからお前ずっと黙ってるけどよ……お前はどんなんだよ」

「え……」

「お前の意思是、『産む』のが本当なのか……？」

続けて河童の物理的な攻撃を、草薙剣で防ぐ。

花子と紅は、僕達を包む木のドームから脱し、屋上中に樹木を叢生させていった。

「……うん。だってアタシも、日向君の考えに共感したから……」

「共感？ そんな一時の同情に、お前の人生を賭けるなんて、間違いじゃないのか？ ……第一、大家さんが悲しむぞ……？」

「……でも」

「詩織が自ら望んだなら産むのに躊躇は必要ない。でも、それが日向に対する同情による決断なら、おかしくないか……？」

「……」

「子供に対しても失礼じゃないか。周りの人にしても失礼だ。同情したから生まれた命なんて、失礼過ぎる……！」

「……」

「詩織、仁彦の言うことに耳を貸すな」

途中、日向が口を挟む。

樹木の呼吸音か、樹海などで聞くことの出来る特有の音が、しじまを演出した。

詩織が唇を噛んでいるのが解る。

そして、長い沈黙が続く。

沈黙を破るのは、詩織の役目だ。

この場にいる誰もが、詩織の発言だけを純粹に待っている。詩織の乱れた呼吸音と共に、

僕は確かに耳に聞いた。

「……本当は」

本当は、産みたくない。

詩織の口から毀れた言葉に、僕は唾を飲んだ。日向が目を見開き、泳がせる。

……これで、大義名分に不足はない。

「そういうことだ……日向。残念だけどな、これで終わりだよ」
そして、物が焦げる臭いが漂う。

煙。

白いモクモクとした煙が、発生している。

「けほっ、けほっ！」

「ナカツ君！ 速く出て！」

樹木で完全に密封されたドーム。

その中で唯一の出入口から、僕が走って出ると、その出入口も、多量の植物で閉じられた。

「な、何だよコレ！」

「「キュー！」」

完全に閉じ込められた大量の河童と日向と詩織は、中で大騒ぎしているのが分かった。

茶色の幹や枝が複雑に絡み合っている壁が、しばし揺れる。

恐らくは、中でドームを破壊しようと、攻撃しているのだろう。

だが、それもすぐに収まった。

「……終わったね」

「ああ……」

なぜなら今頃、中の河童や二人は体の自由が効かなくなってるだろうから。

僕が考えた策。

それは、植物で作った閉鎖的空間を『二酸化炭素で満たす』というもの。

上手く燻し出して、空気中の二酸化炭素濃度を7%まであげれば、河童もろとも気絶させることができる。

非人道的かもしれないけど、気絶した詩織ならば、胎内の巡り者を詩織をあまり傷付けずに殺せるのだ。一挙兩得と言えよう。

後始末は、大和爺さんがどうにでもしてくれる筈だ。記憶を整理すれば、全て上手く終わる。

今回は精神的に疲れたな。

そう思って、腰を下ろした。

一段落に安堵して、月を見ようと、横の空を見上げると、突如、花火が上がった。

「わぁ、きれー！ ジン！ 花火だよー」

「あゝあ、始まっちゃったか……」

「つか、今日花火大会だったのか……」

後で聞いたのだが、さっき紅は花子に、今日の花火大会に僕を誘うよう提案していたらしい。

花火を見て、感動的な気分になった。

「そういえばさ、花子。金魚草とかさ、植物神の力で生やせるんじゃないのか……？」

「分かってないなあ、ジン。それじゃあ意味ないんだよ。植物は、自分で得てこそ意味があるのだ♪」

「……そっか」

そうして僕は、

隣に座った花子の頭を撫でた。

サラサラの髪に、『あの髪留』があることに気付いて、嬉しくなる。花子も、笑顔だった。

〔＊〕

その後。

気絶した二人を含め、今回のことに関わった人の後始末は、大和爺さんに全てを一任した。

二人の記憶は無論なくした。

付き合いどころか、知り合いであったことすら、消すのだという。また、河童殺しを目撃された捺乃や、クラスメイトの記憶も同様である。

ちなみに僕は、花子に宛てて書いた手紙を早急に処分した。今になつてみると、恥ずかし過ぎる。

河童が出現してから、十日程で全てが終わった。

それから一ヶ月ほど全身を包帯で巻かれ、ミイラ男になっていたが、それは割愛したい。

プールに入って失神したりもしたが、省略する。

それにしても、動物神との戦いは大変だ。

花子を護る為とはいえ、今の僕の力ではどうしようもない。

……せめて僕にも神の力が使えれば……

そう思うも、どうしようもなかった。

そんな自分の無力さを感じていた僕は、大垣神社に来ていた。

夏の暑さも収まり、秋の始まりを思わす時節。傷も十分に癒えて、

神社の銀杏も色づき始めたそんな時だ。

僕は太和爺さんに、僕自身が巡り者の力を使えないか、相談しよう
とやってきたのだ。

夏休みが終わり、帰り道に丁度いいと思ってきたのだが、太和爺さんはいなかった。

何だか最近太和爺さんに会えてない気がする。同様に、天野教授に
対してもであるが。

忙しいのは分かるが、命懸けで僕が力を欲しているのだから、都合
良く居てほしいものだ。

致し方なく、母屋から内裏へ引き返す。

そこには、使われていない、板で封をされた井戸が印象的な空間が
ある。

僕はそこで河童を危めた訳であり、感慨深い気持ちになった。暫く
眺めてみる。

思えば、あの時はまだ河童と妊娠問題は別個のことだと思っていた
のだ。巡り者との戦いなど、単なる幻想だと感じていた。

また、自分と同世代の者が親となるなど、まだまだ幻想に過ぎない
と感じていた。

でも、それは間違いだったのかもしれない。

今の社会においては、いくらでもその可能性があるのだ。幻想とし
て扱い、軽視するのは、得策でないだろう。

何だかあの河童が、それを教えてくれた気がする。

すると、あの特徴的な井戸から水がまだ湧いているのか、ふと、疑問に思った。

近づいて、板の上にある大きな石をどかす。

「重たっ……」

予想以上に重くて苦勞したが、興味があったので何とか見てみよう
と力が入った。

板を開けて、覗き込む。

そして。

「うっ……!」

開けた瞬間だ。

強烈な臭いがした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

まるで、死体が腐ったような臭い。

加えて声。

「見ちゃったね……ナカツ君」

命は連鎖を繰り返す。

繰り返し、子は子の親になる。

ただ、連鎖は止まりつつある。

〔第二幕 完〕

主題 子供の定論

副題 ダウン病 ／ 人工中絶

〔＊〕

「うっ……」

眠い。

ある秋の一日。私は目を擦り、ふらつきながらも立ち上がります。

私は時計を見て、まだ朝が早いのを確認しました。

というか早すぎです。

曙どころじゃありません。

もはや暁です。

まずは着替えをしておもうと思いましたが、靴下を脱いだ時点で断念します。

着替えを用意していませんでしたし、第一、来訪者をこれ以上待たす訳にはいけません。

よって薄いピンクのネグリジェのまま、玄関先に向かいます。ネグリジェといっても、デザイン的に殆ど部屋着と変わりませんから、大丈夫でしょう。

……ちなみにこのネグリジェは、昔お母さんがイタリアから買ってきてくれたものです。パジャマではありません。

決してジンをみたいに『寝巻き』と言わないように。

まして小学生からずっと着ているからといって、『成長が止まった』とか言う奴は処刑です。薔薇のトゲトゲでチクチクの刑です。

耳障りなインターホンの音で起こされた為に、若干ご機嫌斜めの私は、相手を確認せずにドアを開けます。

「おはようお隣りさん！」

「はい……？」

開けた瞬間に、やけにフレンドリーに挨拶をされたものですから、知り合いかと思いました。

ですが違います。

そこにいたのは、一人の女の子。

「えと……あの、どちら様で……」

恐らくは年下でしょう。

背が低く、私と目線が殆ど変わりません。まあ私より若干高いですが……。

「なぬっ……！ お隣りさん、この愛菜^{マナ}ちゃんを知らないのですから、ますかっ……！」

「はあ……？」

私は訳の解らない発言をするツインテールの少女に、生返事をするしかありません。

不思議系少女とも言うのでしょうか。やけにオーバーリアクション

ンをしてきます。

『お隣りさん』と私のことを呼ぶということは、隣に引っ越してきたのでしょうか。

率直に尋ねました。

「そのとおり！ 昨日403号室にアジトを構えた北川愛菜、14歳であります。よろしくなり」

そうして突然の来訪者は、私に蕎麦を差し出しました。

ようやく分かってきました。なるほど引っ越しの挨拶って奴ですか。

「ありがとー。……で、何て呼べばいいのかな？」

「うーむ、そうですね。出来れば『愛菜ちゃん』と呼んでくれたら幸せだぞっ。お隣りさんの名前は……？」

蕎麦を受け取りながら、会話を交わします。浅間花子という名前と、家族構成を簡単に伝えました。

「花子ちゃん……ということは『はっちゃん』でありゃんすか。愛菜ちゃんも普段はアジトに一人なので、遊びに行ったり、来たり、綱わたり」

身体を左右に揺らしながら、やはり訳解らない発言をしています。ただよくみると、ツインテールのこの少女はかなりの美少女のようでした。

私は無駄に身体を動かすハイテンション少女を暫く観察します。

ロリータファッションとでもいうのでしょうか。それとも単なる子供ののでしょうか。

靴は幼稚園児が好むようなキャラクターシューズで、フリフリのピンクのスカートをはいています。癪ですが、端からみても胸が大きいのが特徴に揚げられるでしょう。

足元から徐々に見ていきました。

そうして、首を見ます。

「……ひっ！」

その時、私はドキッと思いました。

健康的な色白の首。

青白いと言ってもよいかもしれません。

その愛菜ちゃんの首。

ツインテールの為、本来邪魔をするものがない筈の首に、何か、太いものが巻かれています。

太いものは、長くもあります。

光ってもあります。

舌が、割れてもいます。

何だか見覚えがあるような、太い生命体。

「へ……へびっ……!？」

私は狼狽しながら、その名称を呼びます。図らずも声が大きくなっ
てしまいました。

俗に言う蛇使い……というのでしょうか。

北川愛菜ちゃんの首には、品やかに動く太い蛇が巻かれていました。
前であった蛇である、八岐大蛇より、リアルで気持ち悪い感じですよ。
というか、なぜ今の瞬間まで気付かなかったのでしょうか。最も奇抜
な特徴だというのに。

「……えっと」

私はその蛇についてどう尋ねようか否か迷います。迷っていると、

「何だなんだ？ こんな朝早くから近所迷惑だぞ……」

「あ……ジン」

ガチャリという音をたてて、ジンが隣の部屋から出てきました。

私が大声で驚いた為に、気付いてやってきたのでしょうか。寝癖がひ
どいです。

「……って、そこにいるのはどちらさま？ ってか何で蛇巻いてん
の？」

ジンは愛菜ちゃん存在に気付いたようで、その首に巻かれた蛇に
も気付いたようです。

てかジン。

いきなりの蛇を巻いた少女にも関わらず至極冷静です。八岐大蛇の
時に見慣れてしまったのでしょうか……。

「おおっ！ お隣りさんのお隣りさんでありますか?! ちらは403号室に越してきたキュートな中学生北川愛菜ちゃんと、錦蛇のゲンちゃんだぞっ」

「ああ……引越しか……。僕は中津仁彦、高1ね。401に一人暮らし」

朝からテンションMAXの愛菜ちゃんに比べ、若干ふわふわしているジン。

欠伸をしながら、同じく蕎麦を受けてっています。

「まさひこ……ってことは『まーくん』でしゅか……。それに一人暮らし……。はっ！ ということは『はっちゃん』と『まーくん』は、夫婦なのでありますかっ！ 訳あって隣の部屋で別居中ってやつ？」

「……はあ、まあ」

「ジン、何か面倒くさがってない？」

愛菜ちゃんが繰り出す言葉を否定するでもなく、ジンは生返事をします。早く会話を終わらせて、二度寝しようという画策でしょう。

「おおよ……。では愛菜ちゃんは、お二人の素敵な朝を邪魔する訳にはいかないなり。今日のところは退散するのである！」

そういつて、愛菜ちゃんは小刻みにピョンピョンと跳ねながら、自分の部屋に戻って行きました。

錦蛇がくねっていました。

やがて、愛菜ちゃんが部屋に入っていくのを確認します。

「むー、愛菜ちゃん。キャラ強烈だねー……」

「若干花子と被ってるけどな」

「なにをっ……！ 私はあるんじゃないよ」

と、そこまで言っつて自分の発言が愛菜ちゃんに対して失礼であったと思ひ自省します。

対してジンはボリボリと頭を掻きながら、自室へと帰って行つてしまいました。

私は目が冴えてしまいましたので、ミルクでも沸かして飲もうかと

思考します。

外気が少し肌寒いです。

秋は、深まりつつあります。

「＊」（読みにくいですが悪しからず）

403号室という名のアジトに戻ってきた愛菜ちゃんは、鍵を閉め、作戦会議をするのであります。

「どう？ ゲンちゃん。あの二人で間違いなさそう？」

廊下を歩き、リビングスペースに置かれたソファーに腰掛ける。すると、スッポンの『すーさん』が足元に寄ってくるのです。こめじるし。

確かペット禁止の物件だった気がするけど、気にしたら負けよ。

そして愛菜ちゃんは返事が遅いことに懸念を抱きかけますが、その直前に応対があります。

「あア……間違いナシ」

「絶対に？」

その相手は、首元。

「ワレを何だと思ッている？ 直接見たノダ。間違エルはずがない」

「ふーん」

愛菜ちゃんの首元にいる、一匹の錦蛇。それが、話し相手です。

「でもさ、とっても人の良さそうな二人だったよ？ それに相思相

愛みたいなの、そんな感じしたし。」

愛菜ちゃんは率直に、ターゲットを見た感触をゲンちゃんに告げます。でも、ゲンちゃんは聞く耳を持たない。

「そんなことは関係ナシ。」

ゲンちゃんは、愛菜ちゃんが恐れていることを、すんなりと言ってしまうのですね。

「あの二人はフィリウスだ。それも、

それも、

ワレわれ動物神を滅ぼそうとしている、極悪人だ。」

ゲンちゃんは、付け加えて言う。

「愛菜、オ前はやらなくてはナラない。アノ二人を、血祭りにあげろ」

「『動物四神・玄武のフィリウス』とシテ、人間から動物を守るのだ。そのたメなら、人間など殺シたってカマわない。特に、アノ二人はな」

「＊」

そして同じフロアに北川愛菜が引越してきてから、早十日が経った頃。

あれから僕達は、しばしば食事を共にし、ゲームなんかをして打ち解けていた。

どうやら愛菜の両親は海外に仕事で出ているらしく、基本的には家に一人らしい。このマンションの大家さんと知り合いらしく、403号室を、ひと月ほど、仮の住まいとするとのことだった。

なるほど同世代の僕達と合わせたという訳だ。人の良い大家さんだから、気を遣ったに違いない。

大家さんの娘である大屋詩織と同じ中学校に通っているようなので、意外と繋がりがあった。

この前あの五月蠅い詩織と愛菜が楽しそうに会話をしていたのを見た。何だか色々とは異質だと思う。

やはり人懐っこい性格のせいかな、もうスッカリ仲良くなってしまっている。

今日なんかも、花子と詩織との3人で、買い物に出掛けている。洋服を買いに行くとか言っていた。

愛菜にファッションセンスがあるのかどうかは微妙だが、実に楽しそうに出掛けて行ったから、別に気にしない。

因みに僕は一緒に行く訳にもいかず、自宅のパソコンで楽曲整理をしていた。

食材の調達は花子に頼んであるから、スーパーに行く必要もなく、暇だったのだ。

そうして音楽端末を同期させ、歴史に関する本を読みながら聴こう

としていたところ。

久しい人から、電話があった。

「仁くん。私だ。分かるな？」

久しい人とは、天野教授のことである。

「はい。どうしたんですか、急に……」

携帯にかかってきたものだから、画面に予めその名が表示されていた。だから僕は、比較的冷静に尋ねる。

ただ、緊張感は高まった。

なぜなら、天野教授からの電話が『良い話』であったことがないからだ。

僕は厭に思う自分を説得しながら、耳をたてる。

「……大体感づいてると思うが……『巡り者』について、ちょっとな……」

案の定、だった。

「どうしたんですか？ ……やっぱり、また、顕れたんですか？」

僕はそう推測した。

それがまだ宇宙局にいるらしい天野教授が、僕に連絡をする最も尤もな理由であるからだ。

けれど、

「君には、蛇神と川神に対峙して貰った。それを、今日はただお礼したかったんだ」

「え……？」

天野教授は肯定せずに、ただそう言った。

何で今更そんなことをいうのか。

僕達にしか神殺しは出来ないし、花子の事もあって大儀は揃っているというのに。そもそも僕自身、神に狙われているのだから、尚更だ。

「いや、思えば俺は君に一度もお礼を言ったことが無かったと思ってね。ただ、それだけだ。俺からの電話に違和感あるかもしれないが……まだ動物神が顕れたっていう海部さんの連絡もないから、安

心してくれていい」

「そういう訳で、君には感謝している。有難う。私は当分この島から帰れないが、これからもよろしく頼む」

そして、電話が切れた。

ほんの短い時間の通話。

なぜだか不気味に感じた。

「＊」

そうだ。

あの電話があったから僕は、未来に不安を抱いたのだ。

八岐大蛇と河童は正直言って、痛手は負ったが、直接的に被害が出ていない。

出現場所や危害などいずれにしろ、融通が効いていて、目の前で死者が出たりはしていなかった。

その為に僕は樂觀してしまふようになっていた。

それは単なる幸運だったのに。

だから僕は、力が欲しいと願った。これからどんな動物神が顕れたとしても、僕が目守れるように。

意味深な教授の電話は、僕に危機感を与えたんだ。

そして今に至る。

力を欲して大和爺さんの元を尋ね、不在だった為に井戸に興味を持ち、

開けた瞬間に死体の臭いに襲われ、海部紅に背後から話し掛けられた。

そんな、今に至る。

「見ちゃったね……ナカツ君」

僕は即座に感知した。

井戸の中から放たれる腐った臭い。醗酵食品を更に腐敗させたような、刺激的な臭い。

これは、人間の死体だ。

井戸の奥にそれがある。

紅の発言も、裏付けになっている。

そう理解すると、僕は恐怖を感じた。

紅の表情が悲愴であった為だ。

とても、恐ろしいほどに。

「あゝあ……バレちゃったか……」

「あか……り？」

紅は冷酷でいて、感情の見えない表情で目線を落とす。

「ホントはさ、もっと一緒にいたかったんだけどね……。仕方ないか……」

続けて、よく分からない言葉を紡ぎ始める。何と無く、名残惜しんでいる様子。

枯れ葉が一枚、僕と紅の間に舞った。暫く続いた硬直に耐えられなくなつたのか、立て続けに赤く色づいた葉が風に乗る。

当然、紅の音波も風に乗る。

「ごめんね……今まで騙してて」

映像が一時停止。

その直後。

余りに速過ぎた為に、コマが切り替わる錯覚を感じた。

紅の身体が目の前に迫る。

残像さえ見えない速さだった。

「もう……全部終わりだよ」

その言葉と共に、腹部に衝撃。

激痛の後に、胃酸の味。

急激に加わった初速度に耐え切れなくなった両足は崩れ、そのまま

後ろに倒れ込んだ。

紅に一発貰ったのだ。

非常に強い突きであり、一発でも体術の経験の無い僕のHPは、レッドゾーンに突入した。

死体は誰なのか。

紅の発言の真意は何なのか。

それを疑問に抱く前に、
目の前が真っ黒になった。

今までもよく分からなかった紅。迷宮に閉じ込められる感覚がした。
「もうどうでもいいや。どうせいつかは、こうしなきゃいけないかったんだし」

紅の聞いたことのない低い声を最後に聞き、意識を失う。

〔＊〕

過ぎしやすい秋の陽気の中で、心地好い風が吹いています。

最近ようやく噴火活動の収まってきた火山を遠景に、澄んだ空気が町並みの軽快さを演出しているようです。

大根が名産で、カルデラとしても有名な九州一の知名度を誇るその火山の東側。

そこに位置する駅前街に、私達3人は繰り出していました。

今は洋服屋さんにあります。

やはり女の子とあって、この服は可愛いとか、合わせがどうだとか、そんな些事で盛り上がっています。

ただ愛菜ちゃんのセンスはちょっとズレてるみたいです。

「ややややっ！ これはしーちゃんにピッタリではありませんか。これは着てみるしかないなりっ」

「どれどれ……って何よコレ！ 『靴下の中で寝てるハムスター』のキャラTシャツって、あんたどんなセンスしてんのよ！ しかも古すぎっ。とっくに放送終わったわよっ」

今も、愛菜ちゃんがセレクトした一枚のTシャツを、詩織ちゃんがメッタ斬りしています。

一応言っときますが、『しーちゃん』とは、詩織ちゃんのことだそうです。

「だいたいこんな幼稚園児用の服、小さすぎて着れないわよ……。アンタ達みたいにアタシは小学生体型じゃないの」

私は詩織ちゃんが続けて言い放った言葉に、納得いかない表現が含まれていたことに気付き、応酬します。

「ぬっ……アンタ『達』みたいにな？ ……それは私も小学生だったことかな？ 一応最年長なのに」

語尾に（怒）が付く程の声でいいます。

「なによ、ホントのこと言っただけじゃない。アンタも心がせまいのね」

「これだから反抗期はー」

「うっさい！ 餓鬼扱いしたら殺すわよ！」

「……詩織ちゃん、すっかり元通りだね」

「は？ 何言ってるのよ？」

『元通り』という言葉に、首を傾げています。そうでした。

覚えてないんですね、詩織ちゃんは。

私は詩織ちゃんの、『あの』しおらしかった姿を思い出して、苦笑してしまいます。

あの時の、詩織ちゃん。

私は、らしくない彼女の姿を鮮明に覚えています。この詩織ちゃんが、あんなにもか弱くなるなんて、衝撃的でしたから。

ま、本人は何も覚えてないのですが。

「はっ！ ということは、愛菜ちゃんと同じ小学生体型のはっちゃんなら、着れるでありますっ」

そう考えていると、愛菜ちゃんがその服を私に押し付けてきました。無論、拒否します。

……どうもこいつも失礼ですね。

年上のお姉さんに小学生とは。これはお仕置きモノです。

「じゃあ、とりあえず愛菜ちゃんが着てみるなりっ。……って、バスのサイズが合わないっ！ これでは胸のところで着れなくなるでありますっ」

「な……なぜだか屈辱的！」

「当たり前じゃない。こういうのは、まだペタンコの子供が着るもんなのよ。伸縮性がなくて当然よ」

「詩織ちゃんまで……。私のカラダを馬鹿にしてー！」

「アンタの発育が悪すぎんのよ……。っていうか、アンタ達。さっきから色んな人に見られてるのは、気のせい？」

「へ……？」

騒ぎ過ぎたのでしょうか。

通路の両側にはズラリと洋服がハンガーにかけられていますが、基本的に店内中を上から伺うことが出来ます。

周りを見ると、明らかに老若男女問わぬ色々な人の視線を感じ取ることが出来ました。

愛菜ちゃんの首にいた錦蛇はお留守番をしているそうですし、私達の見なりを鑑みても、憂慮するべき点はありません。

私達のようなキャラの濃い三人が街に出たら、白い目で見られる、とかジンが言っていた気もしますが、関係ないでしょう。

別に私は、そう思っていないませんし。

よって原因不明瞭。

ここは、早く退散する方が吉ですね。

携帯電話を開いて時間を見ると、もうお昼でした。

「じゃあさー、もうお昼行こ。私お腹減ったし」

「そうね、服も大体買ったし」

「了解でありますっ」

別のお店で買った服の紙袋を示しながら、2人は同意してくれます。愛菜ちゃんが、始動の遅い自動ドアにぶつかりそうになるのを面白く思いながら、私達は、外に出ました。

外に出ると歩行者天国用に改築されたばかりの広い道が、南北に伸びています。

両側には店舗が綺麗に整備され、モダンな雰囲気が漂っています。随分過疎っていたこの道にも、ちらほらと人が見えています。

確か国の『地方中心部都市化計画』なるものの指定を受けていて、整備を進めているのです。

都会に出て行きたがる人を、地方の中心街の都市化を進めることに

よって、引き寄せようという策略だと聞きました。

ま、計画が広く認知されていない時点で、成果がイマイチになるのは見え見えですが。

ファミレスにしよう、という話になり、最も近い所を探し歩きます。

「んー、無いねー」

「っていうか、何か急に暑くなってない？」

「きっと歩いたからでありますっ」

暫く探し求め、歩いていると、詩織ちゃんが訴え始めました。

「朝出てくる時はこんな暑く無かった気がするんだけど……」

「確かに、少し暑くなったかもねー」

九州といえども、朝は冷え込みが激しいものですから、今日は重ね着をしてきたのですが、失敗したかも知れません。

朝は10℃を下回っていたのですが……

お日様の力は絶大ですね。

詩織ちゃんの鼻の頭には、汗が見てとれます。

汗っかきみたいです。

「あそこに温度計がありますっ！」

結局駅の目の前まで歩いていくと、ファミレスが数軒並ぶ空間に辿り着きました。

時計と温度計が組み合わさったオブジェがあったので、温度を覗いてみます。

現在の温度は……

えっと……30℃？。

「さんじゅうど!？」

正確には、30・6℃。

その値に反応して詩織ちゃんが叫びました。

アンビリーバボーと言った感じです。

無理ありません。

だって朝は10℃を下回る位に、冷え込んでいたのです。

よく周囲を見てみると、サラリーマンらしき人達はスーツを脱ぎ、

腕を捲っていました。

どうやらこの暑さは本物のようです。

「じゃあさー。早くファミレスの中入ろー」

「了解っ！ 北川愛菜、店内へ侵入するでありますっ」

この調子だと、店内は冷房を効かせていることでしょう。

避難の意味も含めて、私はファミレスに入ろうとします。

その途中。

「！ わわわっ！」

「……っっ！」

私達は体に大きな振動を感じて、その場にしゃがみ込んでしまします。

一瞬、地震かと思いました。

けれど、違います。

物凄い轟音がしました。

爆発音の次に、

ゴゴゴゴという、地鳴り。

私は直感的に、ある方向を見ます。

そこにあるのは――

例の火山が、大噴火を起こしている風景。

それがどうした、と思うかもしれませんが。

それに噴火自体はそう珍しくありません。

でも、オカシイのです。

溶岩が、

・・・・・・・・・・・・・・・・

鉛直方向に吹き出しているなんて、

どうみてもオカシイのです。

まるで、曼珠沙華。

尋常じゃない量の溶岩が、天を貫くが如く噴出しています。

そして。

・・・・・・・・・・・・・・・・

溶岩が拡散し、雨のように降り注ぎます。

「あちちっ！」

自由落下する溶岩が、さっきのサラリーマンを襲っています。

また、地上に赤い落下物が次々と着地し、その周りを溶かしています。

ごく微量ですが、このままでは、火傷だけでは済まなくなりそうです。

私は考えました。

この異質な噴火。

『巡り者』の仕業に違いありません。

また巡り者が顕れ、火山を噴火させた。

そう推測した私は、まずはこの噴火による被害を防ぐ為に、紅さんに連絡をとるべきだと考えます。

炎を司る天火明命アメノホアカリの力ならば、マグマもとい溶岩を操作出来るはずなのです。

しかし。

予想外なことが起きます。

「だ、誰でありますかっ？」

愛菜ちゃんの声につられて後ろに振り向くと、ある人が、愛菜ちゃん含む私達の前に立っていました。

ある人とは――紅さん。

私は突如現れた予想外の来訪者に困惑しながらも、都合が良いと思いい、紅さんに話しかけようとしています。

しかし、

重ねて予想外なことが起きました。

「ごめんね……花ちゃん……」

その声が発声されるのと同時に、どこかで見覚えのある巨大な炎の手。

訳が分かりません。

紅さんが右手を振り落とすと同時に、私達3人は、その手に飲みこ

まれます。

灼熱地獄に堕ちるのです。

いつか私を守ってくれた核火之右拳が、脅威になったのです。

紅さんの様子がオカシイとか、そんなことを考えている暇はありませんでした。

ただ、熱かったのです。

〔＊〕

幼い頃から、恵まれない子だったと思う。

父は実家の神社の神主で、厳格で、昭和を象徴するような人。

神に仕える立場にあるのに、売られた喧嘩を大人買いするような、好戦的な性格をしていた。

古きよき日本を大切にする人で、自分より年上の人になで説教してしまうのに、懸念を抱いたのは一度や二度ではない。

対して母はおしとやかで、父を黙って支えるような人。

全てを受容して暖かく見守ってくれる、巫女さんという印象に合致していた。

落ち度など微塵もない、理想の母である。

ただ、病弱で子宮癌を患っていたのが、唯一の心配事だった。

そんな夫婦の事だから必然的に『第一子は男の子』という願望を持つ。

父はスポ魂アニメの様に、男の子にスポーツをさせたいと思っていた。

母は子宮癌の為にチャンスが乏しいから、ぜひ長男を産んで、『神社の跡取り』にさせたいと考えていた。

最近では男尊女卑の傾向は失われつつあるけれど、日本神道を継承する一族として、長男の存在は必要不可欠なモノだったのだろう。

しかし産まれてきた私は――女。

両親は失意の色は隠せなかったが、そこはやはり自分達の子供。

私は深い愛情を与えられながら、育てられた。

女の子らしく、可愛いピンクの服も着たし、おままごともした。

アニメも、漫画も、普通の女の子が見るようなものを見て、いつも女の子の友達と遊んでいた。紛れも無い。

私は女の子として、毎日を過ごしていたのだ。毎日が楽しかったのを記憶している。

特にぬいぐるみが大好きで、抱きしめながら寝ていたのを、鮮明な記憶として残っている。

お気に入りぬいぐるみがほつれて、中の綿が出て来るまでいつも一緒にいた。

あの感触が心地好くて、そのキャラクターと夢の中で逢えるのではないかと期待したものだ。

実に、懐かしい。けれど。

けれども、そんな日々はある日終わりを迎えた。

久坂玄瑞の教典

私が小学校に入ってから、初めて夏休みを迎えた頃だっただろうか。例年一年生が育てる朝顔に水を与えていた記憶があるから、多分そうだろう。

珍しく父が、頭を抱えて棒立ちになっていたのを思い出す。頑固な父の、絶望の表情。

笑顔よりも稀少な表情だったので、ある意味衝撃的だった。母の子宮癌が再発。

子宮を全摘出する運びとなった。

そうして困るのは――

神社の跡取りだ。

神主は血の継いだ男でなくてはならない。

だが、母はもう子が産めない。

養子や、卵子を提供して貰うなど、一般的には手立てはまだある。

しかし伝統と由緒のあるこの神社の場合、NGだった。

もはや、どうしようもない。

それが解ると、父と母は深く失望した。

今度の失望は態度に現れるほど大きい。

両親の態度の変質ぶりは、目に見える。

『お前が男に産まれていれば……?!』

『何で女の子に産まれたの……?!』

口にはしないけれど、罵倒の声が脳裏に甞する。

私は幼い心ながらも、強い罪悪感に苛まれた。

父が母を殴っていたのを目撃したとなれば、決定的である。

父は私が男として産まれてこなかった責任を、母に課せていたのだと思った。

私のせいだと、思わずにいられない。

その夜は胸の鼓動が耳障りで、眠れなかった。

いつも抱いているぬいぐるみで涙を拭う。

『私は、男に産まれてこなくちゃならなかったんだ……』

そう思うようになって、悲しくなった。

けれども、両親に見捨てられたくない一心で、意を決した。

私は、男の子になるんだ。

私は、きっと自分が男の子になることで、両親が認めてくれると信じていたんだ。

何の解決にもならないのに、

当時長かった髪も短く揃えた。

何の解決にもならないのに、

無理して男児向けの番組を見た。

女の子が番組は、見るのを止めた。

何の解決にもならないのに、

大好きだった人形達を、ゴミ袋に捨てた。

厭だった。

でも、私のせいで家族が崩壊するのは、もっと厭だった。

服装。色。道具。口調。仕草。

ありとあらゆるモノから女の子らしさを消し、男の子を追求した。

とても短期間に男の子に豹変したものだから、『小学生になって変わった』なんて言葉をよく小耳に挟んだ。

それが未来に、悲劇を産むとも知らずに。

小学生も高学年になるとやはり、好きな人くらい出てくる。私だって人間なのだから当然だ。

無論、相手は男の子。

いくら男の子として生きようと決意しても、そういった生理的思考は変えられなかったのだ。

その思いはどうしようもなくなるまで膨らむが、私はどうしようもない。

だって私は男のようにずっと振る舞ってたんだから。そんな気色悪い私に、構ってくれる筈がない。

道化ぶって告白なんかしてみたりたけど、案の定『冗談だろ?』とあしらわれた。

それに、私は虐められてもいた。

それが私の苦悩をますます大きくする。

あだ名は『オトコ女』

ガサツで、オチャラケていて、男のようにいつも振る舞っていたから、つけられたのだろう。

油性ペンで教材を塗り潰されたり、

プロレスと称してリンチされたり、

上履きに画鋲を仕組まれたり……。

皮肉なことだ。

虐められても強い男を演じ、気丈に振る舞っていたものだから、私は『打たれ強い』と思われていたのだろう。

虐めは救いの手が差し出されることもなく、エスカレートしていくばかりだった。

ホントは、厭だったのに。

辛かったのに。苦しかったのに。

それでも、耐えた。

いつしか認めて貰える日が来るはずだと、いつしかこの苦痛が幸福に変わる時が来るはずだと、ずっと、必死に耐えていた。

そんな努力は、

報われないのに。

中学校に上がってすぐのことだった。

中学生といっても、殆どは地元の小学校からの繰り上がり。メンバーは全く変わらないといっている。

だから、必然的に虐めも続く。

寝室の枕が、濡れなかった日はなかった。

学校以外は、無機質なデザインしかない自室に引きこもるようになる。ベッドにずっと伏せているのだ。

そうするしか、逃避する術がなかった。

ベッドの上が、無心になれる唯一の場所であつたのだ。

その唯一の避難場所で『悲劇』は起こる。

私がこんな状況になったのは、虐めのせいだ。

虐めを受けているのは、私が女の癖に、男のようにしているからだ。男のようにしているのは、男児を必要としていた両親に対する引け目からだ。

私は両親の為に、努めた結果今にある。

まさか、その両親から、あんな仕打ちを受けるなんて……。

思いもしなかった。

気持ち悪い。

あの日のことを追想しようとすると、吐き気がする。それに、拳を握りしめずにはいられない。

申し訳ないが、不快に思う奴は次のページを見ないで欲しい。私自身、振り返りたくもないし。

父親に犯された。

ああ、本当に気持ち悪い。

あの感触は、

あの破瓜の痛みは、

ナニモノにも形容しがたい。

笑う奴は笑ってくれ。

私の家族は

狂ってるんだ。

父親が娘を犯した。

その上それを唆したのは

母親なんだって。

ホント、狂ってるよ。

今考えれば、あの行為も一つの選択肢だったのだ、ということに気付く。

ただ私は常識的に考えて、そんなことは有り得ないとタカを括ってたんだ。しかし、それは浅はかだった。

神社の跡取りは、

血の継いだ嫡子でなければ困る。

ただ、逆に言えば、

・・・・・・・・・・・・・・・・

血の継いだ嫡子ならば、誰だって良い。

あまり知られていないかもしれないが、日本神道の思想に『近親愛の禁忌』という概念はない。

仏教。基督教。マニ教。

ありとあらゆる宗教によって禁忌とされたその概念は、古来の日本にはなかったのである。

つまりは、6世紀に五経博士が儒教を齎した際、ようやく伝わった思想。

それは、日本書紀に記されている『軽部梨神子』伝説からもよく解る。

実家の神社は、神仏習合の影響も受けなかった由緒正しい日本神道の神社である。

つまり、私と父の間に産まれた子供でも、何ら問題は無かったのである。

全く、マイっちゃうよ。

私は両親に認められたくって、尽くしてきたのに、両親は私を『種馬』程度にしかみてなかったんだ。

まさに『種馬』だ。

私は幼心に、私が男の子として生きれば両親が認めてくれるのではないかと思っていた。

女として産まれてしまったこんな私でも、いつしか両親が暖かく受け入れてくれると、信じていた。

だから、頑張って自分の中の女の子を出さないように、監獄に閉じ込めていた。

けど、この有様は何だ？

私は両親に好かれないが為に、男の子になるようにした。

辛かった。

虐められて。

苦しかった。

女の子を閉じ込めて。

男の子を演じて。

なのに……

なのにっ！

私の今までは、人生はっ！

そうして考えた。

行為の後、様々なモノで濡れた布団に不快感を抱きながら、静かに考えた。

『このままではいけない』と。

『種馬』として父の子を産むなど、言語道断だと。

そうして考えた。

両親を、殺すしかない。

その結論に至ると、私は自分自身の中に吸い込まれる感覚を抱きながら、意識を失った。

それと同時に、真っ白な空間で目覚める。

暫く困惑していると、

360度何もない空間に、大量の文字列。

私は、図らずもその正体をする事が出来た。

火罪明尉藁血悪傷溺慈悲肉姦亡痛狂背徳膿死怨念淫近恨天絶望炎泣
厭嫌火尉藁血悪傷溺肉姦亡炎泣厭嫌罪明尉藁恨死怨念淫近恨天絶望
親恨憾狂背徳膿死怨念淫近恨天絶望傷溺肉姦亡炎泣厭嫌罪明尉藁恨
恨炎泣厭嫌火罪明尉藁傷溺慈悲恨背徳膿死淫近恨天絶穂神社宮崎県西
早良臼杵郡高千新田神社県薩内市土神社都千代射水神社山高岡諫早
祀埋葬地筑紫可愛山陵伝承地南九各地明治政府旧薩藩学意参篠崎考
治島県川社可愛山陵治他向三陵鹿児島県内治者宮内查東臼杵郡北可
愛岳山麓古墳愛山陵伝承地崎県西都市西都原古墳群男狭穂塚を可愛
山陵参考稀坂出眞田倭帖娜腹茶竅蠱蛙鰕畠踰踰太巴手楹軼質葉

貳缶嗽霧瘤鍛瑩玻咲棧谷稗頗麻高呶穗妬嫁腦柢驗鳴怒筆禾早奎杷預
肚南葩英華花埤滕金穗神社宮崎県西早良臼杵郡高千新田神社県薩内
市土神社都千代射水神社山高岡諫早祀埋葬地筑紫可愛山陵伝承地南
九各地明治政府旧薩藩学意参篠崎考治島県川社可愛山陵治他向三陵
鹿児島県内治者宮内查東臼杵郡北可愛岳山麓古墳愛山陵伝承地崎県
西都市西都原古墳群男狭穂塚を可愛山陵参瘤鍛瑩玻咲棧谷稗頗麻高
呶穂妬嫁腦柢驗鳴怒筆禾早奎杷預肚南葩英華花埤滕金哉棧棚店倭梁
殻神暈夜富仁把古事記天穂神社宮良臼杵郡高千新田神社県薩内市土
神社都千代射水神社山高岡諫早祀埋葬地筑紫可愛山陵伝承地南九各
地明治政府旧薩藩学意参篠崎考治島県川社可愛山陵望親恨痛苦傷溺
肉姦亡炎泣厭嫌罪明尉藁恨死貞憾狂背徳膿死怨念淫近恨天絶望恨背徳膿淫近恨天絶望親
泣厭嫌火罪明尉藁悲肉姦痛苦貞憾狂炎泣嫌火罪明尉藁血惡傷溺慈悲
肉姦痛苦貞憾狂背徳膿死怨念淫近恨天絶望恨背徳膿淫近恨天絶望親
恨痛苦貞憾

リヨウシンヲコロス

私は、絶大な力を手に入れた。

躊躇いがなかった訳ではない。

しかし私はその日の内に、二人をやった。

正直本気ではなかったのかもしれない。多少痛い目にあわせてやろうと、軽々しく考えていたのかもしれない。

でも、怨念の炎は制御出来なかった。

両親は炭と化し、目の前に転がる。

それを暫く無心で眺める。

やがて、涙が溢れてきた。

私はこの両親が大好きだったのに。

大好きだったから、認めて貰いたくって、頑張ったのに。

本当は、女の子として生きて、両親と仲睦まじく、暮らしたかったのに。

そう悲観していた時だった。

長身の男が、私の眼前に現れたのは。

「俺と一緒に、やり直さないか？」

男は言った。

「俺の言う通りにすれば、やり直せる。お前のその炎を使ってな…

…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4510u/>

コノハナの教典

2011年10月9日09時06分発行